

かにひ あぢさひ さこく すみれ をはぎ わらび ゑぐ ゆり あゐ
あさきかづら ひかげ 山たち花 すげ さゝ あふひ みくり よもぎ
こけ いちし しば
【異同】あさきかづら—まさきのかづら(大)

虫

むし せみ なつむし きりくす まつむし すゞむし ひぐらし ほたる
はたおりめ くも てふ
【異同】ナシ

木

き しほり はな あきの花 もみぢ はゝそ まゆみ かへで まつ
かへ たけ たかんな むめ こんばい やなぎ さくら かばぎくら 山
ざくら にはざくら ひざくら ふぢ たち花 あつたち花 ざくろ なし
山なし もゝ すもゝ からもゝ くるみ すぎ むろ ま木 かつら
かうか あふち かし くぬぎ つばき かしは ほゝがしは ながめがしは
つゝじ いはつゝじ ひさぎ くは はたつもり しきみ あせみ 山ちさ
ゆづるは かたかし つまゝ さねき
【異同】こんはい—こうはい(大) かはざくら—コノ次ニ小サク補入ノ印ガアリ、「はなざくら」ト傍書(御)
あつたち花—あへたち花(御)

鳥

とり はまちどり ひなどり かも つる かり うぐひす ほとゝぎす
ちどり よぶこどり しぎ からす さぎ はこどり かほどり かさゝぎ
もず くひな
【異同】はまちどり—はなちどり(御) くひな—コノ次、末尾ニ「つはくらめ」ガ加ワル(大)

古今和歌六帖第一

歳時

春立日	親月	元日	残雪	子日	若菜	白馬	仲春	弥生	三日
暮春									
初夏	更衣	卯月	卯花	神祭	早苗月	五日	菖蒲	皆尽月	祓
夏尽									
秋立日	早秋	七夕	後朝	葉月	十五夜	駒牽	長月	九日	秋尽
初冬	無神月	霜月	神樂	師馳月	仏名	潤月	歳暮		
【異同】	弥生—三月(大)		無神月—神無月(大)						

天

漢渚	照日	春月	夏月	秋月	冬月	雜月	三日月	夕月夜	有明
夕暗	星	春風	夏風	秋風	冬風	山下	嵐	雜風	雨
寒雨	夕多千	雲	露	志津久	霞	霧	霜	雪	霰
煙	塵	雷鳴	電	景呂不					
【異同】	白雨—村雨(大)								

春たつひ

古春上
一 としのうちに春はきにけりひとゝせをこそとやいはんことしとやいはむ
あり原もとかた

【異同】ナシ

【現代語訳】年内に春は来てしまった。この同じ一年を去年と言おうか、今年と言おうか。

【語句】◎春たつひ 立春の日。「はる立つ日よめる」(後撰集・二)、「立春日」(友則集・一)などと、詞書に立春の日のことを詠んだ歌であると示す例が見られる。礼記・月令には「立春之日……以迎春於東郊」(立春の日……以て春を東郊に迎へ)とある。「立春」と「春立つ」については、新井栄蔵「万葉集季節観考—漢語へ立

春」と和語（ハルタツ）——『万葉集研究 第五集』塙書房、一九七六年）に詳しい。○としのうちに春はきにけり 年内、すなわち暦の上ではまだ旧年中に、立春になったことを表す。いわゆる年内立春。所載欄の古今集・一の詞書に「ふるとしに春たちける日よめる」とある。年内立春を詠んだ先例に「月よめばいまだ冬なりしかすかに震たなびく春立ちぬとか」（二十三日に、治部少輔大原今城真人の宅にして宴する歌一首）・万葉集・四五六一（旧四四九二）・大伴家持）がある。菅原道真の漢詩にも年内立春に興を覚えた作がある（菅家文章・二七八、菅家後集・四九二）。当時、年内立春は一・七年に一回の割であった（神尾暢子「在原元方と立春映像——歳内立春と古今巻頭——」『王朝国語の表現映像』新典社、一九八二年）。○ひととせ 一年。同じ一年。「こゑたえずなげやうぐひすひととせにふたたびとだにくべき春かは」（古今集・一三二）。

【所載】古今集・春上・一／和漢朗詠集・三／寛平御時中宮歌合・三／後六々撰・九八／定家十体・一六〇／奥儀抄・一三三／古来風体抄・二一五／三五記・九九／桐火桶・三八／沙石集・九

【参考】作者名「在原元方」は、古今集等所載欄の文献に一致する。

同 二 そでひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん 紀つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】袖を濡らして手ですくった水が凍っていたのを、立春の今日の風が解かしていることだろうか。

【語句】○そでひちて 水につかって袖が濡れる状態。「ひつ」は、「つかる」「ぐつしよりと濡れる」意の自動詞（山内洋一郎「動詞「漬つ」について」『国語学』一九六四年十二月）。「かりてほす山田のいねの袖ひちて植ゑしさなへとみえもするか」（貫之集・四三九）。○春たつけふの風やとくらん 礼記・月令「孟春之月……東風解冻」（孟春の月……東風凍を解く）に拠り、立春解氷を詠んだもの。なお、従来の通説通り礼記・月令を典拠とすることについては、中野方子「魚袋」の歌と詩と——侍宴応制詩から歌へ——『平安前期歌語の和漢比較文学的研究』笠間書院、二〇〇五年）に詳しい。「みづのおもにあやふきみだる春風やいけのこほりをけさはとくらん」（後撰集・一一・紀友則）。

【所載】古今集・春上・二／新撰和歌・一／和漢朗詠集・七／俊頼髓脳・九七／奥儀抄・四三三／袖中抄・八六四／古来風体抄・二一六／和歌色葉・二二八／桐火桶・三九

【参考】作者名は所載欄の古今集等の「紀貫之」に一致する。

夏に袖を濡らして手ですくった水が、冬になって凍り、それを立春の日の今日の春風が解かしているだろうという、一年間の季節の推移が表されている歌。また、「むすぶ」と「とく」との対比がある。「けふとくる水にかけてぞむすぶらしちとせの春にあはんちぎりを」（順集・一六四）は、古今六帖当該歌の影響下で詠まれたものか。

三 としのうちに春たつことをかすが野のわかなさへにもしりにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】年内に立春になることを、（暦だけではなく）春日野の若菜によってまでも、知ったことだよ。

【語句】○としのうちに春たつ 年内立春。一番歌参照。貫之集によると、延喜十二（九一二）年十二月二十二日のことで、当該歌は、藤原定方が、同母妹である尚侍満子の四十賀のために依頼した詠作。実は、満子の四十歳は翌年であって、醍醐天皇主催の満子四十賀も、延喜十三（九一三）年十月十四日に行われているのだが（日本紀略）、定方は年内立春により前年十二月に行ったものと考えられる。当時は立春とともに（新年となり）齢を重ねるとされていた。「春立つと思ふ心はうれしくて今ひとせのおいぞそひける」（拾遺集・一〇〇〇・凡河内躬恒）。○かすが野 春日野。大和国の歌枕。現在の奈良市街の東南部、春日山麓に展開する野。春の景物を詠むことが多く、若菜が特に多く詠まれた。春日の地には、藤原氏の祖神を祭る春日大社があり、藤原氏の賀を寿ぐのにふさわしい地名でもあった。○わかなさへにもしりにけるかな 貫之集の注釈書では、「若菜によってもまた知ったことだよ。」（木村正中『新潮日本古典集成 土佐日記 貫之集』新潮社、一九八八年）、「人々だけでなく、……若菜までが知っていたのだった。」（田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』風間書房、一九九七年）と、解釈が分かれている。「若菜」は、古今六帖では四三番歌から四九番歌までの題となっている。正月子の日などに、若菜を摘み不老長寿を寿いで食した。四十賀を正月子の日に行い、若菜を供した例として、延長二（九二四）年正月二十五日に宇多上皇が催した醍醐天皇の四十賀がある（西宮記など）。源氏物語（若菜上）に、玉鬘が正月子の日に源氏に若菜を奉り、四十賀を祝う例があるが、これは、醍醐天皇の四十賀を典拠とするとされる（花鳥余情）。若菜は、春日野の代表的な景物でもあった。「あたらしき春くるごとふるさとの春日の野辺に若菜をぞつむ」（能宣集・一二六）等、春になると春日野で若菜を摘むことが詠まれている。「に」は、「……で」「……によって」の意。「春の野に若菜つまんと来しものを散りかふ花にみちはまどひぬ」（古今集・一一六・貫之）。また、自然現象以外に立春を知るの暦によってである。「偏因曆注覚春来」（偏に曆注に因つて春の来る

を覚ゆ) (菅家文章・二七八)、「月よめばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか」(万葉集・四五一六(旧四四九二二)・大伴家持)。したがって、曆によるだけではなく、春日野の若菜によっても、年内に立春になることを知った、と解釈した。

【所載】新撰朗詠集・三／夫木抄・一八／貫之集Ⅰ・六八三

【参考】古今六帖には作者名はないが、貫之集等によると、作者は紀貫之。

四 ^{拾一春} 春たつといふばかりにやみよしのゝ山もかすみて今朝はみゆらん みぶのたぐみね

【異同】ナシ

【現代語訳】立春になったというだけで、み吉野の山も霞んで今朝は見えるのだろうか。

【語句】○春たつ 立春になる(二番歌参照)。霞は春の代表的な景物の一つであり、春になれば霞が立つと歌に詠まれた。「ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも」(万葉集・一八一六(旧一八一二))。○みよしのゝ山 吉野山のこと。「み」は、美称の接頭語。吉野山は大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡の山々。雪が景物として知られるが、また霞も詠まれた(斎藤照子「春日」と「吉野」『赤染衛門とその周辺』笠間書院、一九九九年)。「吉野山峯の白雪いつきえてけさは霞の立ちかはるらん」(拾遺集・四・源重之)。

【所載】拾遺抄・春・一／拾遺集・春・一／金玉集・春・二／和漢朗詠集・八／新撰朗詠集・三／忠岑集Ⅰ・二七／忠岑集Ⅱ・一／忠岑集Ⅲ・一／左兵衛佐定文歌合・一／前五番歌合・七／秘藏抄・二／三十人撰・七一／三十六人撰・八〇／深窓秘抄・二／九品和歌・一／秀歌大体・三／俊頼髓脳・九八／奥儀抄・八七／古来風体抄・三四一／和歌色葉・六三／瑩玉集・四／近代秀歌・二八／詠歌大概・一／詠歌一体・四一／三五記・二二二、二五七／井蛙抄・一〇一／沙石集・一九一

【参考】作者名「みぶのたぐみね」は所載欄の文献に一致する。

五 ^{古一春上谷イ} やまかぜにとくるこほりのひまごとうちいづるなみや春のはつ花

【異同】ナシ

【現代語訳】山風によって解ける氷の隙間ごとにはとばしり出る波、これが春の最初の花なのか。

【語句】○やまかぜ 古今六帖での傍記異文によると、「谷風」の本文が伝えられ、古今集の本文でも「谷風」「山風」の異同があり、その他の文献でも両様の本文が存在する。春風によって氷が解けるといふ発想は、「孟春之月……東風解凍（孟春の月……東風凍を解く）」（礼記・月令）に淵源が見られる。古今六帖の配列では、当該歌も立春解氷の歌ということになる。山風については、「花の色はかすみにこめて見せずともかをだにぬすめ春の山かぜ」（古今集・九一）などと、春の山風が詠まれた例はある。谷風は、東風すなわち春風とされ、「氷だにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬ鶯の声」（拾遺集・六・源順）などと、氷を解かす春の谷風が詠まれている。なお、この歌の古今集における本文異同の問題については、奥村恒哉「たにかぜ」「やまかぜ」に関する諸問題——古今集と資料——『古今集の研究』臨川書店、一九八〇年）、増田繁夫「古今集の歌語——山風と谷風——」『論集古今和歌集』笠間書院、一九八一年）に詳しい。○はつ花 最初に咲く花。「あはゆきのこのころ継ぎてかく降らば梅の初花散りか過ぎなむ」（万葉集・一六五五（旧一六五二）・大伴坂上郎女）。当該歌では、波をその初花に見立てた。

【所載】古今集・春上・一二／新撰万葉集・二三九／金玉和歌集・五／和漢朗詠集・一六／寛平御時后宮歌合・二／寛平御時中宮歌合・一／俊頼髓脳・四九／和歌童蒙抄・一〇六／袋草紙・六一四／古来風体抄・二二三／八雲御抄・七二／桐火桶・四一

【参考】古今六帖に作者名はないが、歌合本文や古今集などによると、作者は源当純。なお古今集などの勅撰集では同じ作者の歌がつづく和二首目以降は作者名が省略される。従って当該歌のような場合は前歌の作者「みぶのたぐみね」が作者と判断されるが、古今六帖ではそうではない。またすべての歌に作者名が記されるわけではない。

〔以上五首担当 長戸千恵子〕

む月

大伴坂上郎女

六 うちのぼるさほのかはべのあをやぎのもえいづるはるになりけるかな

【異同】あをやきの—青柳（大）

【現代語訳】さかのぼって行く佐保の川辺に見える青柳の芽吹き始める春になったことだよ。

【語句】◎む月 一月。春のはじめの月。「正月立ち春の来たらばかくしこそ梅を招きつつ楽しき終へめ」（万葉

集・八一九（旧八一五）。○うちのぼる（川原を）さかのぼって行く。「君が代のかずにしとらばうちのぼるさほのかはらの石もたえじな」（永久百首・五一七）。○さほのかはべ 佐保川の川辺。佐保川は春日山中に発し、山麓の北側を迂回してから南下、平城京を南北に通り大和川と合流する。万葉集では「千鳥」と共に詠まれることが多い。「千鳥鳴く佐保の河瀬のさざれ波やむときもなし我が恋ふらくは」（万葉集・五二九（旧五二六））。○あをやぎの 新春の様を詠んだものとしては、万葉集に天平二（七三〇）年正月十三日に筑前の大伴旅人邸で催された宴会での「梅の花咲きたる園の青柳はかづらにすべくなりにけらずや」（万葉集・八二二（旧八一七））がある。○もえいづる 芽を出す。芽吹く。「もえいづるこのめを見てもねをぞなくかれにし枝の春をしらねば」（後撰集・一四）。以下、所載欄の万葉集では「今は春べとなりけるかも」とする。ここでは次の七番歌の下句と混同したかのような形をとる。

【所載】玉葉集・春上・八七／万葉集・一四三七（旧一四三三） 打上 佐保能河原之 青柳者 今者春部登 成尔鶏類鴨 ウチアグルサホノカハラノアヲヤギハイマハハルベトナリニケルカモ うちのぼるさほのかはらのあをやぎはいまははるべとなりけるかも／夫木抄・七四七

【参考】作者名は所載欄万葉集に一致する。

七 いはそくたるひのうへのさわらびのもえいづるはるになりける哉
志貴王子かゞみの王女とも

【異同】かゞみの王女とも―かゞみの王子とも（大）

【現代語訳】岩に注ぎかかりそうな氷柱のそばの早蕨が芽吹き始める春になったことだよ。

【語句】○たるひ 垂氷。つらら。「みねにひやけさはうららにさしつらむのきのたるひの下の玉水」（好忠集・六）。所載欄の万葉集では「たるみ」とあり、新古今集や俊頼髓腦、古来風体抄なども「たるみ」と伝える。一方で和漢朗詠集や綺語抄など「たるひ」と伝えるものも併存する。○さわらび 芽が出たばかりの蕨。「さわらびのおひいづるのべをたづぬれば道さへみえず空もかすみて」（能宣集・三五五）。○もえいづる 六番歌参照。ここでは「もえ（燃え）」と「さわらび」の「ひ（火）」が縁語。

【所載】新古今集・春上・三二／万葉集・一四二二（旧一四一八） 石激 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春尔 成来鴨 イハソクタルミノウヘノサワラビノモエイヅルハルニナリニケルカモ いはほしるたるみのうへのさわらびのもえいづるはるになりけるかも／和漢朗詠集・一五／夫木抄・八九〇／俊頼髓腦・一七一／綺語抄

・二〇一／和歌童蒙抄・五四〇／袖中抄・一三三／古来風体抄・八四／和歌色葉・七四／三五記・二三六
【参考】万葉集の題詞は「志貴皇子の權(よろこ)びの御歌一首」とする。

八 はるきぬとひといへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞおもふ
丹生のたぐみね

【異同】ひといへとも―人はいへとも(桂・大) 丹生のたぐみね―丹生たぐみね(大)

【現代語訳】春が来たと言はうけれども、鶯が鳴かないうちはそんなことはあるまいと思うよ。

【語句】○かぎり 時間的に、限定された範囲内をいう。うち。あいだじゅう。「秋の菊にほふかぎりはかざしてむ花よりさきとしらぬわが身を」(古今集・二七六)。○あらじとぞおもふ あるまいと思うよ。「おもふ」の主語は自分。二句目の「ひと」と対比する。

【所載】古今集・春上・一一／忠岑集Ⅰ・三三／忠岑集Ⅱ・五／忠岑集Ⅲ・五／忠岑集Ⅳ・一四／三十人撰・七三／九品和歌・九／奥儀抄・九五／詠歌一体・四三／三五記・二二三

【参考】作者名は所載欄の文献に一致する。表記「丹生」については古今集・善海所伝本の当該歌に「にふのたぐみね」とある(久曾神昇『古今和歌集成立論・資料編上』風間書房、一九六〇年)。

古一春上
九 かすがのゝとぶひのゝもりいでゝみよいまいくかありてわかなたつみてん

【異同】ナシ

【現代語訳】春日野の飛火野の野守よ、外に出て見ておくれよ。あと何日たてば若菜を摘むことができるのだろうかと。

【語句】○かすがのゝとぶひのゝもり 「かすがの」は奈良市の春日山のふもとの野。平城京からは東方の高台にあたり、烽火を置いて外敵に備えたことから「飛火野」ともいい、「とぶひのゝもり」で、この地の番人をいう。「かすがののゝとぶひののり見しものをなきなといはばつみもこそうれ」(後撰集・六六三)。○わかなたつみてん 「わかたな」は春先に見られる食用となる草の総称。宮中では正月の最初の子の日に若菜の羹を天皇に献上したこと、民間にもこの日に若菜を摘む風習が広まったとされる。「てん」は完了の助動詞「つ」の未然形に推量の助動詞「む」が付いたもので、可能の推量。……できるだろう。「梓弓おして春雨けふふりぬあすさへ

ふらばわかなつみてむ」(古今集・二〇)。

【所載】古今集・春上・一八／新撰和歌・二五／秀歌大体・六／俊頼髓脳・三一七／和歌童蒙抄・一一一／奥儀抄・四三八／袖中抄・三二二／和歌色葉・二二九／桐火桶・四二／悦目抄・二四

一〇 春同やとき花やをそきときわかむうぐひすだにもなかずもあるかな
藤原言直

【異同】ナシ

【現代語訳】春の訪れが早いのか、花の咲くのが遅いのか、と(その声を)聞いて判断しようと思っていた、その鶯でさえも、まだ鳴かずにいることであるよ。

【語句】○花やをそき 花やおそき。○きゝわかむ 鶯の声を聞いて判断しようの意。「む」は詠み手の意志を表わし、連体形。

【所載】古今集・春上・一〇／新撰和歌・一三／奥儀抄・四三九／古来風体抄・二二二

【参考】作者名は古今集に一致する。

〔以上五首担当 青木太朗〕

一一 いまさらに雪ふらめやもかげろふのもゆるはる日べとなりにしものを

【異同】ナシ

【現代語訳】今更雪が降ろうか、もう降るまい。陽炎のもえ立つ春の季節になつてしまったものを。

【語句】○雪ふらめやも 「めや」は推量の反語形。……だろうか……ではないだろう。○かげろふ 晴れた春の日などに地面が熱せられ、立ちのぼる水蒸気が光を受けてゆらめいて見えるもの。「かぎろひ」とも。○はるべ 春のころ。「べ」は「夕べ」の「べ」に同じ。上代では「はるへ」「ゆふへ」と清音。

【所載】新古今集・春上・二一／万葉集・一八三九(旧一八三五) 今更 雪零目八方 蜻火之 療留春部常 成西物乎 イマサラニユキフラメヤモカゲロフノモユルハルヘトナリニシモノヲ いまさらにゆきふらめやもかぎろひのもゆるはるべとなりにしものを／人麿集Ⅱ・二〇／人麿集Ⅲ・一／人麿集Ⅲ・二六／人麿集Ⅳ・一〇七／赤人集Ⅰ・一三四／赤人集Ⅱ・一七／赤人集Ⅲ・二〇／秀歌大体・一四

一二 うぐひすのふゆごもりしてむめるこははるのむ月のなかにこそなけ

【異同】ナシ

【現代語訳】鶯が、長い冬籠もりに耐えて生んだ子は、春の睦月を待ち得て、やわらかな産着に包まれてのどやかに鳴いていることだ。

【語句】○はるのむ月の「睦月」に「襦袢（産着）」を掛ける。「正月一日、子生みたる人にむつきつかはずとよめる めづらしく今日たちそむる鶴の子は千代のむつきを重ぬべきかな」（詞花集・一六二）。ここは鶯の雛が産毛に包まれているさまをいう。

【所載】夫木抄・三七七

ついたちのひ

拾一春

一三 あらたまのとしたちかへるあしたよりまたるゝものはうぐひすのこゑ

そせい法師

【異同】ナシ

【現代語訳】新しい年に改まった、その朝から、待たずにいられないものは鶯の声である。

【語句】◎ついたちのひ「ついたち」は、「月立ち」の意から、一日、特に一月一日、元日をいう。和歌では、新しい年を迎え、鶯や霞が詠まれて、春になる喜びが歌われる。○あらたまの年、月、春などにかかる枕詞。○としたちかへる 年が改まる。新年になる。○あしたより「あした」は朝の意。○またるゝものは「るる」は自発の助動詞。

【所載】拾遺抄・春・四／拾遺集・春・五／和漢朗詠集・七二／素性集Ⅰ・五〇／素性集Ⅱ・四一／素性集Ⅲ・三九／俊頼髓脳・二九一

【参考】作者名「そせい法師」は、所載欄の文献のすべてに一致する。

山辺あか人

一四 同

きのふこそとしはくれしかはるがすみかすがの山にはやたちにつけり

【異同】ナシ

【現代語訳】昨日、年は暮れてしまったばかり。それなのに、元旦の今朝は、早くも春霞が春日の山に立ち懸かっていることだ。

【語句】○きのふこそとしはくれしか 「…こそ…已然形」の形で気持ちがあとにつづく場合、逆接になる例が多い。「きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風の吹く」（古今集・一七二）。○かすがの山現在の奈良市、春日神社の背後一帯の丘陵地。

【所載】拾遺集・春・三／万葉集・一八四七（旧一八四三）昨日社 年者極之賀 春霞 春日山尔 速立尔来 キノフコトシハクレシカハルカスミカスガノヤマニハヤタチニケリ キのふこそとしははてしかはるかすみかすがのやまにはやたちけり／和漢朗詠集・七七／人麿集Ⅱ・一／人麿集Ⅲ・一四／赤人集Ⅰ・一四一／赤人集Ⅱ・二四／赤人集Ⅲ・二七／家持集Ⅰ・二／家持集Ⅱ・二／和歌十種・三一／和歌十体・一三／三十人撰・一／三十六人撰・一／深窓秘抄・一／秀歌大体・一／奥儀抄・一一七／柿本人麻呂勘文・三九／古来風体抄・九九、三四三【参考】作者については拾遺集においても「山辺赤人」とするが、万葉集では不明。所載欄の諸家集は問題多く、赤人である可能性は低い。

一五 きライのふよりのちツラユキをばしらずもゝとせのはるのはじめはけふにぞ有ける

【異同】ナシ

【現代語訳】昨日以前のごことは知りません。それはさておき、百年もつづく春のはじめは今日の元旦でした。

【語句】○きのふよりのちをばしらず 「昨日より後」では解しがたい。傍記異文や所載欄の拾遺集や貫之集により、「昨日よりをち（遠）」として考えた。

【所載】拾遺集・雑賀・一一五九／貫之集Ⅰ・一三九／奥儀抄・四四二

【参考】賀の屏風歌で、所載欄の文献により貫之詠と確認できる。なお貫之集Ⅰの詞書には、「延喜二年五月、中宮の御屏風の和歌廿六首、あつまりて元日さけのむ所」とあり、田中喜美春、田中恭子『貫之集全釈』では、その「延喜二年五月」を「延長二年五月」の誤りとし、

底本、諸本、及び拾遺集詞書（雑賀・一一五九）などいずれも「延長」を「延喜」とし、さらに、この屏風

歌を資料とした勅撰集入集歌も「延喜」としているが、家集のこの位置に延喜初年の歌が収録されるのは疑問。私見により「延長」に改めた。

とする。延長二年であれば醍醐天皇の中宮穩子はちょうど四十歳。前年の四月二十六日に女御から立后したばかりで、四十賀の屏風歌ということになるうか。なお冷泉家新出の素寂本「貫之集」は非常に特異な本文を持ち、納得できることが多いが、ここはまさしく「延長二年五月」となっている。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木哲夫〕

一六 あたらしくあくるこよひをもとせのはるのはじめとうぐひすぞなく

【異同】 あたらしく—あらしふく(大)

【現代語訳】 新しく(年が) 明ける今宵を「百年続く春の始め」と鶯が鳴いている。

【語句】 ○あくるこよひを (年が) 明ける今宵を。所載欄の風雅集では「あくるとしをば」。貫之集では「あくるとしをも」。○もとせのはるのはじめ 百年続く春の始め。賀意を表す。

【所載】 風雅集・賀・二二六八／貫之集Ⅰ・二二一八

一七 拾一春

よしの山みねのしら雪いつきえてけさはかすみのたちかはるらん

源しげゆき

【異同】 ナシ

【現代語訳】 吉野山の峰に残っていた白雪はいつの間にか消えて、(立春の) 今朝は霞が代わりに立っているのだろうか。

【語句】 ○よしの山 奈良県吉野郡吉野町にある山。四番既出。○けさはかすみの (立春の) 今朝は霞が。所載欄の三十人撰と深窓秘抄では「けふはかすみの」。○たちかはる 古いものが新しいものと入れ替わる。交替する。接頭語「たち」に「霞が」立ち」を掛ける。「たこの浦の風ものどけき春の日は霞ぞ浪にたちかはるらん」(続拾遺集・三三三)。

【所載】 拾遺集・春・四／金葉集三奏本・春・一／重之集・二二二／金玉集・三／玄玄集・二九／三十人撰・七四／深窓秘抄・三／古来風体抄・三四四

【参考】作者名「源しげゆき」は所載欄の文献に一致する。

一八 むめがえになきてうつろふうぐひすのはねしろたへにあは雪ぞふる
のこりのゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】梅の枝に鳴きながら飛び移っている鶯の羽を真つ白にして淡雪が降っていることだ。

【語句】◎のこりのゆき 春になって降る雪。また、春に消え残る雪。古今六帖では初春に降る雪の歌が並んでいる。○はねしろたへに 羽を真つ白にして。「しろたへ」は白い色。○あは雪 淡雪。春先などに降る消えやすい淡い雪。万葉集の沫雪（あわゆき）は降ったばかりの、沫のように溶けやすい柔らかな雪で、冬の歌にもみえるが、中古に入ると淡雪（あはゆき）と理解されるようになり、春の雪とされた。

【所載】新古今集・春上・三〇／万葉集・一八四四（旧一八四〇）梅枝尔 鳴而移徒 鶯之 翼白妙尔 沫雪曾落 ウメガエニナキテウツロフウグヒスノハネシロタヘニアワユキゾフル うめがえになきてうつろふうぐひすのはねしろたへにあわゆきぞふる／人麿集Ⅲ・六九／赤人集Ⅰ・一三九／赤人集Ⅱ・二二一

古^一春上

一九 かすみたちこのめもはるのゆきふればはなゝきさともはなぞちりける
つらゆき

【異同】このめもはるの—木のめをはるの（大）

【現代語訳】霞が立ち、木の芽もふくらむ春の雪が降るといって、花の咲いていないこの里にも花が散るように見えることだ。

【語句】○このめもはるの 「張る」は芽や根が伸びること。「春」と掛詞。「かすみたちこのめも」までが「はる」の序詞。「よも山にこのめ春さめふりぬればかぞいろはとや花のたのまん」（千載集・三二）。○はなゝきさと 花の咲いていない里。

【所載】古今集・春上・九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

凡河内みつね

二一〇 はるたちてなをふるゆきはむめの花さくほどもなくちるかとおおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】立春を過ぎてまだ降る雪は、梅の花が咲く間もなく散るのか、と思うことだよ。

【語句】〇はるたちてなをふるゆき 春立ちてなほ降る雪。立春を過ぎてなお降る雪。「うちきらし猶ふる雪も春たつといふばかりにや花とみゆらん」(玉葉集・三〇)。〇ちるかとおおもふ 所載欄の他文献では全て「ちるかとおもふ」。

【所載】拾遺抄・春・五／拾遺集・春上・八／躬恒集・三八五／左兵衛佐定文朝臣歌合・二

【参考】作者名「凡河内みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 三浦狭依〕

あか人

二一一 うちなびきはるさめくらししかすがにあまぐもきりあひゆきはふりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】春になって春雨が一日中降り暮らしている、それなのにまだ空には霧がたちこめて雪が降っていることよ。

【語句】〇うちなびき 枕詞。草木の枝葉が萌え出、伸びてなびき茂るので「春」に、なびく様子から「草」「黒髪」にかかる。〇はるさめくらし 春雨が一日中降り「暮らし」と春雨が降って「暗し」と掛ける。〇しかすがに それなのに。そうはいうものの。〇きりあひ 霧がたちこめ。〇ふりつゝ 降り降りしていることよ。「つゝ」は詠嘆の余情をこめて反復継続の意を表す。

【所載】万葉集・一八三六(旧一八三二) 打靡 春去来者 然為蟹 天雲霧相 雪者零管 ウチナビキハルサリクレバシカスガニアマクモキリアヒユキハフリツツ うちなびくはるさりくればしかすがにあまぐもきらひゆきはふりつゝ／人麻呂集Ⅲ・一三／赤人集Ⅰ・一一九／赤人集Ⅱ・三／赤人集Ⅲ・一八／綺語抄・五八／和歌童蒙抄・九五

【参考】作者名「あか人」とあり、赤人集には当該歌があるが、人麻呂集にもあり、万葉集には作者名なしで載

る。

二二一 はるがすみたちよらねばやみよしのゝやまにいまさへゆきのふるらん
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】春霞がたちよってこないから、それで吉野の山には今でも雪が降っているのだろうか。

【語句】○たちよらねばや 立ちよらないからか。「たち」は春霞立ちと、立ち寄るの掛詞。○みよしの 大和国の歌枕。奈良県吉野川流域一帯をいう。「み」は美称。吉野山の桜、雪、吉野川の滝瀬などが歌に詠まれる。

○いまさへ 今でも。○ふるらん 降っているのだろう。「らん」は目前に見えないことを推量する助動詞。

【所載】貫之集I・二〇一

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

二三 うちきらしゆきはふりつゝしかすがにわがいのそのにうぐひすぞ鳴
巳下十一首無之イ あか人

【異同】ナシ

【現代語訳】空全体を曇らせて雪は降り続けている、それでもさすがに我が家の庭では鶯が鳴いている。春なのだなあ。

【語句】○うちきらし 空全体を曇らせて。「うち」は接頭語。「きらし」は「霧る」の他動詞形。○ゆきはふりつゝ 「つゝ」は同じ動作の反復される意を表す。○しかすがに そうはいうものの。

【所載】後撰集・春上・三三／拾遺集・春・一一／万葉集・一四四五(旧一四四一) 打霧之 雪者零乍 然為我二
吾宅乃苑尔 鶯鳴裳 ウチキラシユキハフリツツシカスガニワギヘノソノニウグヒスナクモ うちきらしゆき
はふりつつかすがにわぎへのそのにうぐひすなくも／夫木抄・三七五／綺語抄・五九

【参考】作者名「あか人」とあるが、所載欄の後撰集はよみ人知らず、その他の文献すべて大伴家持とする。

二四 はるのひにかすみたなびきうらがなしこのゆふかげにうぐひすなくも
やかもち

【異同】 ナシ

【現代語訳】春の日に霞がたなびいていても哀しい。この夕暮れの光のなかで鶯が鳴いていることよ。

【語句】 ○うらがなし ものかなしい。○ゆふかげ 夕方の日の光。○うぐひすなくも 「も」は詠嘆を表す。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三八八／万葉集・四三二四（旧四二九〇）春野爾 霞多奈毘伎 宇良悲 許能暮影尔 鶯奈久母 ハルノノニカスミタナビキウラガナシコノユフカゲニウグヒスナクモ はるのひにかすみたなびきうらがなしこのゆふかげにうぐひすなくも

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の文献に一致する。

二五 うぐひすのたにのそこにてなくこゑはみねにこたふるやまびこもなし

【異同】 ナシ

【現代語訳】鶯が谷の底で鳴くその声は、山頂にまだ残りの雪があつて、春を告げる鶯に應えるこだまもないなあ。

【語句】 ○たにのそこ 谷の底。「底」に「其処」をかける。○みね 山頂。谷の底との対比。山頂には題「のこりのゆき」がある。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三八九／躬恒集Ⅱ・一五／躬恒集Ⅲ・一五／躬恒集Ⅳ・三六一
〔以上五首担当 橋本智美・林マリヤ〕

二六 ふくかぜをなきてうらみようぐひすはわれやははなにてだにふれたる

【異同】 ナシ

【現代語訳】吹いて、花を散らす風を泣いて恨んでおくれ、鶯よ―おまえは私を恨んでいるようだが―私は花に手だつて触れてはいないのなもの。

【語句】 ○なきて 「泣き」と「鳴き」の懸詞。○うぐひすは 「鶯よ」とほぼ同じ気持ち。新編日本古典文学

全集『古今和歌集』頭注では『うぐひす』は四字なので下に『は』をつけた」と指摘する。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九〇／古今集・春下・一〇六

二七 まつひともしぬものからにうぐひすのなきつるえだを^花りてけるかな
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】待つ人も来ないのに、さつきまで鶯が愛し惜しんで鳴いていた枝を折ってしまったのだよ（あの人とともにめでようとして……）。

【語句】○ものから……のに。逆接条件。○なきつるえだ 鶯が寄るのであるから、花のついた枝。傍記の「なきつる花」と等価。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九二／古今集・春下・一〇〇

【参考】作者名「みつね」とあるが、所載欄の古今集では「よみ人知らず」。

二八 はるた^てばはなとやみえんしらゆきのか^られるえだにうぐひすぞなく

【異同】ナシ

【現代語訳】立春になったら、（鶯にも）花と見えるのだろうか。白雪のかかっている枝に、鶯が鳴いているよ。

【語句】○はるた^てば 所載欄にある他の文献では「春立てば」。古今六帖の分類が「残りの雪」であるので、本来「春立てば」とあったものと思われるが、現存本文に従った。○はなとやみえん 雪を花に見立てる。古今集その他では「みらん」とあり、古来風体抄では「みらんの詞、今の世には少し用ひ難きなり」とする。異同にはそのような経緯が関係するか。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九三／古今集・春上・六／新撰万葉集・四一／素性集Ⅰ・一／素性集Ⅱ・三七／素性集Ⅲ・一／古来風体抄・二二〇／桐火桶・四〇

二九 しるしなきねをもなくかなうぐひすのことしのみちるはな^らなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】効のない声を立てて（花を惜しんで）鳴いていることだな、鶯は。今年だけ散る花でもないのに。
【語句】○しるしなき 効のないこと。「ちりぬればこふれどしるしなきものをけふこそさくらをらばをりてめ」（古今集・六四）。○なく 「鳴く」と「泣く」の懸詞。○うぐひすの 新日本古典文学大系『古今和歌集』脚注では「説が一定しないが、『の』は主語で、作者の万感がこめられた余情表現と解す」とする。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九一／古今集・春下・一一〇／躬恒集Ⅰ・一二〇／躬恒集Ⅱ・二二／躬恒集Ⅲ・二六／躬恒集Ⅳ・三七五

三〇 はなのかをかぜのたよりにたぐへてぞうぐひすさそふしるべにはする^{やる}

【異同】する―「する」ト「やる」ヲ割書ノヨウニ書ク（大）

【現代語訳】花の香を風の便りに添えてやって、（まだ訪れない）鶯を誘い出す案内にしよう。

【語句】○かぜのたより 風という便り。○しるべ 道案内。てびき。

【所載】古今六帖「はるのかぜ」三八五、「うぐひす」四三九四／古今集・春上・一三／新撰万葉集・一一／新撰和歌・一五／新撰朗詠集・六四／友則集・二五／寛平御時后宮歌合・一／綺語抄・四七三

〔以上五首担当 杉本まゆ子〕

三一 たのまれぬはるのこころとおもへばやちらぬさきよりうぐひすのなく^な ^{をきかぜ}

【異同】○はるのこころと―花の心と（大）

【現代語訳】うつろいやすい心をもった花、と思うからか、まだ散らぬ先から鶯はないているよ。

【語句】○たのまれぬ 頼みにできない。ずつと変わらぬものとして信頼することができない。「君が思ひ雪とつもらばたのまれず春よりのちはあらじと思へば」（古今集・九七八）。○はるのこころ 春の心。この歌語の用例はあるが、初句からの続きとして傍書の「はなのこころ」の方が自然である。こちらで解釈する。「花の心」は 花の色のあせ、散りやすい性質を「浮気な人」に重ねた表現。「うちはへてはるはさばかりのどけきを花の心やなにいそぐらん」（後撰集・九二〇）。○おもへばや 「は」は已然形に接続し、確定条件、この場合、原因・

結果を示す。「や」は係助詞。軽い疑問を表す。思うからか。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九五／続古今集・春下・一二二／新拾遺集・雜上・一五四九／亭子院歌合・一〇／興風集I・八

【参考】作者名「をきかぜ（興風）」は亭子院歌合（十卷本）に一致する。

三二一 うぐひすの谷よりいづるこゑなくははるくることをたれかしらまし
ちさを

【異同】ナシ

【現代語訳】鶯の谷から里へ来鳴く声がなかったら、春の来たことを誰が知ろうか。

【語句】○谷よりいづるこゑ 「伐木丁々 鳥鳴嚶々 出自幽谷 遷于喬木」（毛詩伐木篇）による。原拠詩は「谷より出づ」に「登用される」という人事的意味があるが、この和歌にはそれを含めない。○こゑなくは 声がなかったなら。室町時代以降「声なくば」のように「ば」と解されたが、それ以前、形容詞の語尾「く」について「は」は、係助詞で清音。○たれかしらまし 「か」は反語。「まし」は助動詞。事実と反対のことを想像する場合に用いる。上の「なくは」に呼応し、なかったら、誰が知るだろうか、誰も知る人はいない、の意。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九六／古今集・春上・一四／新撰万葉集・二六一／寛平御時后宮歌合・二二二／俊賴髓脳・一七九／綺語抄・五七〇／和歌童蒙抄・一〇五／奥儀抄・一三五／袋草紙・六〇四／八雲御抄・六二

【参考】作者名「ちさと」は所載欄の古今集に一致する。

三三三 むめのはなちるてふなへにはるさめのふりでつゝなくうぐひすのこゑ
はせを

【異同】ちるてふなへに―ちりてふなへに（大）

【現代語訳】梅の花の散るといふ折に春雨が降り、振り出すように鳴く鶯の声。

【語句】○ちるてふ 散るといふ。○なへに ……と同時に ○ふりでつゝ 春雨に続く「降り」に、鶯の声を振り絞つての意の「ふりいで」を掛ける。鳥の声を「ふりいでて」鳴くとした例には「思ひいづるときはの山の

郭公からくれなゐのふりいでてぞなく」(古今集・一四八、新撰和歌・一三三)など。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九七/後撰集・春上・四〇/伊勢集I・三三六/伊勢集II・三三六/伊勢集III・三三九

【参考】作者名「はせを」は後撰集四〇番歌では「よみ人しらず」。前の三九番の作者が紀長谷雄。「よみ人しらず」という表記が略されるか見落された場合、「はせを」の歌と認識される可能性はある。

三四 としたてばはなてふべくもあらなくにはるいまさらにゆきのふるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】新年になったので(もう春の)花と(言ってもよさそうなのに)そうは言えず、(この舞い落ちるのは)春にいまさら雪が降るらしい。

【語句】〇としたてば「たつ」は新しい月あるいは季節がくることをいう。「睦月たつ」「春たつ」など。〇はなてふべく 花といふべく。

【所載】貫之集I・三五一

【参考】貫之集には第二句「花こふべくも」とある。

三五 やまのまにうぐひすなきてうちなびきはるとおもへどゆきはふりつゝ

【異同】やまのまに―やまのはに(御・大)

【現代語訳】山の間に鶯が鳴き、草木のなびく春と思うのに、しきりに雪が降る。

【語句】〇やまのま 山と山の間。「うまさけ みわのやま あをによし」ならのやまの やまのまに いかくるまで……」(万葉集・一七)。〇うちなびき 「うちなびく」という枕詞がある。草木の枝葉が伸びてなびき繁ることにより「春」にかかる。しかし万葉集では「うちなびき」は「こころはいもに」などとかかる例もあり、枕詞ではなく、ここもそのようにとる。〇ふりつゝ 助詞「つつ」は動作の反復を表す。何度も降り。

【所載】万葉集・一八四一(旧一八三七) 山際爾 鶯喧而 打靡 春跡雖念 雪落布沼 ヤマノハニウグヒスナキテウチナビキハルトオモヘドユキフリシキヌ やまのまにうぐひすなきてうちなびくはるとおもへどゆきふりしきぬ/人麿集III・七一

【参考】初句を「やまきはに」とする類似歌が、赤人集Ⅰ・一三六、赤人集Ⅱ・一九、二三九、赤人集Ⅲ・二二に見える。

〔以上五首担当 平野由紀子〕

子日

大伴やかもち

三六 はつはるのはつねのけふのたまばゝきてにとるからにゆらく玉のを

【異同】ナシ

【現代語訳】新春の初子のきよう賜った玉で飾った箸は、手にとるとともに、玉を貫いた緒がゆらゆらと清らかな音をたてるよ。

【語句】◎子日 正月最初の子の日のこと。この日野外に出て、小松を引き若菜を摘み、遊宴して千代を祈った。宮廷で行われた子日宴は、続日本紀天平一五年正月壬子(十二日)条に、「御石原宮楼(在城東北)賜饗於百官及有位人等(石原宮楼に御し(城の東北に在り)饗を百官及び有位の人等に賜ふ)」とあるのが文献上の初例。○たまばゝき 「たまははき」とも、「たまばわき」とも発音される。上代、正月子の日の儀礼用品の一、蚕室を掃く玉で飾った箸をいう。皇后が養蚕を行ったことを表すものとされ、天皇が農耕したことを表す辛鋤(からすき)とともに子の日に飾られる。○からに ただ……だけで。……と同時に。○ゆらく 玉や鈴が触れあつて音を立てるさま。○玉のを 玉を貫き通したひも状の緒。

【所載】新古今集・賀・七〇八／万葉集・四五二(旧四四九三) 始春乃 波都祢乃家布能 多麻婆波伎 手尔等流可良尔 由良久多麻能乎 ハツハルノハツネノケフノタマバハキテニトルカラニユラクタマノヲ はつはるのはつねのけふのたまばはきてにとるからにゆらくたまのを／夫木抄・一六二／俊頼髓腦・二七八／綺語抄・五五四／和歌童蒙抄・一一四／奥儀抄・三六八／袖中抄・八五三／古来風体抄・二一〇／和歌色葉・一三七／八雲御抄・一六七／太平記・一一七／宝物集・四〇二

【参考】この歌は、聖武天皇天平宝字二年正月三日に内裏で子日宴が行われたときのもの。作者名「大伴やかもち」は所載欄の文献に一致する。

三七 ちとせてふこまつひきつゝはるのゝにとをさもしらずわれはきにけり
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】千年のよわいを寿ぐという小松を引きながら、春の野で、その遠さも忘れて、あなたの長寿を祈りながらここまでできてしまったことだ。

【語句】○こまつひきつゝ 「つつ」は反復を表わす。野のあちこちで小松を引いて。松は長寿・不変の象徴とされ、平安時代には、初子の日に野に出て小松を引き千代を祈るならわしがあった。○はるのゝに 春の野において、という意味。○とをさもしらず とほさもしらず。遠さも気にかけて、忘れて。

【所載】貫之集I・五一一

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

三八 おふるよりとしさだまれるまつなればひさしきものとたれか見ざらん
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】生い出でたその時から、千歳の寿命ときまつている松だから、行く末久しいものと誰が見ないであろうか。誰しも行く末久しくめでたいものと思つて見るであろう。

【語句】○としさだまれるまつ 千年の長寿ときまつている松。○たれか見ざらん 「か」は反語。誰が見ないであろうか、誰しもそう思つて見るであろう。

【所載】新後拾遺集・慶賀・一五五〇／伊勢集II・七六／伊勢集III・七三

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。

三九 ねたくわれねのひのまつにならましをあなうらやまし人にひかるゝ
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】 いまましいことに、私は子の日の松になればよかったのに、ならなかった。ああ、うらやましいことよ。松は人に引かれているよ。(私も松になって人に引き立てられ用いられたらどんなにかよかつたろうに。)

【語句】 ○ねたく 「名痛く」の略。相手の名が高くて自分に痛く感じられる、が原意。憎らしい。いまましい。小癩だ。○ならましを (実際にはそうではないが) ……：だつたらよかつたろうに。○ひかるゝ 子の日の松が人に「引かれる」ことに、人事面で人に「引き立てられる」ことを言い掛けた。

【所載】 躬恒集Ⅰ・九七／躬恒集Ⅱ・一／躬恒集Ⅲ・一／躬恒集Ⅳ・三四八／躬恒集Ⅴ・三二二

【参考】 作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

四〇 おぼつかなけふはねのひかあまならばうみまつをしぞひくべかりける
つらゆき

【異同】 ひくへかりける―ひくへかりけれ(御)

【現代語訳】 心もとないことだ。きょうは子の日なのか。もし私が海人(あま)であるならば、小松ならぬ海松(みる)をこそ引くところであつたよ。

【語句】 ○おぼつかな 形容詞「おぼつかなし」の語幹。対象がはつきりせず、そのために不安になる心をいう。ここは、海上の旅の途中なので、「けふはねのひか」と「おぼつかな」く思われる、ということ。○あま 漁業、製塩など、海に拠って生活する人々。○うみまつをしぞ 「うみまつ」はみる(海松)のこと。海の岩に生える緑藻。食用になる。「し」は強意の副助詞、「ぞ」は係助詞。

【所載】 土佐日記・三五

【参考】 所載欄に示したとおり、土佐日記の承平五年正月二九日条にある歌、海上での貫之の詠である。

〔以上五首担当 斎藤照子・山下道代〕

四一 はるがすみたなびくまつのとしあらばいづれのはるかのにこざらん

【異同】 ナシ

【現代語訳】 春霞がたなびいている松の如き長寿があつたなら、どの春も、寿命を延べるために松を引きに野辺へ来ないことがあるか。

【語句】○はるがすみたなびくまつ 春霞が横に長く引いてかかっている松。神仙思想への連想も働く。「松」は長寿の象徴で、子の日の行事（三六番歌子の日の項参照）には、その根を引く。霞が「たなびく」の「ひく」から、子の日の行事である松を「引く」とへと意味を遷移させる工夫がある。「春霞たなびく」は「山」「野辺」にかかる例が多く、直接「松」にかかるのは、他に「久しきをねがふ身なれば春霞たなびく松をいかでとぞ見る」（貫之集・二八一）の一例のみで、漢詩文にみられる「松煙（松にかかる霞）」に導かれた表現。「風竹松煙屋掩閑 意中長似在深山（風竹松煙屋閑を掩ふ 意中長く深山に在るに似たり）」（長安閑居・白氏文集・六六五）、「輕煙松心入 轉鳥葉裡陳（輕煙松心に入り 轉鳥葉裡に陳へつらぬく）」（美努淨麻呂「春日、応詔」・懷風藻・二四）。○いづれのはるかべにこざらん 「か」は反語の係助詞。「のべ」は「野辺」と寿命を「延べ」る意を掛ける。どの春も、野辺に寿命を延べに來ないことがあるるか、毎春來るの意。類歌「百千鳥木伝ひ散らす桜花いづれの春か來つつ見ざらん」（貫之集・五七）。

【所載】貫之集I・九一

【参考】「霞」と「煙」についての参考文献として、小島憲之「上代に於ける詩と歌―『霞』（カ）と『霞』（かすみ）をめぐって」（『万葉学論攷』一九九〇年四月）、渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一年）、田中幹子『和漢・新撰朗詠集の素材研究』（和泉書院、二〇〇八年）等がある。
古今六帖に作者名はないが、貫之集に入集する。

四二 ねのひするのべにこまつのなかりせばちよのためしになにをひかまし
たゞみね

【異同】ナシ

【現代語訳】子の日の遊びをする野辺に、もし小松がなかったなら、千代の長寿を保つ例として、いったい何を引いたらよいのだろうか。

【語句】○ねのひする 正月の最初の子の日に、野に出て小松の根を引き、長寿を祈る。○ちよのためし 千年の寿命を保つ例。「鶴のすむ松が崎にはならべたる千代のためしを見するなりけり」（拾遺集・六一七・平兼盛）。「子の日の松」と「千年」の取り合わせの例は多く、「ちとせまで限れる松も今日よりは君に引かれて万代や経む」（拾遺集・二四・大中臣能宣）など。○ひかまし 「引く」は子の日の行事である松を「引く」と、言葉、典故、証拠などを採って例とする、引用する意の「引く」との掛詞、「まし」は反実仮想。

【所載】拾遺抄・春・二〇／拾遺集・春・二三／金玉集・八／和漢朗詠集・三一／忠岑集IV・一六七／忠見集I・八五／忠見集II・五六／秘藏抄・五／三十人撰・一〇八／三十六人撰・一二八

【参考】作者名「たゞみね」は、拾遺抄、拾遺集、金玉集、和漢朗詠集の作者と一致し、忠岑集IVに入集するが、忠見集I・IIにも入集する。『忠岑集全釈』は、この歌が忠岑集IVにおいて、忠見歌として異伝を持つあたりの歌群に配置されていること、忠見集が「朱雀院の御屏風に」という詠歌年次を表す詞書をもっており、朱雀院の在位は延長八年（九三〇）〜天慶九年（九四六）であるから、忠岑では無理で、忠見の歌人活動時期にふさわしいものとする。この作者名の妥当性については、後考を俟ちたい。

わかかな

四三 あすから はるたゞわかかなつまんとしめしのにきふもけふもゆきはふりつゝ あか人

【異同】 あすから はるたゞは―明日からは（大）

【現代語訳】立春になったら若菜を摘もうと標を張っておいた野に、昨日も今日も雪は降り続けているよ。

【語句】◎わかかな、若菜。ゑぐ、萘、薺など早春の野辺に生えた食用の菜。若菜を摘む民俗が、平安時代に入つて正月子の日の宮廷行事「供若菜」となつたという。「春日野に煙立つ見ゆ娘らし春野のうはぎ摘みて煮らしも」（万葉集・一八八三（旧一八七九）、「春日野に若菜摘みつつ万代を祝ふ心は神ぞ知るらむ」（古今集・三五七・素性）など。○しめし 標をしておいた。「標む」＋過去の助動詞「き」の連体形。「標む」は土地を占有したり場所の区画を示すために、木をたてたり、縄を張ったりして、立ち入りを禁じたしるしをつける意。

【所載】新古今集・春上・一一／万葉集・一四三一（旧一四二七）従明日者 春菜将採跡 標之野尔 昨日毛今日毛 雪波布利管 アスヨリハワカナツマムトシメシノニキノフモケフモユキハフリツツ あすよりははるなつまむとしめしのにきふもけふもゆきはふりつつ／新撰和歌・二三／和漢朗詠集・三六／赤人集I・二／赤人集II・二三五／赤人集III・二三五／俊成三十六人歌合・一六／時代不同歌合・七／三十六人撰・四四／秀歌大体・八／袖中抄・七六五／桐火桶・一三九／和歌口伝抄・二

【参考】作者名「あか人」は所載欄の文献に一致する。

四四 ゆきてみぬ人もしのべとはるのゝのかたみにつめるわかなゝりけり
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】子の日の遊びに行かなかった人も様子を思い浮かべなさいよというので、この筐に摘んだ若菜なのだなあ。

【語句】○しのべ 「偲ぶ」の命令形。「偲ぶ」は心ひかれて見えないところに思いを馳せる意。○かたみ 目の細かい竹籠の「筐」と、過去のことなどを思い出す種となる。「形見」を掛ける。「形見」は「恋しくは形見にせよと我が背子が植ゑし秋萩花咲きにけり」(万葉集・二二二三(旧二一九))という例があり、「玉津島見れどもあかずいかにして包み持ち行かむ見ぬ人のため」(万葉集・二二二二(旧二二三))、「故郷の初もみぢ葉を手折り持ち今日ぞ我が来し見ぬ人のため」(万葉集・二二二〇(旧二二二六))のごとく、見ぬ人のために自然の景物を持ち帰るとするのも万葉集以来の類型表現である。

【所載】新古今集・春上・一四／金玉集・春・一〇／和漢朗詠集・三七／貫之集I・三／三十人撰・一二／三十六人撰・一二／深窓秘抄・一二

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

四五 きみがためはるのゝにいでゝわかなつむわがころもでにゆきはふりつゝ
古一春上

仁和のみかどの御哥

【異同】く仁和のみかどの御哥―ナシ(御所本ハ四六番歌ノ作者トスル)。底本ノ永青文庫本ハ、次ノ行ノ「仁和のみかどの御哥」トコノ歌ヲ線デ結ブ。桂宮本・大久保本ハ四五番歌ノ前ニ「仁和のみかとの御哥」トスル作者記載ガアル。

【現代語訳】あなたにさしあげようと思って、春の野に出て若菜を摘んでいる私の袖に雪が降りかかっています(折りからの雪のなかで摘んだ若菜です)。

【語句】○きみがため 君がため。「君」は若菜を贈る相手。例歌として「君がため山田の沢にゑぐ摘むと雪消の水に裳の裾濡れぬ」(万葉集・一八四三(旧一八三九))、「君がため衣のすそをぬらしつつ春の野にいでて摘める若菜ぞ」(大和物語・二九三)等。○ころもで 袖の歌語。○仁和のみかど 光孝天皇。

【所載】古今集・春上・二二／新撰和歌・二九／新撰朗詠集・三二／仁和御集・一／新時代不同歌合・四三／秀歌大体・一一／百人秀歌・一八／百人一首・一五／定家十体・一六一／詠歌大概・二／東野州聞書・一四四

【参考】作者名「仁和のみかど」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 中野方子〕

四六 ^{古一春上} かすがのゝわかかなつみにやしろたへのそでふりはへて (は□) ^{人の} ゆくらむ

【異同】四五番歌参照。かすかのゝ―春の野に(大) 人のゆくらむ―底本ハ「は□」(一字分不明)ノ上ニ重ネテ「人の」ト書ク。

【現代語訳】春日野の若菜を摘みに行くのであろうか、女性たちが白い袖を振りながらわざわざ(遠くに)出かけて行くのは。

【語句】○かすがの 「春日野」は大和国の歌枕、現在の奈良市街東南部に位置する野。三番歌参照。○しろたへの 「そで」にかかる枕詞で、こゝは袖の白さの意味もある。○そでふりはへて 「袖振り」に、「ふりはへて」(わざわざ、ことさらに、の意)を掛ける。袖を振る主体は女性。

【所載】古今集・春上・二二／新撰和歌・三一／和歌体十種・五／秀歌大体・九／綺語抄・五一七／古来風体抄・二二五

【参考】作者名がないが、所載欄の古今集・古来風体抄に貫之とある。古今集の二二番(光孝天皇歌)・二二番(紀貫之歌)という隣合せが、古今六帖の四五・四六番歌となっている。なお、所載欄の古今集の詞書には「歌たてまつれとおほせられし時、よみてたてまつれる」とあり、醍醐天皇に奉った歌で屏風歌と思われる。片桐洋一「古今和歌集全評釈」に、貫之集の「春日野」詠全三首がすべて若菜を詠み込み、屏風歌であると指摘する。

四七 かはかみにあらふわかかなのながれてもきみがあたりのせにこそよらめ

【異同】ナシ

【現代語訳】川上で洗う若菜が流れても下流の浅瀬に寄りつくように、わたしもあなたに寄り添いたいものです。

【語句】○わかかなの 若菜のように、の意。○きみがあたりのせ 「せ(瀬)」は川の浅くなったところ。所載欄の万葉集に「妹があたりのせ」とある。万葉集「妹」が古今六帖「君」とある、そのような語の転換例は多い

と指摘されている（平井卓郎『古今和歌六帖の研究』第三章第五節）。当該歌の「きみ」も女性を指すか。

【所載】万葉集・二八四九（旧二八三八）河上尔 洗若菜之 流来而 妹之当乃 瀬社因目 カハカミニアラフ
ワカナノナガレキテイモガアタリノセニコソヨラメ かはかみにあらふわかなのながれていもがあたりのせに
こそよらめ 右四首、寄レ草喻レ思ノ人麿集Ⅱ・四九四ノ人麿集Ⅳ・二六八

【参考】人麿集に見える歌だが、所載欄の万葉集に作者名はない。

四八 わかなつむわれをひと見ばあさみどりのべのかすみとたちかくれなむ
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】若菜を摘んでいる私をもし人が見るならば、浅緑色に野辺に霞が立つ、その中に私もきつとたち隠れているであろう。

【語句】○あさみどりのべのかすみ この表現は、「あさみどり野辺の霞はつつめどもこぼれてにほふ花桜かな」（寛平御時后宮歌合・一）の影響がある。霞の色彩に触れた論考は数あるが、森田直美『更級日記』「あさみどり花もひとつに霞みつつ」詠再考』『むらさき』二〇〇九年十二月）によれば、「あさみどり色の霞」という表現（概念）が通行し定着するのは中世期になってからであり、霞の色としては「白（半透明）」が想定される歌が平安和歌に幾つもあるという指摘を生かした。○とたちかくれなむ 「霞と立ち」と「たち隠れ」（「たち」は接頭語）とを掛け、野辺に霞立つように、私もたち隠れるであろう、の意。格助詞「と」は、「さくら花みかさの山のかけしあれば雪とふれどもぬれじとぞ思ふ」（拾遺集・雑春・一〇五六）や「春たたば花みんと思ふ心こそ野べの霞と立ちまさりけれ」（袋草紙・六一八）等の「と」の用法と同じで、「……のように、……というようすで」の意味。なお、「かくれなむ」よりも、所載欄の貫之集「……野べの霞も立ちかくさなむ」のように、「隠さなむ」（霞が隠してほしい）の方がわかりやすい。

【所載】貫之集Ⅰ・六八ノ金葉集初度・三二

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に同じ。貫之集に「延喜十七年八月、宣旨によりて」とあるが、詳しい詠歌事情は不明。霞が若菜を摘む女性の姿を隠すという類歌「野辺なるを人や見るとて若菜摘む我を霞の立ちかくすらむ」（貫之集Ⅰ・二五〇）は、屏風歌である。

四九 くむかにすこのわかなつまんとしめしのゝしばしばわれをおぼせわがせこ

【異同】ナシ

【現代語訳】国栖の子らが若菜を摘もうとして決めていた標（し）めし野、その名のようにしばしば私を心にして思つて下さい、わが恋人よ。

【語句】○くにすこの 「国栖（くにす）」は、『古今和歌六帖標注』に日本書紀神武紀・応神紀を引用するように、吉野川上流に住んだという吉野の国栖を指す。宮中における、元日・白馬・踏歌の節会や新嘗会・大嘗会の折に、大贄（おおにえ。貢ぎ物）を献上し歌笛を奏し、服属儀礼に参与した。管見に入った「くにすこ」はこの一例のみで、「くにすら（が）」「くずひと（の）」の例が多い。なお、「国栖ら」「国栖」の若菜摘みを詠じた歌は参考欄参照。他にも宝治百首・文保百首等に見える。○しめしの 標（しめ）を張つておいた野。四三番歌参照。○しばしば 上三句までが、「しめしの」の類音である「しばしば」を導く序詞。○せこ 女性が夫や恋人である男性を親しんで呼ぶ語。

【所載】ナシ

【参考】初句から「しばしば」までほぼ同じ歌として、万葉集・一九二三（旧一九一九）「国栖等之 春菜将採 司馬乃野之 数君麻 思比日 クニスラガワカナツムシバノノシバシバキミヲオモフコノコロ くにすら がるなつむらむしまのののしばしばきみをおもふこのころ」、袖中抄・七六四「くずひとの若菜摘むらむ司馬（しめ）の野のしばしば君を思ふこのころ」（作者名「吉野国撰」）がある。また、赤人集Ⅰ・二〇二「くにすらが若菜摘まむと標めし野にあまのきみかよぎりころほひ」（赤人集Ⅱ・八三、赤人集Ⅲ・九〇に下句異同）は、下句意味不通ながら、上三句はほぼ同じ。

あをむま

やかもち

見イ

五〇 みづとりのかものはいろのあをきむまをけふくる人はかぎりなしてふ

【異同】ナシ

【現代語訳】水鳥の鴨の羽色をした青い馬、その青馬を今日見る人の寿命は限りないという（傍書「見る人」で現代語訳した）。

【語句】◎あをむま 青馬（「白馬」とも表記）の節会に牽かれる馬。後年の「あをむま」歌はほとんど節会の折のもので、新撰六帖・夫木抄の同題でも節会の馬の詠がならぶ。白馬の節会は、正月七日に行われ、叙位の儀が済んだ後、紫宸殿の庭に七頭ずつ計二十一頭の馬が牽かれて渡るのを天皇が御覧、その後に宴が持たれた（北山抄）。なお、牽かれる庭は、平安時代初期には豊樂院であった。「馬」は陽獣、「青」は春の色をあらわし、正月七日に青馬を見ると、その年の邪気が払われるという（年中行事歌合判詞・公事根源）。見物に来る里人も多かった。○みづとりの 「かも（鴨）」の枕詞。○かものはいろの 「こゝまでの初二句は、「あをき」を導く序詞。○あをきむま 「青」といわれる馬の毛色は、上代に「青馬」と表記し、白毛に青毛・黒毛のまじる色であった。和名類聚抄「驄馬」の項に、「青白雑毛馬也」の説明を、また、「漢語抄（奈良時代の辞書）云、青馬也」を引用する。平安時代になると、「白馬」節会と表記され、「あをうま」題で、「ふる雪に色もかはらでひくものを誰かあを馬と名付けそめけむ」（兼盛集・一一八）などの歌も見えるが、『小右記』万寿元（一〇二四）年十一月三十日条に、「葦毛」（あしげ）の馬を、「白馬料」と記すので、やはり雑毛の馬であったらしい。○けふくる人は 「けふ」は正月七日。なお、「くる人」では意味をなさないので、傍記異文や所載欄の「見る人」を生かす。○かぎりなしてふ 寿命の限りがないという。「てふ」は「と言ふ」の縮まった表現。

【所載】万葉集・四五二八（旧四四九四）水鳥乃 可毛羽能伊呂乃 青馬乎 家布美流比等波 可芸利奈之等伊布 ミヅトリノカモハノイロノアヲウマヲケフミルヒトハカギリナシトイフ みづとりのかものはいろのあをうまをけふみるひとはかぎりなしといふ／和歌童蒙抄・一一三

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の万葉集も同じ。万葉集には、天平宝字二（七五八）年正月七日の節会に向けて、家持があらかじめ作っておいたものだが、節会は六日に変更されて歌を奏する機会がなかったとある。

〔以上五首担当 犬養悦子・加藤静子〕

なかのはる

みつね 或本

五一 はかなくてはるひとはるはすぎにけり花のさかりはすぎがてにせよ

【異同】ナシ

【現代語訳】束の間に春はすべて過ぎてしまったことだ。けれども、花の盛りは（そんなふうにあっけなく過ぎてしまうのではなく）なかなか過ぎて行かないようにしておくれ。

【語句】◎なかのはる 仲春。春の三か月のうち、中の月。陰暦二月の異称。○はかなくて あっけない状態で。この「はかなし」は、「束の間である」「あっけない」の意。「はかなくてすぐる秋とは知りながら惜しむ心のなほ飽かぬかな」（陽成院歌合・一六）。○はるひとはる 春の三か月全部。春いっぱい。但し、所載欄の文献ではすべて「はるひとつき」とあり、春の一か月が過ぎたという意になるこちらの本文の方が、「なかのはる」の題にはふさわしい。古今六帖の本文では、春の三か月が過ぎてしまったことになる。○がてに ……できないで。……しかねて。

【所載】躬恒集Ⅰ・五八／躬恒集Ⅲ・一六一／躬恒集Ⅴ・九〇／左兵衛佐定文歌合・四

【参考】作者名「みつね」は、所載欄の文献に一致する。

五二 わがこゝろはるの山べにあくがれてながくし日をけふもくらしつ

【異同】ナシ

【現代語訳】私の心は春の山辺にひかれてさまよい出て、長い長い春の日を日暮まで今日もまた過ごしてしまつた。

【語句】○あくがれて 「あくがる」は、ある対象に心がひかれて、心が体から離れてさまよい出る意。○ながくし日を 長い長い春の日を。「ながながし」は、「長い長い」「非常に長い」意。類想歌「あだにこそこのべの花みにわがこしかながながし日をくらしつるかな」（古今六帖・一二二）。

【所載】新古今集・春上・八一／躬恒集Ⅰ・一四八／躬恒集Ⅱ・五九／躬恒集Ⅲ・四七／躬恒集Ⅴ・七三／亭子院歌合・一四／袋草紙・三三五

【参考】古今六帖には作者名がなく、所載欄の新古今集は作者を「紀貫之」とするが、亭子院歌合・袋草紙は「躬恒」とし、躬恒集に見える。

五三 春はなをわれにてしりぬ花ざかりこゝろのどけきひとはあらじな
たぐみね

【異同】ナシ

【現代語訳】春はどういうものか、やはり自分自身を顧みることによってわかった。花盛りには心のどかで見られる人はいないだろうよ。

【語句】○春はなを 春の季節にはやはり。「なを」は「なほ」。○こゝろのどけきひとはあらじな 心のどかに過す人はないであろうよ。春の花盛りには、自分だけではなく誰もが、花のことが気になって心のどかではいられないだろう、という気持。「世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし」(古今集・五三・在原業平)。

【所載】拾遺抄・春・二六／拾遺集・春・四三／和漢朗詠集・二六／忠岑集Ⅰ・二八／忠岑集Ⅱ・六六／忠岑集Ⅲ・二／忠岑集Ⅳ・一六八／左兵衛佐定文歌合・三／三十六人撰・八二

【参考】作者名「たゞみね」は、所載欄の文献に一致する。

五四 うぐひすのはなふみしだくこのもとはいたく雪ふるはるべなりけり
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】鶯が花を踏み散らす木の下は、(春とはいっても)ひどく雪が降る春であったよ。

【語句】○ふみしだく 踏みつける。踏み散らす。○はるべ 春の頃。春の季節。○雪ふる 落花を雪が降つたと見立てたもの。

【所載】万代集・春下・四二二／貫之集Ⅰ・二〇四

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。貫之集Ⅰによると、当該歌は藤原定方のための屏風歌。

五五 いつまでかのべにこゝろのあくがれんはなしちらずはちよもへぬべし
そせい

【異同】ナシ

【現代語訳】いったいいつまで野辺に心がひかれてさまよおうのだろうか。花さえ散らないならば、きつと千年も

の長い年月でも野辺で過ごしてしまおう。

【語句】○あくがれん 「あくがる」については五二番歌参照。

【所載】古今集・春下・九六／素性集Ⅰ・一四／素性集Ⅱ・二三／素性集Ⅲ・四四

【参考】作者名「そせい」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 長戸〕

五六 ちるはなにせきとめらるゝやま川のふかくもはるのなりにけるかな
やよひ

【異同】ナシ

【現代語訳】散る花に堰き止められた山川の水かさが深くなるように、日が積もり春も深まったことだ。

【語句】◎やよひ 三月。歌題としては他に亭子院歌合（十卷本）に見える。○やま川の 「やま川」は、山あいを流れる川。流れが速く、したがって底は浅い。一方で、散った花や紅葉が堰き止めることで、水かさが深くなったり流れが淀む、などと詠む事例も多い。「山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」（古今集・三〇三）。初句から「こ」までが「ふかく」を導く序詞。○ふかくも 水かさの深さと春が深まるの意を掛け、「みなそこにしづめるはなのかげみればはるのふかくもなりにけるかな」（亭子院歌合・三四）。

【所載】詞花集・春・四四／新撰朗詠集・四四／後葉集・春下・七七

【参考】詞花集では作者を「能宣」とするが現存の能宣集からは見出せない。

五七 まださかぬ花も山べにあるべきをこころもとなくすぐるはるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】まだ咲いていない花も山辺にはあるはずなのに、それを待ちきれずに過ぎて行く春であることだ。

【語句】○こころもとなく 待ちきれない、じれったい。『古今和歌六帖標注』では用例として土佐日記・二月九日「心もとなきに、明けぬから船を引きつつ上れども」と伊勢物語・八十三段「この馬の頭、心もとながりて」を指摘する。和歌では「ほどもなくくるとおもひし冬の日のこころもとなきをりもありけり」（詞花集・二三一・道命）まで下る。

【所載】ナシ

みかの日

五八 ^{拾五賀} みちとせになるてふもゝのことしよりはなさくはるになりぞしにける ^{たゞみね}

^{あふ}

【異同】ナシ

【現代語訳】三千年に一度実が成るといふ桃の、今年から花が咲くというその春になったということだよ。

【語句】◎みかの日 三月三日。『雑令』に節日とされる。古く持統天皇の頃から宴が持たれ、次第に年中行事「曲水」(こくすい・きよくすい)の宴として定着、賦詩も行われた。私邸においても、この日には桃の花を飾り、節供のものを準備した。和歌では、桃の花や草餅に関わる詠がよく見られる。○みちとせになるてふもゝ 桃の実が三千年に一度実るといふ、仙女の西王母伝説を踏まえた表現。吉兆にめぐり合えたことで賀意を表わす。「みちとせにひらくる桃の花ざかりあまたの春は君のみぞ見む」(兼盛集・一七五)。所載欄の拾遺抄・拾遺集や和漢朗詠集、躬恒集、是則集、元輔集では初句を「みちとせに」とするが、忠岑集と亭子院歌合、また歌学書では「みちよへて」とあり、対立する。袋草子では、「みちとせ」と「ことし」と二箇所「年」を表わす語のあることを歌病の一として指摘する。

【所載】拾遺抄・賀・一八四／拾遺集・賀・二八八／和漢朗詠集・四四／躬恒集Ⅱ・二一一／忠岑集Ⅰ・四八／忠岑集Ⅱ・七七／忠岑集Ⅲ・一一／忠岑集Ⅳ・一四九／是則集・六／元輔集Ⅰ・二五九／亭子院歌合・六／俊頼髓脳・三三／和歌童蒙抄・六六三、九一三／奥儀抄・二五六／袋草紙・三三三／和歌色葉・三五五

【参考】作者記載には忠岑とあり忠岑集にも載るが、亭子院歌合では坂上是則の詠とする。他に躬恒とする文献もあり、作者を断じることが難しい。なお元輔集では、貫之をはじめとする古今集時代の歌人の屏風歌を集めた歌群に収まる。

五九 きみがためわがをるはなははるとをくちとせをみたびありつゝぞさく ^{つらゆき}

【異同】つらゆき―ナシ(大)

【現代語訳】あなたのために私の折る花は、春も行く末遠く、千歳を三度重ねても咲いていることですよ。

【語句】○はるとをく、春遠く。「遠く」は、「きみがため」の繁栄を寿ぐための語。行く末遠く、の意。「散りぬともあだにしもみじ藤花行さきとほく松にさければ」（貫之集・二二五）。○ちとせをみたび、千年を三度経ることとで三千年の意。西王母伝説を踏まえ、桃の花が咲き続けるという。○ありつゝぞさく、貫之集をはじめとする所載の文献には「折りつつぞ咲く」とある。

【所載】夫木抄・一七六四／貫之集I・一七六／和歌童蒙抄・六六四

【参考】貫之集の詞書には「ももの花をんなのものゝをる所」とある。西本願寺本貫之集では下句を「千歳みたびを折りつつぞ咲く」とする。

家持宅宴二月三日

新一春下

六〇 から人のふねをうかべてあそびけるけふぞわがせこはなかつらせよ

やかもち

【異同】ナシ

【現代語訳】唐の国の人が舟を浮かべて遊宴していたという今日、さあ、皆さんも花かずらを付けましょう。

【語句】○家持宅宴三月三日 万葉集の題詞に「三日守大伴宿祢家持之館宴歌三首」とある。これにより歌中の「ふねをうかべて」が曲水の宴の様子を指すことがわかる。○あそびける 万葉集をはじめとする所載欄の文獻では「遊ぶてふ」といふの本文を残すものが多い。○わがせこ 集う官人への呼びかけの語。さあ皆さん。男性が親しみをこめて男性に対して用いる例は万葉集に多く見られる。「秋の田の穂向き見がりてわがせこがふさ手折りける女郎花かも」（三九六五（旧三九四三））は大伴家持の大伴池主への贈歌。○はなかつらせよ 花で作った髪飾り。

【所載】新古今集・春下・一五一／万葉集・四一七七（旧四一五三）漢人毛 筏浮而 遊云 今日曾和我勢故花縵世奈 カラヒトモフネヲウカベテアソブテフケフゾワガセコハナカツラセナ からひともしかたうかべてあそぶといふけふぞわがせこはなかつらせよ／新撰朗詠集・四〇／夫木抄・一七四七／定家十体・二六三／綺語抄・三五三／和歌童蒙抄・一一六／袖中抄・一六〇

【参考】作者名は所載欄の万葉集に一致する。

〔以上五首担当 青木〕

はるのはて

六一 ゆくはるのたそかれどきになりぬればうぐひすのねもくれぬべらなり
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】過ぎゆく春がたそがれ時になったので、日が暮れるように鶯の声も聞こえなくなってしまうようだ。

【語句】◎はるのはて 春の終わり。春の末。行く春を惜しみ、鶯や花に愛着を示しながら別れを告げる。○たそかれどき 薄暗くなつてはつきりと人が見わけられず、「誰（た）そ彼」といぶかしく思われる時分。夕暮れ時。春の終わりを一日の終わりに喩えた。○くれぬべらなり 暮れてしまったようだ。鶯の声が聞こえなくなつたことを「たそかれどき」に対応し、「暮れぬ」という。「べらなり」は、さかし↓さかしらなり、うまし↓うまらなり、などと同じように、推量の助動詞「べし」から派生した語。古今集、特に貫之の歌に多く見え、見立ての趣向のおもしろさを見いだす個人的な判断の陳述（藏中スミ「歌語『べらなり』の周辺」「水門」一九七八年八月、「歌語『べらなり』覚え書」「水門」一九八〇年十月）とか、単なる婉曲的表現ではなく、漢籍などの典故に支えられながら、当時の新しい「喩」の表現を確信をもって統括する言辞（中野方子『古今集』における『べらなり』—喩に承接される助動詞—）『國文』一九九七年一月）などと説明される。使用例に男女の差はない。

【所載】貫之集I・四二七

【参考】作者名「つらゆき」は貫之集とも一致する。なお、聞こえなくなる鶯の声と春の終わりとを結びつけた歌には、同じ貫之集Iに「春のけふくるゝしるしは鶯のなかずはなりぬる心なりけり」（四二八）や「桜花をる時にしも鳴くなればうぐひすの音もくれやしぬらん」（四六三）などがある

六二 つれぐと花をみつゝぞくらしつるけふをしはるのかぎりとおもへば
みつね

【異同】くらしつる—暮しふる（大）

【現代語訳】つくねんと、花を眺めながら一日を暮らしてしまったことだ。今日を春の最後の日と思うので。

【語句】○けふをし まさにこの今日を。「し」は強めの副助詞。平安時代では「し」は「しぞ」「しも」などと他の係助詞を伴う形か、当該歌のように「……し……ば」の形で条件句の中に用いられるのが一般的な用法。

【所載】新後拾遺集・春下・一六二／万代集・四九七／躬恒集Ⅰ・一五八／躬恒集Ⅱ・六八／躬恒集Ⅲ・五七／躬恒集Ⅳ・四〇七

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

六三二 こゑたてゝなけやうぐひすひとゝせにふたゝびとだにくべきはるかは
藤原をきかぜ

【異同】ナシ

【現代語訳】声を振り絞って鳴け、鶯よ。この一年に二度と春は巡ってくるはずもないのだから。

【語句】○こゑたてゝ 大声を出して。「声たててなきぞしぬべき秋ぎりに友まどはせるしかにはあらねど」(後撰集・三七二・紀友則)。ただし所載欄に見える他文献ではすべて「声絶えず」か「声絶えで」とする。○くべきはるかは 来るはずの春であろうか、そんなことはない。「かは」は反語。今年はもう二度と春は巡ってこないのだから、思う存分悲しめ、の意。

【所載】古今集・春下・一三二／新撰万葉集・二四一／新撰和歌・一一九／興風集Ⅰ・四／興風集Ⅱ・八／寛平御時后宮歌合・四

【参考】作者名「藤原をきかぜ」は、所載欄の文献に一致する。

六四 花もみなちりぬるやどはゆくはるのふるさとゝこそなりぬべらなれ
そせい

【異同】ナシ

【現代語訳】花もすっかり散ってしまった家は、過ぎ去ってゆく春のふるさとなってしまった感じですね。

【語句】○ふるさと 古びて荒れた里、または、昔なじみの懐かしい里。○べらなれ 六一番歌語句欄参照。

【所載】拾遺抄・春・五三／拾遺集・春・七七／金玉集・春・二二／和漢朗詠集・上・春・三月尽／貫之集Ⅰ・八／貫之集Ⅱ・六／三十人撰・一三／三十六人撰・一三／深窓秘抄・二六

【参考】作者名を「そせい」とするが、所載欄の文献にはすべて「貫之」とあり、貫之集にも見える。

六五 はなのもとたつことうくもなりぬるかはるはけふをしかぎりとおもへば
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】花のもとを立ち去ることがつらく感じられてしまうことだなあ。春はもう今日限りで終わりだと思
うと。

【語句】○うくもなりぬるか いやになってしまふことだ。つらくなつてしまふことだ。「か」は詠嘆の終助詞。
○けふをし 「し」は強意の副助詞。

【所載】ナシ

【参考】作者名を「つらゆき」とするが、確認できない。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

六六 ちる花のもとにきてしぞくれはつるはるのをしさもまさるべらなれ

【異同】まさるへらなれ—まさるへらなり（大）

【現代語訳】散る花の木の下に実際に来てこそ、暮れ果ててしまった春を惜しむ気持ちも深まってゆくらしいよ。
【語句】○もとにきてしぞ 木の下に来てこそ。元々は「もとにきてこそ」だったが、書写の過程で「しそ」
となったものか。所載欄の貫之集では「本にきつそ」。○くれはつるはる 暮れ果ててしまった春。「くれはつ
る春はいづくにかへる山ありとしきかばゆきて尋ねん」（新統古今集・二一六）。

【所載】貫之集I・一四四

六七 花みつゝをしむかひなくけふくれてほかのはるとやあすはなりなん

【異同】ナシ

【現代語訳】花を何度も見ながら惜しむその甲斐もなく今日が暮れると、（夏の来る）明日はよその里の春とな

つてしまふのだろうか。

【語句】○ほかのはる よその春。別の春。今日が暮れるとここでは夏になるが、別の里では春なのだ、ということ。「たちいでてほかの春をもみるべきにやどの花こそうしろめたけれ」（建長八年百首歌合・四二三・左京大夫）。

【所載】新撰朗詠集・五〇／亭子院歌合・三九

はじめのなつ

六八 花とりもみなゆきかひてむばたまのよのまにけふのなつは来にけり
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】花も鳥もみな入れ代わって、一晚のうちに今日の夏が来てしまったことだ。

【語句】◎はじめのなつ 夏の初め。首夏。初夏。○ゆきかひて 交替して。「ゆきかふ」はあるものが去って、他のものが代わって入ること。暦だけでなく、春と夏の風物も交替するとした。○よのまに 一晚のうちに。「このぬる夜のまに秋はきにけらしあさけの風のきのふにもにぬ」（新古今集・二八七・藤原季通朝臣）。

【所載】万代集・五〇一／夫木抄・二三一七／貫之集Ⅰ・四九六

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

六九 いづこまで春はいぬらむくれはてゝわかれしほどはよるになりなき
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】どのあたりまで春は行ってしまったのでしょうか。すっかり暮れ果ててしまつて、春と別れたのは前夜のことになってしまいましたよ。

【語句】○いぬらむ 行ってしまったのだろう。春を擬人化した表現。○くれはてゝ 「春が暮れ果てる」意に「一日が暮れ果てる」意を響かせる。

【所載】伊勢集Ⅰ・一一五／伊勢集Ⅲ・一一四／三十人撰・三五

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。

七〇 花ちればみちのまに／＼とめくれば山にははるものこらざりけり
ふかやぶ

【異同】ナシ

【現代語訳】花の散っている道に沿って春を求め来たところが、山にも春は残っていないかったことだよ。

【語句】○花ちれるみちのまに／＼ 花の散っている道にしたがって。道に沿って。「おくれめてこひつつあらばおひゆかんみちのまにまにしめゆへわがせ」（古今六帖・二六一〇）。所載欄の他文献では傍書と同じ「花ちれる水のまにまに」で、「花の散っている水の流れに沿って」となる。○とめくれば（春を）求めて来たところが。

【所載】古今集・春下・一二九／深養父集Ⅰ・四／深養父集Ⅱ・三

【参考】作者名「ふかやぶ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 三浦〕

七一 あけくるゝ月日もあれどほとゝぎすなくこそ夏はきにけれ
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】一日一日と明け暮れて過ぎてゆく月日というものもあるが、（それはそれとして）郭公が鳴く声にこそ夏が来たど気付くことだよ。

【語句】○あけくるゝ 夜が明け日が暮れる。一日一日が過ぎること。○月日もあれど 月日というものもあるが、それとは別に、という気持か。この第二句の逆接は、貫之集の「月日あれども」の方がわかりやすい。○きにけれ 来たことに気づく。

【所載】貫之集Ⅰ・四六八

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

ころもがく

つらゆき

七二 なつころもたちきるものをあふさかのせきのしみづのさむくもあるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】薄い夏の衣服を仕立てて着たのだが、その夏ころもでは、逢坂の関の清水は寒さを覚えるほどだなあ。

【語句】◎ころもがへ 季節に応じ、衣服をその季節のものに替える事。陰曆四月一日と十月一日に行うものであった。ここは四月の衣更え。○なつころも 夏の衣服。夏着。○たちきる 裁ち着る。裁ち縫って着る。○あふさかのせきのしみず 逢坂関付近にあった清水。「関寺よりは西へ二、三町ばかり行きて、道より北の面に少し立上りたる所に、一丈ばかりなる石の塔あり。その塔の東へ三段ばかり下りて窪なる所は、則ち昔の関の清水の跡なり。……今は小家の後に成りて、当時は水もなくて見所もなけれど、昔の名残面影に浮びて優になん覚え侍し」(無名抄「関清水事」)。

【所載】新撰和歌・一四一／夫木抄・二二〇七

【参考】作者名「つらゆき」とあるが、この歌は貫之集に見えず、また他文献にも「貫之」とするものはない。

七三 はるにだにもありしころもいかにうすさのけふまさるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】春のころでさえ薄かったあなたの気持は、夏衣を着るきよう、その夏衣のようにどんなにか薄さがまさることであろうか。

【語句】○はるにだにもありしころも 春のころでさえも薄かったあなたの心。「だにあり」は状態を比較するときの言い方で、「だに」と「あり」のあいだに形容詞的語句が省略されている。ここでは、下句の形容詞「うすし」を補ってみるとわかりやすい。「春にだにもうすくありしころも」ということ。○夏ころもいかにうすさのけふまさるらん 夏衣が薄い事に、気持ちが薄くなる、薄情になる事を掛ける。薄い夏衣のように、どんなにかあなたの気持も薄情になることだろうか。「蟬のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば」(古今集・七一五)。

【所載】ナシ

七四 ^{拾二夏} 花のいろにそめしたものをしければころもかへうきけふにもあるかな ^{しげゆき}

【異同】ナシ

【現代語訳】春の花を偲ぶよすがとして桜色に染めた袂が惜しいので、衣更えするのがつらいきようであることだなあ。

【語句】○花のいろにそめしたもと 桜色に染めた袂。春の花を惜しむ愛着の形見。「さくらいろに衣はふかく染めて着む花の散りなむのちのかたみに」（古今集・六六）。○ころもかへうき 「うき」は憂き。衣をかえるのがつらい。衣をかえたくない。

【所載】拾遺抄・夏・五五／拾遺集・夏・八一／和漢朗詠集・一四六／玄々集・三二／重之集・二四一／和歌童蒙抄・一一二

【参考】作者名「しげゆき」は、拾遺集・重之集・玄々集等とは一致するが、拾遺抄は作者を「順」としている。

卯月

七五 はるはゝやすぎにしものをうぐひすのまたなくひとのこひしきやなぞ

【異同】ナシ

【現代語訳】春はもう過ぎてしまったのに、鶯がまた鳴いている。それを聞くと、またとなくあの人が恋しく思われるのはどうしてなのだろうか。

【語句】◎卯月 陰暦四月のこと。この月から夏である。○はるはゝやすぎにしものを 春という季節はもう過ぎてしまったのに。○またなく 鶯が「又鳴く」ことに、またとない意の「またなく」を掛けている。○ひとのこひしきやなぞ あの人を恋しく思われるのはどうしてだろうか。この「ひと」は、特定の人、すなわち恋人をさしている。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 橋本・山下〕

七六 はるすぎてうづきになればさかきばのときはのみこそしげくなりけれ
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】春が過ぎて卯月（四月）になるというと、神事に使う榊の常緑の葉だけが茂っていくことだ。

【語句】○うづき 四月の中酉の日には、賀茂の祭（葵祭）が行われる。○さかきば 神事に用いる。古今集・神楽歌の「神垣の御室の山の榊葉は神の御前に茂りあひにけり茂りあひにけり」において、繁茂の見事さを詠むことは、神を讃えることになるという（新編日本古典文学全集『神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』脚注）。○ときは 常葉。常緑を意味する。永久不変の「常磐」を響かせる。○しげくなりけれ 「常葉」が「繁」し、と賀意を表す。

【所載】貫之集Ⅰ・四三〇

【参考】作者名貫之は、所載欄の文献に一致する。

七七 山がつかきほにさけるうのはなはたがしろたへのころもかけしぞ
うの花

【異同】ころもかけしそ—ころもかけしか（大）

【現代語訳】山人の家の垣根に咲いている卯の花は、いったい、誰が白妙の衣をかけたのであるうか。

【語句】◎うの花 落葉灌木ウツギの花。初夏に白い花が穂のように咲く。垣根に使うことが多い。○山がつか 山人。山中で暮らす、身分の賤しい者。樵など。○しろたへ 衣の枕詞と見ることが出来るが、ここでは、本来の袴（たえ）で織った白い布の意味でとる。

【所載】拾遺集・夏・九三／躬恒集Ⅲ・一六三／左兵衛佐尉貞文歌合・八

七八 むかし見しわがふるさとはいまなをうのはなのみぞめにはみえける
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】昔見ていた私の古馴染みのあの場所は（もう変わってしまったのかもしれないが）、今もなお、卯の花だけが私の目には見えてくることだ。

【語句】○ふるさと 昔馴染みの土地。○いまもなを いまもなほ。「昔」と「今」の対比。『和歌文学大系 貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』脚注では、「ふるさととなりにしならのみやこにも色はかはらず花はさきけり」（古今集・九〇）を類歌として挙げる。

【所載】躬恒集Ⅰ・一九三／躬恒集Ⅲ・九八／躬恒集Ⅳ・四四四

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

七九 うのはなのさけるあたりにやどりせじねぬにあげぬとをどろかれけり

【異同】ナシ

【現代語訳】卯の花の咲いている辺りに仮寝はすまい。眠りもしないのに、花の白さで、夜が明けたかと思つて目を覚ましてしまうことだ。

【語句】○やどり 仮寝。宿泊。○ねぬにあげぬ 夏の短夜もさることながら、卯の花の白さで夜が明けたと錯覚する。○をどろかれけり 「おどろく」ははつと気づくの意。

【所載】拾遺集・雑春・一〇七二／重之集・二四四

八〇 けふもまたのちもわすれじしろたへのうのはなつらゆきにほふやど或本としゆきとみつれば

【異同】ナシ

【現代語訳】今日もまた、さらにもこれからも忘れはすまい。白妙の卯の花の見事に咲く家と、あなたの家を見たからには。

【語句】○うのはな 卯の花には、「憂（う）」を掛けることが多いが、ここでは特に掛詞として解釈しない。「否諾（いなう）」の「諾（う）」の意を込める田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』（風間書房、一九九七年）は、「卯の花があると、申し入れを承諾してくれることになる。一般に卯の花は『憂』を込めるが、賀の屏風ゆえ、成就

の意の『諾』が歌われた」と注するが、不審。卯の花に「憂」を掛ける例は、古今集・九四九「世中をいとふ山べの草木とやあなうの花の色にいでにけむ」など多いが、明らかに卯の花と「諾」の関連が詠まれるのは、管見の範囲では、「とはばこそいなともうとも卯花の雪のよそめの道も分れず」（藤川五百首鈔・一〇五・実隆）まで下るためである。

【所載】後拾遺集・異本歌・一二二四／貫之集Ⅰ・一四七／和歌童蒙抄・五五二
【参考】作者名「つらゆき」は、後拾遺集では清原元輔とするが、貫之集に収められている。

〔以上五首担当 杉本〕

八一 ときならぬたまをぞぬけるうのはなはさ月をまたばひさしかるべく

【異同】ナシ

【現代語訳】まだその時期ではないのに薬玉につくるように花を糸が貫いたようだ。卯の花は（薬玉の時期まで）待つとしたらなかなかの（この四月に）。

【語句】○ときならぬ その時ではないのに。○たまをぞぬける 「玉をぬく」は 玉の穴に糸を通すこと。草に置く露を、草の糸が白珠を通すと歌う。「秋の野の草は糸とも見えなくにおく白露を玉にぬくらん」（古今六帖・五四）。また薬玉にあやめ草を通すこと。「ほととぎす待てど来鳴かずあやめ草玉に貫く日をいまた遠みか」（万葉集・一四九四（旧一四九〇）、「……卯の花の 咲く月立てば めづらしく 鳴くほととぎす あやめ草 珠貫くまでに 昼暮らし 夜渡し聞けど……」（万葉・四一三（旧四〇八九））。○さ月をまたばひさしかるべく 五月を待つにはまだまのあるはずだが。五月五日は沈香（じんこう）や丁子（ちようじ）など香料を袋に入れ菖蒲や蓬をあしらひ五色の糸を長く垂らした薬玉（くすだま）が糸所（いとどころ）から献上された。

【所載】万葉集・一九七九（旧一九七五）不時 玉乎曾連有 宇能花乃 五月乎待者 可久有 トキナラヌタマ
コソケルウノハナノサツキヨマタバヒサシカルベク ときならずたまをぞぬけるうのはなのさつきをまたばひさしかるべみ／人麿集Ⅲ・八〇

【参考】卯の花の咲き満ちた様を薬玉とみて歌ったもの。薬玉の時期五月には程遠い四月の卯の花。「時ならで玉をぞぬける」で始まる類歌が赤人集Ⅰ・二五六、赤人集Ⅱ・一三〇、赤人集Ⅲ・一四二にある。

八二 時わかずふれる雪かとみるまでにかきねもたわにさけるうの花

【異同】ナシ

【現代語訳】冬でもないのに降る雪かと思えるまでに垣根もしなるほどたわわに咲いている卵の花。

【語句】○時わかず 季節を区別せず。「時わかず月か雪かと思えるまでにかきねのままにさけるうの花」(後撰集・一五五)。○ふれる 動詞「降る」の已然形「降り」に完了の助動詞「り」の連体形「る」の接続したかたち。

【所載】後撰集・夏・一五三／拾遺集・夏・九四／和歌童蒙抄・五五三

神まつり

そせい法師

八三 かみまつるうづきにさけるうの花をしるくもきねがしらげたるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】賀茂祭りの四月に咲いている卵花を(何と)真白に巫が白くしたこと!

【語句】◎神まつり 神を祭る儀式。祭り。賀茂の祭りは有名。それ以外にも三輪神社、春日神社などをはじめ、各神社ごとに、毎月の例祭をはじめ様々にあるが、ここは四月の祭り。「春風にこずる咲きゆく紀の国やありまの村にかみまつりせよ」(夫木抄・一四八五二)。○きね 巫。かんなぎ。かむなぎ。かむなぎ。神意を伺い、神に仕える人。穀物などを臼に入れてつくのに用いる道具の「杵(きね)」をかける。「きねといふはかんなぎの名なり」(俊頼髓脳)。○しらげたるかな 動詞「しらぐ」(下二段)は玄米を搗き糠をのぞいて白くすること。「臼たてたり。臼一つに女ども八人立てり。米しらげたり。」(宇津保物語・吹上 上)、「物しらぐる具にも杵といふものあればそへてよめり」(奥儀抄)。

【所載】拾遺抄・五九／拾遺集・九一／躬恒集Ⅰ・三四四／躬恒集Ⅱ・二〇五／躬恒集Ⅲ・三六八／俊頼髓脳・三四六／奥儀抄・二五一

【参考】作者名「そせい法師」とあるが、拾遺抄・拾遺集では「躬恒」の作。

つらゆき

八四 うの花のいろにまがへるゆふしでけふこそ神をいのるべらなれ

【異同】○いのるへらなれ—まつるへらなれ(大)

【現代語訳】卯の花の色に見まがう白木綿を長くたらしめて、今日この日神を祈るのだ。

【語句】○ゆふ 木綿。楮の皮の繊維を織った糸。これで織った布を袴といひ幣帛、として衾にたらず。○して
ゝ たらして。「しづ」は夕行下二段活用動詞。しだれさせる意。○べらなれ 助動詞「べらなり」の已然形。

【所載】貫之集Ⅰ・四二九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

八五 神まつるときにしなればさかきばのときはのかげはかはらざりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】神祭る冬になったので(木々の葉は色変わり、落ちたが) 衾葉の常緑の木陰は少しも変わらないの
だった。

【語句】○神まつるとき 四月の賀茂祭にもいうが、当該歌は所載欄の貫之集によれば、一連の屏風絵中の冬の
「山里に神祭る」絵に付された歌。○さかきば 衾葉。さかきの葉。衾は賢木とも書くが、葉に光沢のあるツバ
キ科の常緑樹。古来神事に用いる。○ときは 常磐。永久に変わらないこと。ここは色を変えない衾の、常に緑
であることをいう。

【所載】貫之集Ⅰ・二四二

【参考】本来は貫之の屏風歌で、その歌は冬の「山里に神祭る」絵とともに鑑賞される性質のもの。歌意もそれ
にふさわしい。古今六帖「巻一、歳時部、夏」の中のこの位置にあるのは不審。「神まつる」という語句をもつ歌
として注記されていたのが本文化したか。

〔以上五首担当 平野〕

八六 かみのますもりのしたくさ風ふけばなびきてもみなまつるころかな
したがふ

【異同】ナシ

【現代語訳】御祭神のおわします賀茂の社の森の下草に風が吹きわたると草がなびくように、人々もみななびき

従って神を祭る頃であるよ。

【語句】○かみのますもり この一首は、順集では屏風歌で、「四月、神まつる所」と詞書がある。四月の「まつり」は賀茂社の祭であり、従ってこの「かみ」は賀茂別雷神（上賀茂）、その母玉依媛命と賀茂建角身命（下賀茂）をさす。その神の鎮座まします賀茂の社の森。○なびきて 森の下草が風に「なびく」ことに、人々が神威に「なびき従う」ことを掛けた。

【所載】順集Ⅰ・一〇／順集Ⅱ・一七一

【参考】作者名「したがふ」は所載欄の文献に一致する。

五月

八七 さ月やまこずゑをたかみほとゝぎすなくねそらなるこひもするかな
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】五月の山の梢は葉が茂って高いので、その梢あたりで鳴くほととぎすの声も空高く聞こえる。そんな時私も恋をして、心はまさに上の空になっていることだ。

【語句】◎五月 さつき。陰暦五月の称。仲夏。○さ月やま 本来は陰暦五月の山という意であったが、歌枕化して地名のイメージが生じ、大阪府池田市にある五月山がそれか、と言われるようになった。ただしこの歌では、特定の山をさすものではなく、ただ五月の山、ということである。○なくねそらなる ほととぎすの鳴く音が「空」ですることに、恋の思いで心が「うわの空」になることを掛けた。この掛詞により、初句より「なくね」までが、「そらなる」にかかる序詞。

【所載】古今集・恋二・五七九／貫之集Ⅰ・五七八

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

八八 さみだれになへひきうふるたごよりもひとをこひぢにわれぞぬれぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】五月雨にぬれて泥にまみれながら苗を植える農夫も苦勞なことであるが、それよりもなお私は、泥

(こひぢ)ならぬ恋路(こひぢ)にさまよつて、五月雨ならぬ涙にぬれていることだ。

【語句】○さみだれ 陰暦五月のころに降りつづく長雨。梅雨。○なへひきうふる なへひきううる。稲の苗を苗代から引いて水田に植える。○たご 田子。農夫のこと。○こひぢ 泥のこと。ここでは「恋路」を掛けてある。「こひぢ」「ぬれ」は「たご」の縁語。

【所載】 夫木抄・二五七九／和歌童蒙抄・五七／袖中抄・七七五

八九 をしなべてさ月のそらをみわたせばみづもくさばもみなみどりなり

【異同】 ナシ

【現代語訳】 五月の空を広く見渡すと、空ばかりでなく、総じて目に入る景はすべて、水も草葉も緑一色であるよ。

【語句】 ○をしなべて おしなべて。すべて一様に。総じて。この初句は、下句全体にかかる。

【所載】 新勅撰集・夏・一五二／新撰万葉集・三一／寛平御時后宮歌合・七二

九〇 さみだれにみだれそめにしわれなれば人をこひぢにぬれぬ日ぞなき
みつね

【異同】 ナシ

【現代語訳】 さみだれの降るこの頃、恋に心乱れはじめた私だから、雨降り道の泥(こひぢ)ならぬ、恋路の涙にぬれぬ日とてない。

【語句】 ○さみだれ 八八番参照。○みだれそめにし 恋の思いに心の乱れはじめた。「さみだれにみだれ」と同音をくり返した技巧。○こひぢ 八八番参照。

【所載】 玉葉集・恋四・一六二七／躬恒集Ⅰ・一八七／躬恒集Ⅱ・一〇四／躬恒集Ⅲ・九二／躬恒集Ⅳ・二八、四三九

【参考】 作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 斎藤・山下〕

九一 さみだれにはるのみやびとくるときはほととぎすをやうぐひすにせん
おほかすがのもののり

【異同】ナシ

【現代語訳】五月雨の時期に「春」という名をもつ春宮坊の方がいらっしやる時には、夏の鳥である時鳥を春に因んだ鶯にしてみましたか。

【語句】○さみだれ 五月雨の季節。岩井宏子「歌語さみだれの基層」『古今的表現の成立と展開』和泉書院、二〇〇八年）によれば、「五月雨」は雨ではなく季節を表す場合があるという。季節の乱れという意味の「さ乱れ」を響かせるか。○はるのみやびと 春宮坊の宮人。「霞たつ山べを君によそへつつ春の宮人なほやたのまん」（貫之集・七八一・東宮かくれたまへるころよめる）。○ほととぎす 時鳥。カッコウ目カッコウ科の鳥。カッコウより小型で山地の樹林に住む。夏を知らせる鳥で鳴き声が珍重され、鶯などの単に托卵する。五月雨と取り合わせられた歌「五月雨に物思ひをれば郭公夜ぶかくなきていづちゆくらむ」（古今集・一五三・友則）。○うぐひす 「春の宮人」の「春」に因んで春の鳥を引き合いに出した。ほととぎすとともに詠まれるのは、「うぐひすの かひごのなかに ほととぎす ひとり生まれて なが父に 似ては鳴かず……」（万葉集・一七五九（旧一七五五））という托卵の歌。鶯の単のなかに郭公が生まれることを逆手にとり、五月雨の季節の郭公ではなく、春宮坊の春に因んだ鶯にしてみましたという趣向。

【所載】後撰集・夏・一六六

【参考】作者名「おほかすがのもののり」は所載欄の文献に一致する。勅撰作者部類に「六位 御書所預 隼人佐」とされる「大春日師範」を指すか。

九二 ほととぎすこゑきよしよりあやめぐさかさすさ月としりにしものを
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】時鳥の声を聞いた時から、菖蒲草をかざす五月になったと知っていたのだが。

【語句】○ほととぎす 九一 番歌参照。○あやめぐさかさすさ月 五月五日の節句には菖蒲髪をつける風習がある。「是ノ日内外ノ群臣皆菖蒲ヲ著ス」（延喜式・太政官式）。「ほととぎす」と「あやめ草」は、「卯の花」「花

橘」とともに万葉集以来の常套的な取り合わせ。「……時鳥 鳴く五月には あやめ草 花橘を 玉に貫き かつらにせむと……」(万葉集・四二六(旧四三三))、「ほととぎす今来鳴きそむあやめ草かつらくまでに離るる日 あらめや」(万葉集・四一九七(旧四一七五))、「時鳥鳴くや五月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな」(古今集・恋一・四六九)など。○ものを 逆接確定条件。……のになあ。……のだがなあ。

【所載】新勅撰集・夏・一五三／貫之集I・二二八
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

九三 さ月くるみちもしらねどほととぎすなくこゑのみぞしるべなりける

【異同】しるへなりける―しるへ也けり(大)

【現代語訳】五月がやってくるという道は知らないけれど、時鳥の鳴く声だけがその訪れを知るたよりだったのだなあ。

【語句】○さ月くるみち 季節の擬人化。「道知らばたづねも行かむもみぢばをぬさとたむけて秋はいにけり」(古今集・三二三・躬恒)。○しるべ 知るたより、導き、道案内。五月が来たことを知る「たより」の意だが、五月を導いてくる「道案内」の意を響かせる。ほととぎすの声をしるべとする例は、「時鳥来つつこだかく鳴く声は千世のさ月のしるべなりけり」(貫之集・三三〇)。

【所載】貫之集I・二五六

【参考】古今六帖に作者名はないが、貫之集に入集する。

五日

九四 あしひきのやまほととぎすけふとてやあやめのくさのねにたてゝなく

【異同】ナシ

【現代語訳】山郭公は、今日と思ひ定めて、菖蒲草の根にあやかつて、それで高く声たてて鳴いているのか。

【語句】◎五日 五月五日。端午の節。軒の菖蒲を葺き、競べ馬の行事が催され、粽や薬玉の贈答が行われた。

○あしひきのやまほととぎす 「あしひきの」は山にかかる枕詞。「やまほととぎす」は山に住む郭公。単に郭公をさす場合もある。「あしひきの山郭公我がごとや君に恋ひつついねがてにする」(古今集・四九九)、「いつのま

にさ月来ぬらむあしひきの山郭公今ぞ鳴くなる」(古今集・一四〇)。〇とてや だと思つて、と定めて……か。「や」は疑問の係助詞。〇あやめのくさ 「郭公」と取り合わされる。九二番歌参照。〇ねにたててなく 前句「あやめのくさの」から「根」へと続き、同音の掛詞「音」に転ずる。「ねになく」は声をたてて鳴く。「ね」の一語で、五月の景物である「あやめ草」と「山郭公」を結びつける。「いつかともおもはぬさはあやめ草ただつくづくとねこそなかるれ」(拾遺集・七六七)、「あしひきの山郭公をりはへてたれかまさるとねのみぞなく」(古今集・一五〇)。

【所載】拾遺抄・夏・七一／拾遺集・夏・一一一／新撰和歌・一三五／新撰朗詠集・一四九／元輔集Ⅰ・二二七／時代不同歌合・七九／秀歌大体・三九

【参考】作者名はないが、拾遺抄、拾遺集、新撰朗詠集、時代不同歌合では「延喜御製」となっている。元輔集Ⅰは竄入の可能性が高い。

九五 ほとゝぎすなくともわか^しかずあやめ草こぞくすりびのしるしなりける^{つらゆき}

【異同】ナシ

【現代語訳】時鳥が鳴いているとも知らず、あやめ草を見てこれこそが五月五日、薬日のしるしであると気づいたのだった。

【語句】〇なくともしらず 「とも」は逆接仮定条件を表す接続助詞。たとえ……しても。「夏衣しばしなたちそ時鳥鳴くともいまだ聞えざりけり」(貫之集・七八)。〇くすりび 陰暦五月五日(九四番歌参照)の異称。この日薬玉を掛けたからとも、薬狩をしたからともいう。「薬日のたもとにむすぶあやめ草たまつくりえにひけばなるべし」(惠慶集・二二〇)。〇しるし 他とまぎれないよう見分けるための目印、証拠。「ふればまづ君がすみかを思ふかな雪は山べのしるしなりけり」(公任集・二二七)。

【所載】夫木抄・二六〇七／貫之集Ⅰ・五二五

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 中野〕

九六 たがさともねやのまに／あやめぐさけふひきかけぬ人はあらしな

【異同】ナシ

【現代語訳】誰の里でも、寝所ごとに、きょうこの日、あやめぐさを引きかけない人はないでしょうね。

【語句】○たがさとも 誰の里でもみんな。○ねやのまに／＼ 寝所ごとにそれぞれ。「ねや」は人が寝るための建物または部屋。○あやめぐさ 菖蒲のこと。池辺・沼沢などに生えるサトイモ科の常緑多年草で、夏、肉穂花序の細かい花を付ける。葉は似ているが現在のあやめとは別。その香気が愛され、邪気を払うものとして端午の節には門口や軒や部屋の入り口などにひき掛けられた。また薬玉を作ったり、鬘として冠や髪に挿したりもした。

○けふ 五月五日をさす。端午の節の日。

【所載】ナシ

あやめぐさ

つらゆき

九七 さはべなるみこもかりてはあやめぐさそでさへひちてけふやとるらん

【異同】そてさへひちて―そへさへひちて(御)

【現代語訳】沢辺に生えているまこもを刈って、それからあのあやめ草を、袖までもびしよぬれになりながら、きょうは採ることでしようか。

【語句】◎あやめぐさ 菖蒲のこと。九六番歌参照。和歌では、五月五日端午の節の景物として「根」「泥(うき)」「刈り」「引く」などとの関連で詠まれる。○みこも まこも。イネ科の多年草。川や湖沼の浅い所に群生する。○かりては 刈ってからその上で。○そでさへひちて 袖まで濡れて。「さへ」は、添加、累加を表わす副助詞。足や衣の裾はもちろん、その上袖までも濡れて、の意。

【所載】貫之集I・三六

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。和歌童蒙抄五六二番歌は、この歌の上句と次の歌(九八番)の下句とが結びついた形で一首となっている。

九八 さ月てふさつきにあへるあやめぐさうべもねながくおもひそめけり

【異同】ナシ

【現代語訳】すべての五月にめぐり合うあやめ草は、なるほど根が長いが、思えばわたしも、あの人のことをずいぶん長い以前から思い始めたことだなあ。

【語句】○さ月てふさつき ありとあらゆる五月。年ごとのすべての五月。○うべも いかにも。なるほど。「うべ」は、事情を肯定し納得する気持を表す副詞。「も」は強調の助詞。○ねながくおもひそめけり あやめの「根長く」に、「長く思ひ初め」を言い掛けた。「さ月てふさつきにあへるあやめぐさね」が、「ながく」を言うための序。貫之集Ⅰでは、第五句が「おひそめにけり」となっている。

【所載】貫之集Ⅰ・三九三

【参考】和歌童蒙抄五六二番歌は、前歌（九七番）の上句とこの歌の下句が結びついた形で一首となっている。

九九 あやめぐさねながきのちつげばこそけふとしなれば人のひくらめ

【異同】ナシ

【現代語訳】あやめ草は根が長く、長い命を持ち続けるからこそ、五月五日という今日になると、人が抜き取るのであろう。

【語句】○ねながきのち 根の「長き」ことに、「長き命」を掛ける。○つげばこそ 引き続き保持しているからこそ。○けふとしなれば きょうというこの日になれば。「し」は強意の助詞。○人のひくらめ 人があやめの根を引くのであろう。「ひく」は、この場合、引いて抜き取ること。

【所載】貫之集Ⅰ・一三二

一〇〇 みがくれておふるさ月のあやめぐさかをたづねてや人のひくらん

【異同】ナシ

【現代語訳】水中に隠れ生えている五月のあやめ草は、あんなに水に隠れていても、その高い香りをたずね知って、人が引き抜くのでしょうか。

【語句】○みがくれて 水隠れて。水中に隠れて。○かをたづねてや 香りを探してそれによってありかを知つてか。「や」は、軽い疑問の気持を含む係助詞、末句の「ひくらん」へひびく。

【所載】和歌童蒙抄・五六三

【参考】続古今集・夏・二二九番に、貫之の歌として「みがくれておふるさつきのあやめぐさ長きためしに人はひかなん」がある。

〔以上五首担当 犬養悦・山下〕

一〇一 さみだれのたまにぬく日のあやめぐさねにあらはれてなきぬべらなり
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】五月雨が糸として葉玉を貫く日のあやめ草が、雨に洗われ根が顕れて―私も「音に顕れて」声をたてて泣いてしまえうだ。

【語句】○さみだれのたまにぬく日 五月雨が、糸として葉玉を貫く日。すなわち、五月五日の端午の節の日。

「の」は主格。○ねにあらはれて 「根」に「音」を掛け、「洗はれて」に「顕れて」を掛けて、五月雨に洗われてあやめ草の根が顕れ露出する意と、声を出して泣く意とを表す。「風ふけば浪打つ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり」(古今集・六七二)。○べらなり 確定推量の助動詞。六一番歌参照。藏中スミ「歌語『べらなり』の周辺」(『水門』一九七八年八月)、藏中スミ「歌語『べらなり』」(『水門』一九八〇年十月)。
中野方子「『古今集』における「べらなり」―喩に承接される助動詞―」(『国文』一九九七年一月)。

【所載】躬恒集Ⅱ・九五／躬恒集Ⅲ・八四

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

一〇二 かくれぬのそこにおふれどあやめぐさねごめにひきて見るひとはみつ

【異同】ナシ

【現代語訳】このあやめ草は隠れ沼の底に生えていたけれど、根こそぎ引いて、見る人は見たよ。

【語句】○かくれぬ 隠れ沼。草などの陰に隠れて見えない沼。「かくれぬにおひそめにけりあやめ草しる人なしに深きしたねを」(蜻蛉日記・一九四)。○ねごめ 根ぐるみ。根こそぎ。「垣越しにちりくる花を見るよりはねごめに風の吹きもこさなん」(後撰集・八五)。

【所載】ナシ

【参考】当該歌は、人に知られぬ女を男が見いだして逢った意を込めるか。その場合、「そこ」は、「底」に「其処」を掛けるか。「かくれぬのその心ぞ恨めしきいかにせよとてつれなかるらん」(拾遺集・七五八)。

一〇三二 あやめ草ねながきとればさはみづのふかきこころもしりぬべらなり
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】あやめ草の根が長いものを取ると、それが生えていた沢水が深いことがわかるように、私の深い心もきつとわかるに違いないよ。

【語句】○ふかき 根の長いあやめ草が生えていた沢水の深さと、心(思い)の深さとを表す。「とどぶ鳥のこゑもきこえぬ奥山の深き心を人は知らなむ」(古今集・五三五)。○べらなり 一〇一番歌参照。

【所載】貫之集I・二二七

【参考】作者名は「つらゆき」とあり、貫之集では「さうふとれる所 又かさせるもあり」という詞書と共に見える。

一〇四 あやめぐさいくよのさつきあひぬらんくるとしごと^二にわかくみえつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】あやめ草はいったいどれほど長い年代の間、五月という月に逢ってきたのだろうか。新しい年が巡って来てあやめ草の根を繰る度に、若々しくなるように見えていながら。

【語句】○いくよ どれほどの長い年月。○くる 「来る」に、「あやめ草」の縁語である「繰る」を掛ける。「さみだれにあひくることはあやめぐさねながき命あればなりけり」(貫之集・五〇九)。

【所載】新撰万葉集・六一／寛平御時后宮歌合・七一

【参考】新撰万葉集には、二句「イクツノセチニ(五十人沓之五月)」、五句「ワカクミユレバ(稚見湯札者)」とあり、寛平御時后宮歌合には、二句「いくらの五月」、三句「あひ来らむ」、五句「若くみゆらむ」とある。いずれも作者名の記載はない。

みな月

みつね

一〇五 おほあらしのもりのした草茂りあひてふかくもなつになりけるかな

【異同】ふかくもなつに—ふかくも夏の(大)

【現代語訳】大荒木の森の下草が茂りあつて草深くなり、すっかり夏も深くなつたことだ。

【語句】◎みな月 陰曆六月の異称。当該歌のように繁茂する夏草が詠まれたり、一〇七番歌のように残暑が詠まれたりした。○おほあらしのもり 大荒木の森。「おほあらしのもり」ともいう歌枕。所載欄の躬恒集・忠岑集の伝本によつては、「おほあらしのもり」とするものもある。五代集歌枕などは山城国とするが、本来は大和国であつたともいう。平安時代には、下草が生い茂つて訪れる人もいない様が詠まれることが多かつた。「おほあらしの森のした草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし」(古今集・八九二)。○ふかく 下草が繁茂して草深くなる意と、夏が深まる意とを表す。「深く」が上の文脈と下の文脈を連結する例については、一〇三番歌に同様の形が見られる。

【所載】拾遺抄・夏・八六／拾遺集・夏・一三六／新撰朗詠集・一五九／躬恒集Ⅰ・八二／躬恒集Ⅲ・一四三／躬恒集Ⅳ・五／躬恒集Ⅴ・一八／忠岑集Ⅰ・三／忠岑集Ⅱ・五五／忠岑集Ⅲ・八九／忠岑集Ⅳ・一六九／寛平御時中宮歌合・一二／秀歌大概・四一

【参考】作者名は「みつね」とあり、躬恒集に見え、寛平御時中宮歌合も作者名を「躬恒」とするが、拾遺抄・拾遺集によると作者は壬生忠岑とあり、忠岑集にも見えて、問題が残る。寛平御時中宮歌合は撰歌合と推察されるので、拾遺抄・拾遺集・躬恒集・忠岑集等の詞書を勘案すると、延喜五(九〇五)年、藤原定国の四十賀の屏風歌と認められる。所載欄の他の文献では四句目が「深くも夏の」とあるものが多い。

〔以上五首担当 長戸〕

一〇六 なつはみないづこともなくあしひきの山べも野べもしげりあひつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】夏はみなどこといふこともなく、山辺も野辺も草木が生い茂っているよ。

【語句】〇いづこともなく 場所を特定することなく。どこということもなく。「みかさやまさしても見えず夏なればいづこともなくあをみわたれり」(好忠集・一〇三二)。〇しげりあひ 一〇五番歌参照。

【所載】ナシ

【参考】前歌を受けて「しげりあひ」が特定の場所にとどまらずますます広がっている、と言いたげな配列。

一〇七 みな月のつちさへわれててるひにもわが袖ひめやいもにあはずて
人丸 或本

【異同】ナシ

【現代語訳】六月の土までひび割れるほど強く照る日でも、私の袖が乾くことがあるのだろうか(いや、乾きはしまい)、君に逢わないでは。

【語句】〇つちさへわれて 所載欄の文献ではいずれも「土さへさけて」とある。万葉集には「割」がこの歌のほかにも四例あるが、いずれも「さけ」と訓まれている。〇わが袖ひめや 「や」は係助詞。反語。〇ずて 打消の助動詞「ず」の連用形に接続助詞「て」の付いたもの。……ないで。……なくて。上代に多くみられる。「思ひ遣るすべのたづきも今はなし君に逢はずて年の経ぬれば」(万葉集・三三七五(旧三二六一))。

【所載】拾遺抄・恋上・二七七／拾遺集・恋三・八二五／万葉集・一九九九(旧一九九五) 六月之 地副割而照日尔毛 吾袖将乾哉 於君不相四手 ミナツキノツチサヘサケテルヒニモワガソデヒメヤキミアハズシテ
みなつきのつちさへさけててるひにもわがそでひめやきみにあはずして／人麿集Ⅰ・七三／人麿集Ⅱ・四〇七／人麿集Ⅲ・二二二／赤人集Ⅰ・二六八

【参考】人麿集にも収められているが、万葉集では「作者未詳」。拾遺抄・拾遺集でも「よみ人知らず」とする。なお、古今六帖・二七四に「つくばねの雲けふまでにてるひにもわがそでひめやいもにあふまで」という、下旬の酷似する歌がある。

一〇八 夏ごろもうすきかひなくあきまではこのしたかぜのやまずふかなむ
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】夏衣の薄い甲斐もなく（暑いこの夏なので）、秋までは木の下を抜ける涼しい風が止むことなく吹き続けてほしいものだ。

【語句】○夏ごろもうすきかひなく 薄い夏衣でも甲斐のないほどの暑さをいう。ただし、夏衣の薄さは愛情が薄くなった喩えとして恋歌に用いられることが多い。「蟬のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば」（古今集・恋四・七一五）。○このしたかぜ 木の、枝で覆われた下を吹き抜ける風。ここでは涼風。「かげふかきこのした風の吹きくれば夏のうちながら秋ぞきにける」（貫之集・四八三）。

【所載】貫之集Ⅰ・一五〇／元輔集Ⅰ・二六三

【参考】作者名「貫之」は所載欄の文献に一致する。ただし元輔集は屏風歌を集めた歌群に収め、作者記載はない。

なごしのはらへ

一〇九 拾五賀 みな月のなごしのはらへするひとはちとせのいのちのぶといふなり

【異同】ナシ

【現代語訳】六月の夏越の祓をする人は、千歳までも寿命が延びるということです。

【語句】◎なごしのはらへ 六月晦日に行う祓。茅輪をくぐる、人形（ひとがた）を撫で祝詞をあげ川に流す、などを行なったという。和歌では屏風歌に多く見られる。「かはなみもなごしのはらへするけふはうかぶかげさへのどけかりけり」（能宣集・三九七）、「ゆふだちにややくれにけりみなづきのなごしのはらへせでやすごさん」（好忠集・五〇三）。○のぶといふなり 「なり」は伝聞。「すみよしとあまはつぐともながあすな人忘草おふといふなり」（古今集・九一七）、「しらかはのたきのいとなみみだれつつよるをぞ人はまつといふなる」（後撰集・一〇八七）。

【所載】拾遺抄・賀・一八七／拾遺集・賀・二九二

一一〇 おほぬさの川のせごとながれてもちとせの夏はなつばらへせん

【異同】ナシ

【現代語訳】大幣が川の瀬ごとに流れても、いつまでもめぐって来る夏には夏越の祓を続けようと思えます。
【語句】○おほぬさ 大串につけた幣。祓の時に用いて人々の穢れを移し、終わると川に流した。「なげきどをなべてはらふるおほぬさははやかはのせにながれいでぬり」(伊勢集・四二)。○川のせごとにながれても あちこちで大幣を流している。大幣の数だけ思いはそれぞれだが、の意。「みそぎするかはのせごとにひくあみをおほぬさなりと人やみるらん」(能宣集・八七)。○ちとせの夏 いつまでもめぐり続ける夏。賀意をこめる。「わがやどの池にのみすむ鶴なれば千とせの夏の数はしるらん」(貫之集・四八二)。○なつばらへ「夏越しの祓」に同じ。一〇九番歌参照。「かも河のみなそにすみててる月をゆきて見むとや夏ばらへする」(後撰集・二一五)。

【所載】貫之集Ⅰ・一三二

〔以上五首担当 青木〕

一一一 みそぎつゝおもふことをぞいのりつるやをよろづよの神のまにいせく

【異同】おもふことをそ—おもふかとをそ(大)

【現代語訳】襦ぎをしながら、心中の願い事をお祈りしたことでした。八百万代の神様の思し召しのままに。

【語句】○やをよろづよの 「やほよろづ」に「よろづよ」を掛けた言い方。「やほよろづ」は「八百万」で、数の多いこと、無数に、の意。「八百万の神」というように用いられる。また「よろづよ(万代)」には長寿をことほぐ意がこめられており、当該歌は拾遺集等によれば「中宮の賀」における屏風歌なので、中宮に対する賀の気持ちも表されています。

【所載】拾遺抄・賀・一八八／拾遺集・賀・二九三／伊勢集Ⅰ・八二／伊勢集Ⅱ・八四／伊勢集Ⅲ・八一／綺語抄・二七二

【参考】作者名は「いせ」とあり、伊勢集にも見えるが、拾遺抄には「寛平四年中宮の賀し侍りける時の屏風に藤原伊衡朝臣」、拾遺集にも「承平四年、中宮の賀し侍りける屏風 参議伊衡」とあって、いずれも「伊衡」である。そこに多少の問題は残る。また拾遺抄等に見える「中宮の賀」は、伊勢集の詞書では各伝本ともに「后宮五十賀」とあり、醍醐天皇后、藤原穩子の五十賀である可能性が大きい。穩子の五十賀は承平四年(九三四)三月二十六日のことだから、拾遺抄の詞書に見える「寛平四年」は誤りで、拾遺集の「承平四年」が正しいのであろう。

一一二 この川にはらへてながすことのはなみの花にぞたぐふべらなる つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】この川で祓い清めて流す言の葉は、白く泡立つ波の花と一緒にあって見えることだ。

【語句】○はらへてながす 罪や穢れを祓い清めるために、それを幣に書いて水に流す。○ことのは 祓えの内容、言葉。○なみの花 波が立ったときに見える、白い波がしらをいう。「花」は「葉」の縁語。「言の葉もなくて経にける年月にこの春だにも花は咲かなむ」(後撰集・一二四三)。○たぐふべらなる 寄り添っているようだ。一緒にあっているみたいだ。「べらなる」は推量の助動詞「べらなり」の連体形。

【所載】貫之集Ⅰ・一〇七／夫木抄・三七六一

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一一三 みそぎつる^{サイ}かはのせみればからころもひもゆふぐれになみぞたちける つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】禊ぎが終わった川の浅瀬を見ると、着替えの衣の紐を結う、その夕暮れ時に波が立っていることだ。

【語句】○ひも 「紐」に「日も」を掛ける。○ゆふぐれに 紐を結ぶ意の「結ぶ」に「夕暮」を掛ける。○なみぞたちける 波が「立つ」に「裁つ」を掛ける。「紐」「結ぶ」「裁つ」は「からころも」(唐衣)の縁語。

【所載】新古今集・夏・二八四／貫之集Ⅰ・一一／貫之集Ⅱ・九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一一四 そらみえてながるゝ川のさやかにもはらふることを神はきかなん みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】空を映して流れる川がはつきりと澄み切っているように、どうぞ神様はお祓いの言葉をはつきりと耳におとどめになつてください。

【語句】○そらみえて 空を川に映して、の意にとつた。拾遺集等には「そこきよみ」とあり、その方がわかりやすい。○さやかにも 上二句を受け、下二句を修飾する。すなわち「空見えて流るる川」がさやかであり、「祓ふることを神は」さやかに聞いてほしい、という意。

【所載】拾遺抄・夏・八四／拾遺集・夏・一三三／躬恒集IV・三五二／躬恒集V・三三三／宝物集・二一八
【参考】作者名は「みつね」とあり、躬恒集にも見えるが、拾遺抄等には「題不知 読人不知」とあって、問題が残る。

一一五 みことかはきけばをなじくおほぬさにかくはらふるをかみはきくらむ

【異同】 みことかは―みもかは（御）、みと河（桂・大） おほぬさに―大麻に（大）

【現代語訳】みもと川で聞くと、その名と同じようによく耳が利き、こうしてお祓いすることをさぞかし神様は聞いてくださるでしょう。

【語句】○みことかは 底本文は「みとかは」とも十分に読めるが、わざわざ傍注に「みと川イ」とあるので、敢えて異なる読み方に従った。しかし和歌本文としてはやはり「みとかは」が穏当と考え、採用した。「みと川」は大宮大路に沿って南流する川。大宮川。内裏に入つて御溝水になり、朱雀門より出る。朱雀門のあたりで大祓え、七瀬の祓えなどが行われた。「耳敏（みみと）」の意を掛ける。○おほぬさ 大串につけた幣で、祓えの具。

【所載】躬恒集I・一八六／躬恒集II・一〇三／躬恒集III・九一／躬恒集IV・四三八／夫木抄・一一二七六

【参考】作者名の記述はないが、当該歌は躬恒集の各伝本に見え、夫木抄にも「みつね」とある。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

一一六 としなかにわがなげきどはなりぬればみそぐともよにうせじとぞおもふ

【異同】 ナシ

【現代語訳】一年の半ばとなつてしまいました。(あなたに顧みられない私の嘆きはとても深いので) 禊をしても決して消えることはありません。 (あなたに) 思います。

【語句】○としなか 一年の半ば。半年。六月祓は六月晦日に行われた。○なげきど 用例のないことば。関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』(風間書房、一九九六年)に従い、嘆き所の意と解する。○よにうせじ 決して消えることはない。「世に」は、下に打ち消しの語を伴つて、「決して・断じて」の意を表す副詞。

【所載】夫木抄・三八〇九/伊勢集Ⅰ・四一/伊勢集Ⅱ・四三/伊勢集Ⅲ・四〇

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。伊勢集では温子の命により伊勢が詠んだ月次屏風歌の一部で、ⅠⅡⅢとも男が女に詠んだ歌。「なげきどをなべて被ふるおほぬさははや川の瀬に流れいでぬめり」(伊勢集Ⅰ・四二)との返歌がある。『伊勢集全釈』にあげてあるように、被によって恋の思いを断とうとした話は伊勢物語六十五段にもあり、「恋せじと御手洗河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな」と詠まれている。

八代女王

一一七 きみによりことのしげさにふるさとのあすかの川にみそぎしにゆく

【異同】八代女王―底本「八代女王」トスル入替符号アリ。八代女王(御・桂・大)

【現代語訳】あなたのせいでひどく噂を立てられますので、昔の都の飛鳥川に禊をしに参ります。

【語句】○八代女王 所載欄の他文献では「八代女王」とする。系譜等未詳。続日本紀によれば、天平九(七三七)年二月無位から正五位上。天平宝字二(七五八)年十二月、先帝(聖武天皇)に愛されていたのにその志を改めたとの理由で従四位下の位記を破棄された。○きみにより あなたのせいで。○ことのしげさに 噂がいっぱいなので。「に」は原因・理由を示す格助詞。○ふるさと 旧都。飛鳥古京をさす。○あすかの川 奈良県明日香地方を流れて大和川に注ぐ川。

【所載】万葉集・相聞・六二九(旧六二六) 君尔因 言之繁乎 古郷之 明日香乃河尔 潔身為尔去 一尾云、竜田超 三津之浜辺尔 潔身四二由久 キミニヨリコトノシゲキヲフルサトノアスカノカハニミノギシニユク 一尾云、タツタコエミツノハマヘニミノギシニユク きみによりことのしげきをふるさとのあすかの川にみそぎしにゆく 一尾云、たつたこえみつのはまへにみそぎしにゆく/夫木抄・三七八五

【参考】万葉集の題詞に見える「八代女王獻天皇歌」の「天皇」は聖武天皇。

一一八 みそぎするならのを川のかは風にいのりぞわたるしたにたえじと

【異同】ナシ

【現代語訳】禊をするならの小川の川風の中で神に祈り続けることだ、恋仲が人に知られないで絶えないようにと。

【語句】○ならのを川 京都市上賀茂神社境内を流れる御手洗川。○いのりぞわたる ずっと祈り続ける。「わたる」は動詞の連用形について「ずっと……続ける」意を表し、「川」の縁語。○したに ひそかに。内密に。「したにのみこふればくるし玉のをのたえてみだれむ人などがめそ」（古今集・六六七・ともりのり）。○たえじと 絶えないようにと。「たえ」は「川」の縁語。「じ」は打ち消しの意志の助動詞。

【所載】新古今集・恋五・一三七六／定家十体・二七

【参考】所載欄の他文献には作者名「八代女王」とある。新古今集の諸注釈書はそれを古今和歌六帖一一七番歌の作者名による誤認としている。

一一九 たつた川たきのせきりにはらへつゝいはひくらすはきみがためとぞ

【異同】ナシ

【現代語訳】竜田川の滝の急流で祓をしながら、無事を祈って一日を過ごすのは、あなたのためというわけですよ。

【語句】○たつた川 奈良県竜田の付近を流れる川。紅葉の名所。○せきり 水が瀬を押し切って流れていくこと。また、その所。早瀬。急流。「たがみそぎゆふだたみして立田川たきのせきりにぬさながすらん」（夫木抄・三八三八）。○いはひくらす 一日中神に無事を祈って過ごす。

【所載】夫木抄・三七八六、一一〇一八

一二〇 ねぎごとともきかであらざる神だにもけふのなごしのはらへといふなり したがふ

【異同】ナシ

【現代語訳】願い事もきかずに荒れ狂う神でさえも穏やかになる「和(なご)し」ではないが、今日は夏越(なご)しの祓ということだ。

【語句】○ねぎごと 願い事。○あらぶる神 荒れる神。人間に害をする神。○なごしのはらへ 夏越しの祓。六月の晦日に行った大祓の行事。「なごし」に「和し」(穏やかである意)を掛ける。「さばへなすあらぶる神もおしなべてけふはなごしの祓なりけり」(拾遺集・一三四・藤原長能)。

【所載】和漢朗詠集・一七〇／順集I・一二／深窓秘抄・三五

【参考】順集の詞書によれば源高明の大饗日にたてる屏風の歌。作者名「したがふ」は所載欄の順集と一致するが、深窓秘抄では作者名を高明の妻愛宮とする。和漢朗詠集では作者名記載なし。

〔以上五首担当 三浦〕

夏のはて

一一二 ゆふだちに夏はいぬめりそをちつゝあきのさかみにいまやいたらん

【異同】ナシ

【現代語訳】夕立とともに夏は過ぎ去るようだ。ぬれながら秋への境目に、今なるうとしているのだろうか。

【語句】◎夏のはて 夏の終り。陰暦六月末日。夏は陰暦四、五、六月。○そをちつゝ そほちつつ。ぬれながら。○あきのさかみ あきのさかひ。夏と秋との境目。

【所載】古今六帖「ゆふだち」五〇九

一二二 こよひしもいなばのつゆのをきしくはあきのとなりになればなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】今宵に限って、稲の葉に露がいちめんに置き広がっているのは、秋が隣まできているからなのだなあ。

【語句】○をきしく おきしく。露や霜がおりて一面に覆いつくす。○あきのとなりになれば 秋が隣まできているから。「あたたえてあれたるやどの月みれば秋のとなりになりぞしにける」(恵慶法師集・一四八)。

【所載】夫木抄・三七四七

一二三 にしへだに夏のいにせばしたひつゝやがてこひしき秋はみてまし

【異同】 ナシ

【現代語訳】西へさえ夏が行ってくれたら、なつかしく思っている恋しい秋にまもなく会えるのに。

【語句】○夏のいにせば もし夏が去ってくれたら。五句「秋はみてまし」と呼応して反実仮想となる。○こひしき秋 陰陽五行説では東が春、西が秋、南が夏、北が冬。それで西へ行けば恋しい秋に会えると言ったもの。「おなじえをわきてこのはのうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ」（古今集・二五五）。

【所載】 夫木抄・三七四六／和歌董蒙抄・一三一

一二四 夏とあきとゆきかふそらのかよひぢは^{に本}かたへすゞしき風やふくらん みつね

【異同】 ナシ

【現代語訳】去って行く夏とやってくる秋が行き来する空の通り道は、片一方には涼しい風が吹いているのだから。

【語句】○ゆきかふ 往来する。所載欄古今集の詞書に「みな月のつごもりの日よめる」とある。○かたへ 片一方。○すゞしき風 初秋の風として詠まれる。「孟秋之月、涼風至、白露降」（礼記・月令）。

【所載】 古今集・夏歌・一六八／新撰朗詠集・一六〇／躬恒集Ⅰ・一九五／躬恒集Ⅱ・一一二／躬恒集Ⅲ・一〇〇／躬恒集Ⅳ・四四六／古来風体抄・二四二／桐火桶・七二

【参考】 作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

秋たつひ

古四 秋上

一二五 あきゝぬとめにはさやかに見えねどもかぜのをとにぞをどろかれぬる

藤原敏行朝臣

【異同】 ナシ

【現代語訳】秋が来たと目にははつきり見えないが、風の音ではつと秋が感じられることだ。

【語句】◎秋たつひ 立秋の日。二十四節気の一。秋は陰暦のほぼ七、八、九月。暑い夏が去って待ちこがれた秋が来た、という期待をもって涼風とともに詠まれる。和漢朗詠集、千載佳句には「立秋」の題がある。○さやかに はつきりと。○をどろかれぬる おどろかれぬる。はつと気づかされた。「れ」は自発。

【所載】古今集・秋上・一六九／新撰万葉集・三八八／新撰和歌・二一／和漢朗詠集・二〇六／敏行集・一四／寛平御時中宮歌合・一四／俊成三十六人歌合・六一／時代不同歌合・四九／和歌体十種・一三／和歌十体・六／三十人撰・六五／三十六人撰・八九／奥儀抄・一一〇／桐火桶・七三

【参考】作者名「藤原敏行朝臣」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 橋本・林〕

一二六 同 河風のすゞしくもあるかうちよするなみとゝもにやあきはたつらん つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】川風がなんと涼しいことだ。この打ち寄せる波が立つように、波とともに秋が立つのであるうか。

【語句】○河風のすゞしくもあるか 当該歌を下敷きにした例として「河かぜのすゞしくもあるか夏ごろも我がみのうへに秋や立つらん」（高遠集・三四六）があげられる。○なみとゝもにやあきはたつらん 川風が吹き、波が立つ、それと同時に立秋になるのか、と詠む。この歌は、所載欄の古今集によれば実際に賀茂川で詠んだ歌。

【所載】古今集・秋上・一七〇／新撰朗詠集・一八八／貫之集I・七九二／秀歌大体・四四／古来風体抄・二四三／桐火桶・七四

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。なお、集付けの「同」は一二五番歌に、「古四 秋上」とあるのに同じ、の意。

一二七 同 きのふこそさなへとりしかいつのまにいな葉そよぎて秋風のふく

【異同】いな葉そよぎて—いな葉もそよと（大）

【現代語訳】つい昨日、早苗をとって田植をしたように思っていたけれど、いつの間に稲葉が繁りそよそよと

音を立てて秋風が吹くようになったのだろうか。

【語句】○きのふこそ 「昨日こそ……しか」で、つい昨日……したばかりのように思っていたが、の意。「昨日こそ……しか」の表現は、万葉集の「昨日こそきみはありしか」(四四七(旧四四四))「昨日こそ船出はせしか」(三九一五(旧三八九三))の例や、拾遺集の「昨日こそ年はくれしか春霞かすがの山にはやたちちにけり」(三三)の例がある。この拾遺集歌は赤人の詠(和漢朗詠集では人麻呂詠)とされる歌で、「昨日こそ……しか」は古体な感じのする表現。

【所載】古今集・秋上・一七二／新撰和歌・六／和漢朗詠集・五七一／九品和歌・一一／俊頼髓脳・三四二／奥儀抄・九七

一二八 にはかにも風のすゞしくなりゆくか秋たつひとはむべもいひけり

【異同】ナシ

【現代語訳】急に風がすずしくなつてゆくことだよ。だから、秋が動き始める日、「立秋」とはよく言ったものだ。

【語句】○秋たつ 立秋。「たつ」は行動をおこすこと。○むべ だからなるほど、の意。

【所載】後撰集・夏・二一七／新撰万葉集・一二五／新撰朗詠集・一八七

一二九 はつあきのそらにきりたつからころも袖のつゆけきあさぼらけかな

はつあき

【異同】ナシ

【現代語訳】初秋の空に霧が立ち、袖が露に濡れる朝ぼらけであることよ。

【語句】◎はつあき 初秋。○きりたつ 「霧が立つ」に袖の縁語「裁つ」を掛ける。○からころも 「袖」を導くために用いる。○袖のつゆけき 「涙」の喩か。

【所載】ナシ

一三二〇 わぎもこがころものすそをふきかへしうらめづらしき秋のはつかぜ みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】わたしのいとしい人の衣のすそを吹き返し、私に裏—心中—を見せる、すばらしい秋の初風よ。

【語句】○うらめづらしき 「うら」は衣の裏と心中を指す。「うらめづらしき」は心引かれるの意。正徹はこの歌を踏まえて「吹きかへしうらめづらしき程もみす衣のすその秋の初風」(草根集・三三三七)と詠む。

【所載】古今六帖「秋のころも」三二九六／古今集・秋上・一七一／新撰和歌・四／家持集Ⅰ・二二一／家持集Ⅱ・二二六／躬恒集Ⅱ・一二五／躬恒集Ⅲ・一〇九／躬恒集Ⅳ・四五八／秀歌大体・四五／能因歌枕・六／綺語抄・三八五

【参考】作者名「みつね」とあるが古今集では「よみ人知らず」となっている。

〔以上五首担当 杉本〕

一三二一 あづまぢのぬさめのさととははつあきのながきよをひとりあかす我なぞ

【異同】ナシ

【現代語訳】東路の「ぬさめの里」とは、初秋の長い夜をひとりおきあかす私をいう名であったよ。

【語句】○ぬさめのさと いさめの里。「いさめ」は「ねざめ」(寢覚)。身体は横たわっているが目は覚めている状態。横たわっていて意識を回復すること。「故、遣り下り坐して、玉倉部の清水に到りて息ひ坐しし時、御心稍に寝めましき。故、其の清水を号けて居覚の清水といふ。」(古事記・中巻)、「里は、逢坂の里。ながめの里。寢覚(いさめ)の里……」(枕草子)。場所は未詳。○ひとり 共寝の相手もないので、の意。○あかす 寝ずに明るくなるまで時を過す。○我な わが名。

【所載】古今六帖「さと」一二九五／夫木抄・三九〇七、四五四八

一三二二 こがらしのあきのはつかぜふきぬるをなどかくもるにかりのこゑせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】木枯らしの秋の初風がふいたのに、なぜ（まだ）雲の上に初雁の声がしないのか。

【語句】〇こがらし 秋、冬に木の葉を散らし吹く風。「あさぢぶの露吹結ぶ木枯にみだれてもなく虫の声かな」（順集Ⅰ・一五八）。

【所載】順集Ⅰ・二四／順集Ⅱ・一五八／天禄三年八月廿八日規子内親王前栽歌合 別2／和歌一字抄・一〇六〇／和歌童蒙抄・九三八／袋草紙・三七三

【参考】歌合は左右二組に別れて歌のよしあしを競うものであるが、言葉が適切かという非難や、いやこいう例があると証拠の歌を提示する場合もある。所載欄の歌合は秋の草花や虫を歌にしたが、ある歌に対し「木枯らし」は冬の風をいうのではと難じた。それに対し、秋の風を詠んだ例としてあげた。すなわち「木枯らしとは冬の風をこそいへ、このところのかぜをいはば、雨をもしぐれとやいふべからん」というのに対して、御簾の内から「ふるきことをこそはすれ」と「いひいだし」た二首のうちの一首が当該歌。

七日の夜

一三三三 めづらしくあふたなばたはよそ人もかげ見まほしきものにぞありける
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】年に一度、彦星・織姫のあい逢う夜は、（恋人の）影を地上の人も見たいのでありましたよ。

【語句】◎七日の夜 七月七日の夜。七夕。天の川を渡り、牽牛と織女が年に一度相逢うという漢代の伝説をふまえて、万葉以後数多くの歌人が歌う。中国では川を渡るのは織女であるが、和歌では渡るのはほとんど彦星である。夜訪れて朝別れる当時の通い婚を背景にしている。多くは二星いづれかの心で詠う。また、恋人同士が天上の恋に較べて我が恋を詠う場合もある。〇たなばた 織女を指す場合と、牽牛と織女の両星を指す場合がある。ここは二星。〇よそ人も 当事者でない者も。〇かげ 二星を盪の水に映して見ることをした。その二星の「影」に「人影」をかける。「やまの井の浅き心もおもはぬに影ばかりのみ人のみゆらん」（古今・七六四）のように「影」は正身にたいするもの。

【所載】風雅集・秋上・四六五／伊勢集Ⅰ・八三／伊勢集Ⅲ・八二

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。伊勢集では后宮の賀の屏風歌のうちの一首。

一三四 あまの川みづかげくさのあきかぜになびくをみればときはきぬらし
人丸

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川のほとりに生う草の秋風に揺れるのを見ると、(待ちに待った)年に一度の日が来たらしい。

【語句】○あまの川 銀河。天漢。天空の川に見たて、牽牛と織女の二星が年に一度逢うために渡る。一三三番歌の語句欄「七日の夜」参照。○みづかげくさ 水影草。水陰草。水のほとりに生える草。後の例として、稻をいう。日葡辞書に「まだ穂のついている稻」との説明がある。ここでは「水辺に生える草」と解す。

【所載】続古今集・秋上・三〇七／万葉集・二〇一七(旧二〇一三) 天漢 水陰草 金風 靡見者 時来之
マノガハミズカゲクサノアキカゼニナビクヲミレバトキハキヌラシ あまのがはみづかげくさのあきかぜになびかふみればときはきにけり／人麿集Ⅲ・一三三／赤人集Ⅰ・二八二／赤人集Ⅱ・一六一／赤人集Ⅲ・一七四／袖中抄・七三七。

【参考】当該歌は万葉集に「右は柿本朝臣人麿の歌集に出づ」とする歌群の中にある。古今六帖の作者名「人丸」は、その点で一致する。

一三五 わびぬればつねはゆゝしきたなばたもうらやまれぬるものにぞありける
ふかやぶ

【異同】ナシ

【現代語訳】(お会いできずにいる) 苦しさにうちひしがれ、(年に一度しか会えないことは間違っても似てはならないと) 忌み避けていた七夕も、(年に一度でも会えるのなら、どんなによいかと) うらやましいと思うのであったよ。

【語句】○わびぬれば 困り果てて。○ゆゝしき 「ゆゆし」は「忌み避けたい」の意。○うらやまれ 「うらやむ」に自発の助動詞「る」の接続したかたち。ついうらやましいと思ってしまう。

【所載】拾遺抄・恋上・二八四／拾遺集・恋二・七七三／深養父集Ⅰ・三三二／深養父集Ⅱ・七
【参考】作者名「ふかやぶ」は拾遺抄・拾遺集とは一致しない。

〔以上五首担当 平野〕

一三六 あまの川とをきわたりにあらねどもきみがふなではとしにこそまで

拾三秋

人丸

【異同】ナシ

【現代語訳】天の河の渡し場は、兩岸が遠く離れている渡し場ではないけれども、あなたの船出は一年にわたって待つのである。

【語句】○とをきわたり とほきわたり。遠き渡り。兩岸の距離が遠く隔っている渡し場。○きみがふなであなたの船出。牽牛が対岸から船で天の川を渡ってくると考えている。織女の立場で詠んだ歌。○としにこそまで一年にわたって待つのだ。

【所載】後撰集・秋上・二三九／拾遺集・秋・一四四／万葉集・二〇五九（旧二〇五五）天河 遠度者 無友
公之舟出者 年尔社候 アマノガハトホキワタリハナケレドモキミガフナデハトシニコソマテ あまのがはとほきわたりはなければどもきみがふなではとしにこそまで／和漢朗詠集・二一八／人麿集Ⅰ・八二／人麿集Ⅱ・三九／古来風体抄・三五六／井蛙抄・一四六

【参考】作者を「人丸」としているが、万葉集では作者不詳歌である。拾遺集、人麿集Ⅰ、人麿集Ⅱ、古来風体抄は、人麿の作としている。

一三七 くにもせにつねにあふなはたつめれどあひみることはたゞこよひなり

【異同】ナシ

【現代語訳】国中に、いつもあなたとの恋の噂は立っているようだけれども、ほんとうは、二人が逢うのは、ただこの夜だけなのだ。

【語句】○くにもせに 「せに」は「狭に」。国も狭く感じられるくらいいっぱい。国中に。○つねにあふなはたつめれど わたしたちが逢っているという噂はいつも立っているようだが。「つねに」は「たつめれど」にかかる。「あふな」は「逢ふ名」、恋の噂。織女牽牛のことは世に知られた伝説だから、「くにもせにつねにあふなはたつ」と言った。

【所載】奥儀抄・二八七／和歌色葉・三一七

一三八 たまかづらたえぬものからさぬるよはとしのわたりにたゞひとよのみ

【異同】ナシ

【現代語訳】二人の間は絶えることのない仲ではあるものの、共寝するのは、年に一度の渡河の折の、ただ一夜だけなのだ。

【語句】○たまかづら 「たえぬ」にかかる枕詞。○たえぬものから 絶えることのない間柄ではあるけれども。「ものから」は、ここでは逆接。○としのわたり 年の渡り。七夕の星の一年に一度の川渡り。

【所載】後撰集・秋上・二三四／万葉集・二〇八二(旧二〇七八)玉葛 不絶物可良 佐宿者 年之度尔 直一夜耳 tama kazura ta enu mo no kara sara kura koto shi no wataru ni tada hito yo no mi tama kazura ta enu mo no kara sa nura k u h o t s h i no w a t a r i ni t a d a h i t o y o no mi / 人麿集 IV・二九〇／綺語抄・一二一、四二一、四八三

一三九 あからひくいろたへのこのかずみれば人づまゆへにわれこひぬべし

【異同】ナシ

【現代語訳】ほんのりとくれないを帯びた容顔うるわしいひとをたびたび見ると、(そのひとが)人妻であるというのに、わたしは恋してしまいそうだ。

【語句】○あからひく ほんのりとくれないの色を帯びた。美麗な容顔の形容。ここは「いろたへのこ」にかかる枕詞。○いろたへのこの ここでは、「いろたへのこを」とする万葉集によつて解した。容色うるわしき美女を。○かずみれば 幾度も見れば。○人づまゆへに 人妻ゆゑに。それが人妻であるにもかかわらず。「ゆゑに」は、ここでは逆接。○こひぬべし 恋してしまふにちがいない。恋してしまいそうだ。

【所載】万葉集・二〇〇三(旧一九九九)朱羅引 色妙子 数見者 人妻故 吾可恋奴 アカラヒクシキ(イロ)タヘノコヲシバミレバヒトヅマユエニアレコヒヌベシ あからひくいろぐはしこをしばみればひとづまゆゑにあれこひぬべし / 人麿集 III・一三八／綺語抄・一三五／奥儀抄・三五一／和歌色葉・二二

【参考】歌意から見て「七日の夜」にかかわりある歌とは思われない。この一首がなぜここに置かれたのか、不審。

古四 秋上

一四〇 あまの川もみぢをはしにわたせばやたなばたつめのあきをしもまつ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋になれば、天の川が紅葉を橋としてかけ渡すから、(牽牛がそれを渡ってくると思つて) たなばたの織女は、秋の季節をひたすら待つのであるうか。

【語句】〇もみぢをはしにわたせばや 秋の紅葉を橋として天の川にかけ渡すからであるうか。「や」は係りの助詞。第五句の句末にひびいて疑問の意を表わす。〇あきをしもまつ 「しも」は強意の助詞。「まつ」には第三句の「や」を受けて疑問の意が生ずる。

【所載】古今集・秋上・一七五／桐火桶・七五／兼載雑談・三四

〔以上五首担当 斎藤・山下〕

一四一 とをづまとたまくらかへてねたるよはとりのねなくにあげばあくとも

【異同】ナシ

【現代語訳】遠く離れた妻と逢つて手枕をかわして寝ている夜は、夜明けを告げる鶏が鳴いて、夜が明けるなら明けてしまつてもよい。

【語句】〇とをづま とほづま(遠妻)。遠い所に居る妻。織女星を指すことが多い。〇たまくらかへて 互いに相手の手を枕にして。〇とりのねなくに 夜明けを告げる鶏が鳴くことによつて。「に」は原因、理由を表す格助詞。……によつて、……のために。所載欄の万葉集歌は「とりがねなき」と禁止の形となつている。〇あげばあくとも 同じ動詞を重ねた「……ば……とも」は、どうともなれという放任の気持ちを表す。

【所載】玉葉集・秋上・一四三／万葉集・二〇二五(旧二〇二二) 遥窄等 手枕易 寐夜 鶏音莫動 明者雖明
トホヅマトタマクラカヘテネタルヨハトリガネナクナアケバアクトモ とほづまとたまくらかへてねたるよはとりがねなきあげばあくとも／夫木抄・一六六一八／人麿集Ⅲ・一四七／和歌童蒙抄・七八六

一四二 としにありてひとよいもにあふひこぼしもわれにまさりておもふらめやは

【異同】ひとよいもにあふ―一夜いもせにあふ(大)

【現代語訳】一年間逢うことなく過ごして、たった一夜だけ恋しい妻に逢う彦星も、私以上に物思いをするだろうか、これほどではあるまい。

【語句】○としにありて 一年間そのままです。○ひこぼしもわれにまさりて 所載欄の万葉集では、遣新羅使人の一人が故郷に残した妻を思慕する歌であり、故郷に帰れない自分と、彦星の心とを対比させる。彦星に比して自らの恋心を訴えるのは万葉集以来のモチーフ。「彦星の思ひますらむ心より見る我苦し夜のふけゆけば」(万葉集・一五四八(旧一五四四)・湯原王)、「七夕に思ふものからあふことのいつとも知らぬ我ぞわびしき」(貫之集・五七〇)。○おもふらめやは 「らめ」は眼前にない現在を推量する助動詞「らむ」の已然形。「やは」は反語。

【所載】拾遺抄・秋・九三／拾遺集・秋・一四八／万葉集・三六七九(旧三六五七)等之尔安里弓 比等欲伊母尔安布 比故保思母 和礼尔麻佐里弓 於毛布良米也母 トシニアリテヒトヨイモニアフヒコホシモワレニマサリテオモフラメヤモ としにありてひとよにもあふひこほしもわれにまさりておもふらめやも／人麿集Ⅰ・一七四／人麿集Ⅱ・四二／袋草紙・三二／柿本人麿勘文・四九

古四 秋上
一四三二 ちぎりけんこゝろぞつらきたなばたのとしにひとたびあふはあふかは おき風

【異同】ナシ

【現代語訳】年に一度と約束したという心こそはつれないものだ。織女が一年に一度だけ逢うというのは、逢うことといえようか。

【語句】○ちぎりけん 「けん」は過去の伝聞。○つらき 「つらし」は薄情でつれない、無情だ。相手から受ける仕打ちをこらえかねるほど痛く感じる意。両度聞書は「一夜の飽かぬ悲しみより契りけん心ぞつらきと言ふなり」と、一夜限りの逢瀬の悲しみより、織女が一夜限りの契りと決めた薄情さに焦点を置いた歌とする。○たなばた 織女。下二句の主語だが、初句の「ちぎりけん」の主体でもある。「年ごとに逢ふとはすれどたなばたの寝る夜の数ぞ少なかりける」(古今集・一七九、古今六帖・一四八)。○としにひとたび 一年にたった一度だけというニュアンス。「二年に七日の夜のみ逢ふ人の恋も過ぎねば夜はふけゆくも」(万葉集・二〇三六(旧二〇三二))、「玉かづら絶えぬものからさ寝らくは年の渡りにただ一夜のみ」(万葉集・二〇八二(旧二〇七八))、「一年に一夜と思へどたなばたはふたりともなき妻にざりける」(貫之集・四一六)など、例歌が多い。○かは 反語。

【所載】古今集・秋上・一七八／新撰万葉集・四六〇／新撰和歌・二〇／新撰朗詠集・二〇〇／興風集Ⅰ・五／興風集Ⅱ・一一／寛平御時后宮歌合(十卷本)・一一七、一六三／俊成三十六人歌合・七九／新時代不同歌合・六八／三十人撰・七七／三十六人撰・一〇七

【参考】作者名「おき風」は所載欄の文献に一致する。

一四四 おほぞらをかよふわれすらなにゆへにあまのかはらをなづみてぞくる 人丸

【異同】ナシ

【現代語訳】広い大空を自在に行き来する私でさえ、いったいどういふわけで天の河原を難儀しながら来たのだらう。

【語句】○われ 彥星の自称。星は空を自在に行き来する。○なにゆへに なにゆゑに。所載欄の万葉集の「ながゆゑに」あるいは「なれゆゑに」(あなた〈織女〉ゆゑに)が元の形と思われるが、本文通り、原因、理由を問う形で訳出した。○あまのかはら 天の川の河原の意であるが、「けふよりは天の河原はあせなんそこひともなくだだ渡りなん」(後撰集・二四一・友則)という用例からみて、河岸だけではなく、河全体を指す場合もあったと思われる。所載欄の万葉集の「天漢道(あまのかはら)」の方が「なづみてぞ来る」とよく照応する。○なづみてぞ 「泥みてぞ」。歩行や進行が妨げられて難儀して。行き悩んで。通い路の困難さを訴えるための表現。「巻向の檜原に立てる春霞おぼにし思はばなづみ来めやも」(万葉集・一八一七(旧一八一三))。漢詩文では織女が河を渡るとして詠まれるが、我が国では彥星が河を渡るとする表現が多い(小島憲之『上代日本文学与中国文学』(中) 塙書房、一九六四年)。

【所載】万葉集・二〇〇五(旧二〇〇一) 従蒼天 往来吾等須良 汝故 天漢道 名積而叙来 オホソラニカヨ
フワレスラナレユエニアマノカハヅヲナヅミテゾクル おほそらゆかよふわれすらながゆゑにあまのかはらをな
づみてぞこし／人麿集Ⅲ・一二九／赤人集Ⅰ・二七四／赤人集Ⅱ・一五三

【参考】作者名は「人丸」とあるが、万葉集では作者未詳。

一四五 こよひこむ人にはあはじたなばたのひさしきほどにあえもこそすれ そせい

【異同】ナシ

【現代語訳】今夜訪れてくる人には会いますまい。織女の逢瀬の久しさにあやかることになつては大変だから。
【語句】○ひさしきほど 長い時間。○あえもこそすれ 「あえ」は「肖ゆ」(ヤ行下二段)で、形がそっくり似る、あやかるの意。「是肖皇太后為雄装之負輶(肖、此云阿叡)」(日本書紀・応神天皇。「肖、似也、アユ・アエタリ」(色葉字類抄)。「逢うことはたなばたつめにひとしくしてたちぬふわぎはあえずぞありける」(後撰集・二二五)。「もこそ」は、将来起り得る悪い事態を予測し、危惧する意。……するといけない。……すると大変だ。所載欄の古今集の第五句は「待ちもこそすれ」(ただし筋切、元永本、基俊本は「あえもこそすれ」)であるが、古今和歌集打聴は「今の本には待ちもこそすれとあれど、紀氏新撰、六帖にも、あえもこそと有をよしとす」とする。

【所載】古今集・秋上・一八一／新撰和歌・一六／素性集Ⅰ・六／素性集Ⅱ・四

【参考】作者名「そせい」は所載欄の文献に一致する。

「こよひこんにぞあはん七夕のたえぬ契りにあえんとおもへば」(千五百番歌合・一〇八四)は、同じ語を用いて逆の発想を詠んだもの。
〔以上五首担当 中野〕

一四六 あひみまくあきたらずともしのゝめのあけはてにけりふなでせんかは
人丸

【異同】あきたらずとも—あきたゝすとも(御・桂・大)

【現代語訳】こうして逢つていたいのは、たとえ満ち足りなく思っているでも、もう空は明るんでしまった。舟出しようか、いやまだしない。

【語句】○あひみまく 「あひ見る」は、男女が逢い契りを交わす意。「まく」は、推量の助動詞「む」の古い未然形「ま」に、準体助詞「く」が付いたもの。○あきたらずとも 満ち足りなく思っている。他本の「秋立たずとも」では歌意が通らない。所載欄の万葉集に「(あひみらく)あきだらねども」(綺語抄「あきたらねども」)、和歌童蒙抄・袖中抄に「あきたらずとも」とある。○しのゝめの 「しのめ(東雲)」は、「しのめのほがらほがらとあけゆけばおのがきぬぎぬなるぞかなしき」(古今・恋三・六三七)のように、空が白んで明けてゆく

ころで、相愛の男女も別れを告げねばならぬ時。所載欄の万葉集では「いなめのめ」（和歌童蒙抄・袖中抄も同じ）とある。「しののめの」「いなめのめ」については、窓がわりの明りとりには篠竹や稲藁等を粗めに縦横に編んだ物を用い、その編目を篠目（しののめ）、稲目（いなめのめ）と言ひ、夜の明け方に光がさしこんできて明るなることから、ともに「あけ」にかかる枕詞とする説がある。○ふなでせんかは「舟出す」とは、彦星が別れを告げて天の川を舟で帰ること。「かは」の箇所、所載欄の万葉集に「嬢」とあり、旧訓「いも」新訓「つま」と読み、綺語抄・袖中抄に「いも」、童蒙抄に「つま」とあるように、いずれも織姫に呼びかけたかたちとなつて、より歌意がとおる。また、「む・ん（助動詞）十か（助詞）十は（助詞）」を含む歌を検索すると、他は中世以後の四例のみで、いずれも反語の意であつた。

【所載】万葉集・二〇二六（旧二〇二二）相見久 賦雖不足 稲目 明去来理 舟出為牟嬢 アヒミラクアキダ
ラネドモイナノメノアケユキニケリフナデセムイモ あひみらくあきだらねどもいなめのめあけさりにけりふな
でせむつま／綺語抄・一三二／和歌童蒙抄・一四五／袖中抄・七三二／古今秘注抄・五一—

【参考】万葉集に作者名の記載なく、作者名「人丸」は疑わしい。なお、赤人集Ⅱ・一六八、赤人集Ⅲ・一八三「あひ見まくあれどもあかずしののめの明けにけらしな舟出せむいも」（赤人集Ⅰ・二八八は小異）は、当該歌によく似る。

一四七 ^{拾十七 雑秋} わたしもりふねは ^{はや舟かくせイ} やわたせひととせにふたゝびきま ^はすきみならなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】渡し守よ、はやく舟をこちらに渡してほしい。一年に二度と来て下さるお方ではないのだから。

【語句】○ふねはやわたせ 「舟」は、彦星が織女に逢うために天の川を渡る舟。底本の傍記異文や所載欄の拾遺集では「はや舟かくせ」とあつて、彦星が帰れないように舟を隠してほしい、の意となる。○ならなくに …ではないのだから、の意。

【所載】拾遺集・雑秋・一〇八五／万葉集・二〇八一（旧二〇七七）渡し 舟早渡世 一年尔 二遍往来 君尔
有勿久尔 ワタリモリフネハヤワタセヒトトセニフタタビカヨフキミニアラナクニ わたりもりふねはやわたせ
ひととせにふたたびかよふきみにあらなくに／人麿集Ⅰ・八五／人麿集Ⅱ・四一／赤人集Ⅰ・三四〇／赤人集Ⅱ
・二二—

【参考】所載欄の拾遺集に人麿という作者名があるが、万葉集に作者名の記載はなく、疑わしい。

古四 秋上

一四八 としごとにあふとはすれどたなばたのぬるよのかずぞすくなかりける みつね

【異同】 ナシ

【現代語訳】 毎年七月七日に、逢うには逢うけれども、織女星・彦星の共寝する夜の数はほんとうに少なかったことです。

【語句】 ○たなばたの 古今集の注釈書にあたると、「たなばた」を織女星とする説、織女星・彦星の両星とする説がある。「たなばた」は、「たなばたつめ」の略として織女とする本来の意味から、より範囲が広まり、二星を意味したり、さらに彦星のみを指したりする。ここは、二星に解した。○ぬるよのかず 共寝する夜の数年に一度の逢瀬なので逢う夜が少ない。

【所載】 古今集・秋上・一七九／新撰和歌・二二〇／和漢朗詠集・二二〇／躬恒集Ⅰ・二九、六二／躬恒集Ⅱ・二〇／躬恒集Ⅲ・一五一、一六五／躬恒集Ⅳ・四五四／寛平御時后宮歌合・一一八／左兵衛佐定文歌合・一二一
【参考】 作者名「みつね」は、所載欄の文献に一致する。

一四九 あさまだきいでゝひろはんけふのをに心ながさをくらべてしかな いせ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 まだ早朝、庭に出て七夕飾りの糸を引きわたすであろう、その糸の長さ、私の心の長さを較べてみたいものです（第二句「いでてひくらん」として現代語訳した）。

【語句】 ○あさまだき 朝早くに。○いでゝひろはん 『古今和歌六帖標注』に「出てひろはんにてはうたの意きこえず」とあるように、「拾ふ」では意味が通らない。所載欄の伊勢集のように、「いでてひくらん」とありたいところなので、「引くらむ」で現代語訳した。○けふのを 今日（の）緒（を）。この「緒」は、「糸」とも表現されるが、かなりの太さがあつたらしい。七夕の日には、裁縫の具の針や糸などを供えたが、庭の前栽などに糸を引きかける風習があつた。月次屏風の絵柄に、「七月七日、庭に糸引く女あり」（源順集・二二二「詞書」や、「七月七日、女ども庭に出て、尾花に糸かけたり」（兼盛集・一四八「詞書」）とあり、庭に出て女性が糸を前栽に引

きかけたとわかる。現実にも、栄花物語・卷三七に、「七月七日、中宮の御前に、前栽に村濃の糸を引きて、色々の玉を貫きたり」など見える。その行為が朝方になされたらしいのは、「七月七日よめる」の詞書で、「たなばたは朝ひく糸の乱れつとくとや今日の暮れを待つらん」（後拾遺集・秋上・二四〇・小左近）や、詞書「七月七日、七夕の糸引くに」で、「たなばたのくれは心にかげながら思ひ乱るあさの糸かな」（肥後集・八四）等から窺える。なお、和漢朗詠集「七夕」に、「憶得少年長乞巧 竹竿頭上願糸多 おもひえたりせうねんにながくきつかうすることを ちくかんのとうしやうにぐゑんしおほし 白」（二二二）とあり、少年時代、竹竿に「願糸」をかけて芸の上達を祈ったと見える。○心ながさを 自分が心変わりしないことを、糸の長さにひきかけて表現。

【所載】伊勢集Ⅰ・四三／伊勢集Ⅱ・四五

【参考】伊勢集では屏風歌中の一首で、男の立場から女に贈った歌。

一五〇 秋拾三秋かぜによのふけゆけばあまの川河べのなみのたちゐこそまで つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風が吹いて、夜もふけてくると、天の川岸の波が立つように、立ったり座ったり落ち着かずに、あなたの訪れを待ちこがれていることです。

【語句】○河べの 所載欄の拾遺抄・貫之集ⅡⅢに「かはべに」とあり、拾遺集・新撰和歌・家持集Ⅱ・貫之集Ⅰには、「かはせに」とある。○なみのたちゐ 波の「立ち」に、織女が立ったり座ったりする意の「立ち居」（連用形）とを掛けた。同様の詠みぶりの歌として、「天の川岩越す波の立ちゐつつ秋の七日の今日をしぞ待つ」（後撰集・秋上・二四〇）がある。

【所載】拾遺抄・秋・九一／拾遺集・秋・一四三／新撰和歌・一八／家持集Ⅱ・二〇八／貫之集Ⅰ・一三／貫之集Ⅱ・一一／貫之集Ⅲ・二九

【参考】貫之集にあり、作者名「つらゆき」は拾遺集・拾遺抄も同じ。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

一五一 あまのがはみだえもせなんかさゝぎのはしもわたさでたゞわたりせん

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川は水がなくなつてほしい。そうしたら、鵜の橋を渡すまでもなく川を直接渡つて行こう。

【語句】○あまのがは 銀河。牽牛星と織女星が、七月七日の夜、年に一度だけ、この川を渡つて逢うとされる。

○みだえもせなん 「みだえ」は、水がなくなること。「小山田のみだえせしよりあめにいますいはとの神をねがぬ日ぞなき」（好忠集・一四五）。「なん」は他へ詠え望む助詞。所載欄の貫之集Ⅰでは「水たえせなん」。○かささぎのはしもわたさでたぐわたりせん 「かささぎのはし」は、七月七日の夜、牽牛・織女の二星が逢う時に、鵜がその翼を天の川の上に並べて渡すという想像上の橋。その鵜の橋も渡さないで、即ち鵜の橋が渡されるのを待つまでもなく、川にじかに入つて渡ろうということか。所載欄の貫之集Ⅰでは、下句「橋をし知らずただ渡りなん」とあり、和歌童蒙抄も五句は「ただわたりなむ」とある。

【所載】貫之集Ⅰ・五九七／和歌童蒙抄・一四六

【参考】作者名の記載はないが、この歌は貫之集に見える。家持集に、「かささぎの橋つくるよりあまのがは水もひななん川渡りせん」（二〇六）という類歌が見える。

【異同】ナシ

【現代語訳】今日からは天の川も浅くなつてしまつてほしい。そうしたら、どこが水の淀みということもなく、まっすぐに渡つてしまおう。

【語句】○あまのかはら 天の川の河原。当該歌では、下句の内容により、実質的には天の川全体を指している。

「いつしかとまたく心をはぎにあげてあまのかはらをけふや渡らむ」（古今集・一〇一四・藤原兼輔）。また、所載欄の友則集には「あまのかはなみ」とある。○あせなゝん 浅せななん。浅くなつてほしい。水が干上がつてほしい。「なん」は一五一番歌参照。「中にゆくよしの河はあせななんいもせの山をこえてみるべく」（篁集・一）。○よどみともなくたぐわたりなむ どこが深い淀みかか意を払い、渡りやすい浅瀬を探して回り道をするようなことをしないで、まっすぐに渡つてしまおう。「よどみともなく」は、所載欄の後撰集では「そこひともなく」、家持集Ⅰ・友則集・奥儀抄・和歌色葉では「そよみともなく」、家持集Ⅱでは「ふらせともなく」と見え

【異同】ナシ

【現代語訳】今日からは天の川も浅くなつてしまつてほしい。そうしたら、どこが水の淀みということもなく、まっすぐに渡つてしまおう。

【語句】○あまのかはら 天の川の河原。当該歌では、下句の内容により、実質的には天の川全体を指している。

「いつしかとまたく心をはぎにあげてあまのかはらをけふや渡らむ」（古今集・一〇一四・藤原兼輔）。また、所載欄の友則集には「あまのかはなみ」とある。○あせなゝん 浅せななん。浅くなつてほしい。水が干上がつてほしい。「なん」は一五一番歌参照。「中にゆくよしの河はあせななんいもせの山をこえてみるべく」（篁集・一）。○よどみともなくたぐわたりなむ どこが深い淀みかか意を払い、渡りやすい浅瀬を探して回り道をするようなことをしないで、まっすぐに渡つてしまおう。「よどみともなく」は、所載欄の後撰集では「そこひともなく」、家持集Ⅰ・友則集・奥儀抄・和歌色葉では「そよみともなく」、家持集Ⅱでは「ふらせともなく」と見え

【異同】ナシ

【現代語訳】今日からは天の川も浅くなつてしまつてほしい。そうしたら、どこが水の淀みということもなく、まっすぐに渡つてしまおう。

【語句】○あまのかはら 天の川の河原。当該歌では、下句の内容により、実質的には天の川全体を指している。

「いつしかとまたく心をはぎにあげてあまのかはらをけふや渡らむ」（古今集・一〇一四・藤原兼輔）。また、所載欄の友則集には「あまのかはなみ」とある。○あせなゝん 浅せななん。浅くなつてほしい。水が干上がつてほしい。「なん」は一五一番歌参照。「中にゆくよしの河はあせななんいもせの山をこえてみるべく」（篁集・一）。○よどみともなくたぐわたりなむ どこが深い淀みかか意を払い、渡りやすい浅瀬を探して回り道をするようなことをしないで、まっすぐに渡つてしまおう。「よどみともなく」は、所載欄の後撰集では「そこひともなく」、家持集Ⅰ・友則集・奥儀抄・和歌色葉では「そよみともなく」、家持集Ⅱでは「ふらせともなく」と見え

とものり

一五二 けふよりはあまのかはらもあせなゝんよどみともなくたぐわたりなむ

る。

【所載】後撰集・秋上・二四一／家持集Ⅰ・一六一／家持集Ⅱ・二〇四／友則集・二三／奥儀抄・二八五／和歌色葉・一一、三一五

【参考】作者名は「どものり」とあり、家持集にもあるが、友則集に見え、後撰集も作者を「紀友則」とする。

一五三 ひととせにひとよばかりをたなばたのいつとあふとかなをばたつらん
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】一年に一夜だけの逢瀬であるものを、織女はいったいいつ恋人に逢うというので浮き名が立つのだろうか。

【語句】○ひとよばかりを 一夜しか逢えないというのに、の意。○たなばた ここでは、織女のこと。

【所載】ナシ

【参考】作者名は「つらゆき」とあるが、当該歌は貫之集に見えない。

一五四 ひととせにひとよとおもへどたなばたのあひみる秋のかぎりなきかな

【異同】ナシ

【現代語訳】一年に一夜の逢瀬だとは思いうけれど、織女が牽牛に逢う秋は限りなく続くことよ。

【語句】○ひととせにひとよとおもへど 織女星が牽牛星に逢うのは一年にたった一夜だけだと思いうけれど。「一とせに一夜とおもへど七夕はふたりともなきつまにざりける」(貫之集・四一六)。○たなばた 一五三番歌参照。

【所載】拾遺抄・秋・九五／拾遺集・秋・一五〇／和漢朗詠集・二一九／貫之集Ⅰ・三九五

【参考】作者名はないが、所載欄の拾遺抄には「右衛門督源清蔭家屏風歌 貫之」、拾遺集には「右衛門督源清蔭家の屏風に つらゆき」と見え、和漢朗詠集も「貫之」とする。貫之集Ⅰにも見えて同集によると、天慶二(一九三九)年閏七月、右衛門督源清蔭の為の屏風歌中の一首。

一五五 たなばたはいまやわかれんあまのがは川ぎりたちてちどりなくなり

【異同】ナシ

【現代語訳】織女は今牽牛と別れるところであろうか。天の川に川霧が立って千鳥が鳴く声が聞こえる。

【語句】○いまやわかれん　いま、まさに別れるところであろうか。○川ぎり　川霧や千鳥は、「夕されば佐保の川原の河ぎりに友まどはせる千鳥なくなり」（拾遺集・二三八・紀友則）など、佐保川の景物として知られるが、天の川の川霧の詠としては、「ひさかたのあまの川霧たつときはたなばたつめの渡りなるらん」（躬恒集・二七一）などの例がある。

【所載】新古今集・秋上・三二七／貫之集Ⅰ・二五八

【参考】作者名はないが、新古今集に「中納言兼輔家屏風に　貫之」として見える。貫之集Ⅰにも「京極権中納言の屏風のれうの歌廿首」中の一首としてある。

〔以上五首担当　長戸〕

一五六　ゆふづくよひさしからぬをあまの川はやくたなばたこぎわたりなむ

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方の月は長くないので、天の川を早く七夕は漕いでいることだろうよ。

【語句】○ゆふづくよ　夕方の月。夜には隠れてしまう。「夕月夜影立ち寄り合ひ天の川漕ぐ舟人を見るがともしさ」（万葉集・三二八〇〈旧三六五八〉）。○ひさしからぬを　「を」は順接。……から。○たなばた　牽牛、織女二星の一方を指す場合も、両方を指す場合もある。ここは前者。また、舟を漕いで天の川を渡るのには一般には牽牛星だが、織女星の場合もないわけではない。○こぎわたりなむ　「なむ」は完了の助動詞「ぬ」の未然形に推量の助動詞「む」が付いたもの。ここでは強意の推量。七夕の訪れを待ち望む思いを表わす。所載欄の貫之集では末句「こぎわたらん」とあり、七夕へ直接呼びかける形をとる。

【所載】貫之集Ⅰ・四三二

【参考】作者については一五八番歌参照。

一五七　つもりぬるとしおほけれどあまの川きみがわたれるかずぞすくなき

【異同】ナシ

【現代語訳】積み重なった年数は多いけれども、天の川をあなたが渡ってきた回数は少ないことだ。

【語句】〇つもりぬるとし 積み重なった年月。「はるごとにみるとはすれどさくら花あかでもとしのつもりぬるかな」（後拾遺集・九五）。ここでは付き合いを始めてからの年月。

【所載】貫之集Ⅰ・四三三

【参考】一五六・一五七の二首は、貫之集では詞書「七夕」として連続している。作者については一五八番歌参照。

一五八 あまの川よぶかくきみはわたるともひとしれずとはおもはざらなむ

已上貫之

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川を夜おそくにあなたは渡っているけれども、人知れずこっそりと渡っているとは思わないで下さいよ。

【語句】〇おもはざらなむ 思わないでください。「なむ」は他への願望を表わす終助詞。ここでは、地上から多くの人が七夕の渡っている空を見ていることをいう。

【所載】新千載集・秋上・三三三／家持集Ⅰ・一七一／家持集Ⅱ・二二五／貫之集Ⅰ・一〇八

【参考】新千載集は詞書を「題不知」、作者名を「中納言家持」としており、採歌源が家持集であると知れる。貫之集の詞書には「七月ひこぼし見る所」とある。また「已上貫之」とあるが、一五四から一五八まではいずれも貫之集に見られる。

一五九 古四 秋上

あまの川あさせしら波たどりつゝわたりはてねばあけぞしにける

どものり

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川の浅瀬に立つ白波をたどりながら渡ろうとしたが、まだ渡りきらないというのに、夜が明けてしまったよ。

【語句】○あさせしらなみ 浅瀬に立つ白波。「天河あさせしらなみたかければただわたりなんまてばすべなし」(人丸集・九二)。○わたりはてねば 「ば」は打消の語に続き、ここでは逆接の確定条件を表わす。……ないのに。「卯の花もいまだ咲かねばほととぎす佐保の山辺に来鳴きとよもす」(万葉集・一四八一(旧一四七七))。

【所載】古今集・秋上・一七七／友則集・一七／兼輔集Ⅰ・三九／兼輔集Ⅱ・一五六／兼輔集Ⅳ・三五／兼輔集Ⅴ・五二／秀歌大体・四九／俊頼髓脳・三四一／八雲御抄・六一

【参考】作者記載「とものり」は古今集と一致する。古今集の詞書には「寛平御時、なぬかの夜うへにさぶらふをのことも歌たてまつれとおほせられける時に、人にかはりてよめる」とある。兼輔集にも「七月七日、哥よみける所にいきて」(Ⅰ三九、Ⅱ一五六)と伝えるものがあり、兼輔が同席した可能性を物語る。なお家持集・三〇四に「あまのがはあさせしらなみかきたどりわたりはてねばあけぞしにける」という、三句目のみ異なる類歌がある。

一六〇 ^同 ひさかたのあまのかはらのわたしもりきみわたりなばかちかくしてよ

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川の渡し守よ、あの人がちちらに渡つて来たならば、(もう帰れないように) 梶を隠しておくれよ。

【語句】○ひさかたの 「あま」にかかる枕詞。○かち 梶。舟を漕ぐ道具。「天の川梶の音聞こゆ彦星とたなばたつめとこよひ逢ふらしも」(万葉集・二〇三三(旧二〇二九))。○かくしてよ 「てよ」は完了の助動詞「つ」の命令形。渡し守への呼びかけ。

【所載】古今集・秋上・一七四／新撰髓脳・一六／綺語抄・七／奥儀抄・七六

〔以上五首担当 青木〕

一六一 なぬかびのはやくれなゝんひさかたのあまの川ぎりたちわたるべく ^{みつね}

【異同】ナシ

【現代語訳】今日の七夕の日が早く暮れてしまつてほしいものだ。天の川の川霧が立ち渡ることく、早く天の川

を立ち渡って行けるように。

【語句】○なぬかび 七月七日、七夕の日をいう。○はやくれなゝん 早く暮れてしまつてほしい。○ひさかたのあまの川ぎり 「たちわたる」を導く序。「ひさかたの」は「あま」の枕詞。○たちわたるべく 牽牛星が天の川を渡り、織女星のもとに通って行けるように。

【所載】風雅集・秋上・四六〇／躬恒集Ⅱ・六／躬恒集Ⅴ・三七／夫木抄・三九九四

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

一六二二 ひこぼしのつまゝつよひの秋風にわれさへあやなひとぞこひしき

拾三秋

【異同】ナシ

【現代語訳】牽牛星が妻の織女星を待つ七夕の宵の、肌寒く吹く秋風に、私まで、なんともわけのわからないことだ、人が恋しくなってくる。

【語句】○つまゝつよひの 「つま」はここでは織女星を指す。一般に和歌では織女星が牽牛星の訪れを待つ例が多いが、その逆もまったくないわけではない。○あやな 筋が通らない、理屈が立たない意の形容詞「あやなし」の語幹。「われさへひとぞこひしき」にはさみこまれた形で、間投詞的な表現。なんと筋の通らないこと。

【所載】拾遺抄・秋・九〇／拾遺集・秋・一四二／躬恒集Ⅱ・二〇八／躬恒集Ⅲ・七／躬恒集Ⅳ・三五四／躬恒集Ⅴ・三八

【参考】所載欄に示す文献はすべて作者を躬恒とする。なお拾遺集・拾遺抄・躬恒集Ⅱによれば、この歌は「延喜御時屏風歌」。

一六三二 ひこぼしのおもひますらんことよりもみるわれくるしよのふけゆけば

ゆげのわうゆはらの大きみ或本

【異同】ナシ

【現代語訳】牽牛星がもの思いを募らせているであろう、そのことよりも、空を見上げている私の方が切ないことだ。夜が更けていくと。

【語句】○おもひますらん もの思が増してゆくであろう。稀にしか逢えないつらさ、嘆きをいう。

【所載】拾遺抄・秋・九二／拾遺集・秋・一四七／万葉集・一五四八（旧一五四四）牽牛之 念座良武 従情
見吾辛苦 夜之更降去者 ヒコホシノオモヒマサムココロユモミルワレクルシヨノフケユケバ ひこほしのお
もひますらむころよりみるわれくるしよのふけゆけば

【参考】所載欄に示す文献はすべて作者を湯原王とする。湯原王は志貴皇子の子。第四期の歌人。なお「ひこほし」は万葉集では「比故保思」と記されている箇所があり、「ひこほし」と清音。

あした

一六四 ^{拾七 雑秋} あさとあけてながめやすらந்தなばたはあかぬわかれのそらをこひつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】朝の戸を開けて、もの思いに耽っているだろうか、織女星は。飽き足りない思いで別れた牽牛星の、立ち去った後の空を恋い慕い慕い慕いして。

【語句】◎あした 本来は、朝、の意。ここは七月七日の翌朝。逢瀬の別れはつらいものだが、一年に一度しか逢えない牽牛・織女の別れは特につらいものとして詠まれる。○あさと 朝起きて開ける戸。万葉以来の歌語。

「朝戸あけてもの思ふ時に白露の置ける秋萩見えつつもとな」（万葉集・一五八三（旧一五七九））。○あかぬわかれ 一年に一度だけの逢瀬なので、もっと逢っていたいという、満ち足りない思いでの別れ。

【所載】後撰集・秋上・二四九／拾遺集・雑秋・一〇八四／貫之集Ⅰ・八二二
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一六五 ^{古四 秋上} けふよりはいまこんとしのきのふをぞいつしかとのみまちわたるべき ^{みつね}

【異同】ナシ

【現代語訳】一年に一度の逢瀬が終わってしまった今日からは、また次にやってくる昨日、七月七日の日を、いつかいつかとはかり待ちつづけるのだろうか。

【語句】○けふよりは 古今集の詞書に「八日の日よめる」とあり、七夕の翌日である七月八日を「けふ」と言

っている。○いまこんとしのきのふ これからやってくる年の昨日、すなわち来年の七月七日。○いつしかとのみ いつかいつかとばかり、早く。待ち望む意を表す。○まちわたるべき ずっと待ちつづけるのだろう。「けふよりは」を受ける。

【所載】古今集・秋上・一八三／忠岑集Ⅱ・五七／忠岑集Ⅲ・九二／忠岑集Ⅳ・二

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

一六六 たなばたのかへるあしたのあまのがはふねもかよはぬなみもたゝなむ
かねすけ

【異同】ナシ

【現代語訳】たなばたが帰る朝の天の川は、船も通えないほど高い波が立てばよいのに。

【語句】○たなばた 織女。中国では織女が天の川を渡って会いに来ることになっている。「ひさかたのあまのかはきりたつときは織女つめのわたるなるらん」(躬恒集Ⅰ・三六一)。和歌では日本の実生活通り男性が通って来る形で詠まれることが多いので、この「たなばた」は牽牛をさすとする説もある。○なみもたゝなむ 波がたてばよいのに。「なむ」は願望の意を表す終助詞。

【所載】後撰集・秋上・二四八／兼輔集Ⅲ・三〇／兼輔集Ⅳ・四二／和歌一字抄・一〇五三／袋草紙・七〇八

【参考】作者名「かねすけ」は所載欄の文献に一致する。

八月

一六七 秋かぜにはつかりがねぞひきこゆいづくなるたがたまづさをかけてきつらむ
とものり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風に初雁の音が響いてくる。誰からの手紙を運んできたのだろうか。

【語句】◎八月 葉月。三秋のうちの中秋。歌語として用いられるようになったのは平安後期か。用例はあまり多くない。○ひゞくなる 古今集以下の所載欄の他文献では、傍書の「きこゆなる」とするものが多い。○たま

づさ 手紙。漢の蘇武の雁信の故事（漢書・蘇武伝）は、古今集の三〇番「春くればかりかへるなり白雲のみちゆきぶりにことやつてまし」にもひかれている。

【所載】古今集・秋上・二〇七／和漢朗詠集・三二四／友則集・二二／寛平御時后宮歌合・七八／新撰万葉集・九一／三十人撰・七〇／三十六人撰・五八／俊頼髓脳・二七五／綺語抄・六一八、六二〇／和歌童蒙抄・七四四／奥儀抄・四六三／宝物集・二六二

【参考】作者名「どものり」は所載欄の文献に一致する。

一六八 しらつゆはうへしなりけるみづとりのあをばのやまのいろづくみれば

【異同】うへしなりける→うつし也ける（大）

【現代語訳】白露は、移し染めの染料だったのだな。青葉の山が色付くのを見ると。「第二句は傍書により「うつしなりける」として解した。」

【語句】○しらつゆ 白露。万葉集では「秋の露」。○うへし 所載欄の文献はすべて傍書や大久保本と同じ「うつし」。「うへし」では意が通らないので、傍書の「うつし」で解釈する。「うつし」は、草木の花の汁などを含ませた紙を生地の上に置いて染める「移し染め」の染料。「移し紙」「移し花」ともいう。○みづとりの 鴨の羽の色が青いところから「青羽」と同音の「青葉」にかかる枕詞。

【所載】古今六帖「山」九二一／万葉集・一五四七（旧一五四三）秋露者 移尔有家里 水鳥乃 青羽乃山能色付見者 アキノツユハウツシナリケリミヅトリノアヲバノヤマノイロヅクミレバ あきのつゆはうつしにありけりみづとりのあをばのやまのいろづくみれば／夫木抄・八六八九／和歌童蒙抄・一七六

【参考】作者名の記述はないが、所載欄にあげた古今六帖九二一番や万葉集、夫木抄では三原王の作とする。なお古今六帖一四六八番歌の下の句は当該歌と同じである。

一六九 ひとしれぬねをやなくらんあきはぎのいろづくまでにしかのこゑせぬ
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】人に知られずに声を出して鳴いているのだろうか。秋萩が色付くまで鹿の声がしないことだ。

【語句】○ねをやなくらん 声を出して鳴いているのだろうか。「音をなく」は「声を出してなく」意。「鳴く」に「泣く」の意を込める。○あきはぎ 歌語。萩のこと。萩は鹿の妻で、鹿はその花妻を求めて鳴くとされる。「我が岡にさ雄鹿来鳴く初萩の花妻問ひに来鳴くさ雄鹿」(万葉集・一五四五(旧一五四一))。

【所載】 躬恒集Ⅰ・六三／躬恒集Ⅱ・一三四／躬恒集Ⅲ・一一八、一六六／躬恒集Ⅳ・四六七／躬恒集Ⅴ・五／左兵衛佐定文朝臣歌合・一四／袋草紙・六五三

【参考】 作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

十五夜

つらゆき

一七〇 ひさかたのあまつそらよりかげみればよくところなき秋のよの月

【異同】 ナシ

【現代語訳】 天空を渡る月の光を見ると、避ける所がなく一面に照らす秋の夜の月であるよ。

【語句】 ◎十五夜 八月十五夜とも。中国の風習が渡来し、観月の宴を催し詩歌を詠じた。和歌が詠まれたのは醍醐朝以降か。○ひさかたの 天に関係のある「天(あめ、あま)」「雨」「月」「雲」「空」「光」「夜」などにかかる枕詞。○あまつそらより 天空を通りすぎて行く。「より」は経過する場所を示す助詞。○かげ 日・月などの光。○よくところなき (月が) 余す所もなく照らしている。「よく」は避ける意。

【所載】 貫之集Ⅰ・五一九

【参考】 作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 三浦〕

一七一 なにはがたしほみちくれば山のはにいづる月さへみちにけるかな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 難波潟に潮が満ちてくると、山の端に出る月までもが満月になったことだよ。

【語句】 ○なにはがた 摂津国淀川の河口あたりの海の古称。○しほみちくれば 満潮になってくれば。

【所載】 夫木抄・五一六二／貫之集Ⅰ・二三二／和歌童蒙抄・一四八／八雲御抄・一八〇

一七二 月ごとにあふよなけれどなれどもイよをへつゝこよひはまさるかげなかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】毎月、十五夜の月にはめぐりあうものだが、幾年過ごしても今宵は、これに勝る月の姿はないことだなあ。

【語句】○あふよなけれど このままでは全体の歌意が通じない。現代語訳は傍書「なれども」に拠って解した。○よをへつゝ 何年経つても。○かげ 光によってみえるもの姿。こゝは月の姿。

【所載】貫之集Ⅰ・四七七

【参考】「月ごとに見る月なれどこのつきの今宵の月になる月ぞなき」（続古今集・一五九五／万代集・九九五／村上御集・一三八）という類想の歌がある。

一七三 もちづきのこまよりをそくいそせいほうしでぬればたどるゝぞやまはこえつる

【異同】ナシ

【現代語訳】望の月（満月）がわたしの馬の出立よりも遅く出たので、暗い道をたどりたどりしながら、山越えたことだ。

【語句】○もちづきのこま 毎年八月十五日の駒牽の行事に、信濃の国望月の牧から献上された馬。「望月（陰暦十五日の月）」に信濃の御牧の名「望月」を掛ける。「逢坂の関の清水に影見えて今やひくらん望月のこま」（拾遺集・一七〇）。○をそく おそく。遅く。○たどるゝ 歩みがおぼつかなく、はかどらないさま。

【所載】後撰集・雑二・一四四／拾遺集・雜上・四三八／素性集Ⅰ・二七／素性集Ⅱ・五一／素性集Ⅲ・二三

【参考】作者名「そせいほうし」は所載欄の文献に一致する。

或本みつね

一七四 こゝに又わがあかぬ月を山のはのをちのさとにはをそしとやまつ

【異同】ナシ

【現代語訳】「ここでもまた私がいくら見ても見飽きないこの月を、あの山の端の向うの遠くの里では、(月の出が)遅い、と待っているのだろうか。」

【語句】○あかぬ 満ち足りない。満足できない。○をち 遠く隔たった場所。遠方。○をそし おそし。遅し。

【所載】元輔集Ⅰ・二二〇

【参考】「或本みつね」とあるが、他文献でそれを確認することはできない。

一七五 いづこにかこよひの月のみえざらむあかぬは人のこころなりけり
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】「どこに今宵の月が見えない所があるうか。見えない所はないのに、その月をいくら見ても見あきないのが、人の心というものなのだなあ。」

【語句】○いづこにか いったいどこに。この場合は反語の表現。第三句「みえざらむ」に対応する。○あかぬ 満ち足りない。満足できない。

【所載】拾遺抄・秋・一一七／拾遺集・秋・一七六／躬恒集Ⅲ・八／躬恒集Ⅳ・三五五／躬恒集Ⅴ・三九

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 橋本・山下〕

こまひき

一七六 あふさかのせきのしみづにかげみえていまやひくらんもち月のこま
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】逢坂の関の清水に影を映して、今まさに牽いているであろう、信濃望月の馬を。

【語句】◎こまひき 駒牽。馬を八月中旬に朝廷に献じ、それを天皇が御覧になる行事をいう。信濃国の駒牽は望月が二十三日、それ以外は十五日(村上朝以後は十六日)。なお駒迎は逢坂の関まで馬寮の官人が迎えに行く

ことをいう。駒牽・駒迎とも月次屏風に詠まれる題。○かげ 五句の望月から、月影と馬の影の両義を持たせる。鹿毛を掛けるとする説(片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』笠間書院、一九九九年)もある。なお、和歌文学大系『貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』(明治書院、一九九七年)は月影から馬の影に転じたとして「昼の歌」と明記している。また新日本古典文学大系『拾遺和歌集』では、「満月の影が映る逢坂の関の清水に、姿を見せて」と夜の歌のように解釈している。○望月 馬の産地である信濃国望月に、八月十五夜の望月をかける。ここでは望月の駒牽は二十三日なので、実際に満月の中を行くのではないと考えた。

【所載】拾遺抄・秋・一一四／拾遺集・秋・一七〇／金玉集・二四／貫之集Ⅰ・一四／三十人撰・一四／三十六人撰・二〇／深窓秘抄・三八／和歌九品・四／童蒙抄・一五〇／奥儀抄・九〇／古来風体抄・三五八／西行談抄・四一／愚秘抄・一三／井蛙抄・一〇三／十訓抄・八〇／古今著聞集・一四八

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一七七 みやこまでなつけてひくはをがさはらみづのみまきのこまにやあるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】都まで手なづけてひいてきた小笠原の馬は、美豆の御牧の馬なのであろうか。

【語句】○なつけて 手なづけて。○をがさはら 小笠原は甲斐国の御牧の名。「をがさはらへみのみまきにある馬もとればぞなつくこのわがそでとれ」(古今六帖・一四三二)の例のように荒馬で有名。なお「へみのみまき」ではなく、ここでは「みづのみまき」とある。理由は不明。○みづのみまき 美豆御牧。歌枕名寄では甲斐国とするが、実際は山城国の歌枕(京都市伏見区)。勅撰集では「さみだれはみづのみまきのまこもぐさかりほすひまもあらじとぞ思ふ」(後拾遺集・二〇六・相模)が初出。私家集では、兼盛集・重之集・惠慶集などに見られる。

【所載】貫之集Ⅰ・二九八／夫木抄・雑四・一〇一一五

一七八 もちづきのこまひきこゆるやまみればおぼつかなくもあらずぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】望月の駒を牽いて越える山を見れば、満月の光で、はつきりしないところなどないようだ。

【語句】○望月 一七六番歌参照。○あらずぞありける 「よぶこ鳥いくこゑなきぬ山びこのこたふばかりはあらずぞ有りける」(小馬命婦集・三七七)。

【所載】ナシ

【参考】伊勢集Ⅱ・五〇〇に、「もち月の駒引わたす影みればおぼつかなくもみえずぞ有ける」がある。

一七九 あふさかにひくらんこまをあきぐりのたちのかとこそとはまほしけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】逢坂で牽いているであろう駒を秋霧のたつという立野のものなのかと問うてみたいものだ。

【語句】○たちの 立野。武蔵国都筑郡(現在の横浜市都筑区付近)の御牧。延喜式に立野牧の名が見える。「秋ぎりのたちの駒をひく時は心にのりて君ぞこひしき」(後撰集・三六七・藤原忠房)。

【所載】ナシ

藤原たかとを

一八〇 あふさかのせきのいはかどふみならしやまたちいづるきりはらのこま

【異同】ナシ

【現代語訳】逢坂の関の、ごつごつした岩を音を立てて踏みしめて、逢坂山を、霧の立つ中、出立する桐原の駒よ。

【語句】○いはかど 岩の突き出した所。岩かどは、「岩門(堅固な門の意)」とも考えられるが、「踏みならし」との繋がりから考え、岩の突き出したところ、の意と取る。逢坂は岩間の清水を詠むことも多い。○ふみならし 「踏み慣らし。踏み鳴らしとも」(新日本古典文学大系『拾遺集』脚注)とある。この両方の意を含んでいると見てよいであろう。○たちいづる 出立するの意味に、第五句「きりはらのこま」の霧が立つ、を導く語。○きりはら 桐原の牧。信濃国。現在の長野市桐原とする説、松本市入山辺(東桐原・西桐原)とする説がある。「霧」を掛ける。

【所載】拾遺抄・一一三／拾遺集・秋・一六九／高遠集・四／金玉集・二六／玄玄集・三九／和歌童蒙抄・一〇四九／西行上人談抄・四二／後十五番歌合・二八／後六々撰・一一一／古来風体抄・三五七

【参考】作者名「藤原たかとを」は所載欄の文献に一致する。なお、古今六帖は主として後撰集時代の歌人の詠作までを収めるが、藤原高遠は拾遺集時代の歌人である。しかし、拾遺抄・拾遺集に依れば高遠が「少将」の折（安和二年（九六九）〜天延四年（九七六））の詠となる。後十五番歌合に取り上げられる名歌であるので、早から著名であったか。

〔以上五首担当 杉本〕

一八一 なにせんにいそぎゝつらんあふさかのせきあけてこそこまもひきけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】どうしてこんなにいそいでやってきたのだろう。逢坂の関は開けてこそ東路からの駒も牽くことができるのに。

【語句】○なにせんに どうして……なのか……しなくてもいいのに。「なにせんにのち継ぎけむわぎもこにこひぬさきにも死なましものを」（万葉集・二三八一（旧二三七七））。○いそぎゝつらん 急いできたのか。急いだことを後悔する言葉だが、所載欄の順集には「よはにきつらん」とあり、その本文であると夜の間にやってきたことを後悔する意となる。○あふさかのせき 逢坂関。既出七二番。○あけてこそ 関が開いてこそ。順集の本文であると夜明けの「明け」がかけられたことになる。「あけてこそ……已然形」の例は「……するの夜があけてからこそできる」の意。その例は「ゆぶづくよおほつかなきをたまくしげふたみのうらはあけてこそみめ」（古今集・四一七）。

【所載】順集・一三七

【参考】「なににわれよはにきつらん」という初・二句で順集にはある。

或本忠房

一八二 秋ぎりのたちのゝこまをひくときはこゝろにのりて人ぞこひしき

【異同】ナシ

【現代語訳】秋霧のたつ中、立野の駒を牽く時、（本来はいらっしやるはずの）あなたのことがこころにかかり、（いらっしやらなくて）とても残念です。

【語句】○たちのゝこま 立野の駒。武蔵国の立野の御牧の馬。立野の「たち」に、秋霧が生じるという意の「たち」をかける。「延喜式卷四十八」によれば、武蔵国からは年に五十匹、そのうち立野牧は二十四の馬を献上したという。「みちのくにありたのやまにあきぎりのたちのこまもちかづきぬべし」（好忠集Ⅰ・二二七）。○こゝろにのりて 心を占めて。

【所載】後撰集・秋下・三六七

【参考】後撰集には末句を「君ぞ恋しき」とする。また、詠歌事情の詳細な詞書があり、現代語訳はその事情を踏まえて訳した。

兼輔朝臣左近少将に侍ける時、むさしの御むまむかへにまかりたつ日、にはかにさはることありて、かはりにおなじつかさの少将にてむかへにまかりて、あふさかより隨身をかへしていひおくり侍ける

藤原忠房朝臣

古今六帖の作者注記「或本忠房」もこれを指すか。

なが月

これのり

一八三 さほ山のはゝそのいろはうすけれどあきはふかくもなりにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】佐保山の柞の葉の色は薄く、まだ深くはないが（九月ともなれば）秋は深くなったことよ。

【語句】◎なが月 長月。旧暦の九月。夜の長い月、の意。秋は七月・八月・九月の三か月であったから、現在とちがいが、秋の終わりの頃。紅葉をはじめ周囲の変化は季節の深まりを示す。○うすけれど 紅葉はまだ十分に染まらない。下の「ふかく」と対比させる。

【所載】古今六帖「紅葉」四〇九四／古今集・秋下・二六七／是則集・一六／陽成院親王姫君達歌合・一五／三十人撰・九五／秀歌大体・七七

【参考】作者名「これのり」は所載欄の文献に一致する。

一八四 月をみぬつきはなけれどながつきのみじかくもあるかこよひばかりは

【異同】ナシ

【現代語訳】空の月を見ない月はない、月はいつも眺めているが、(長い夜の)長月も短かく感じられることよ、この美しい満月の今宵ばかりは。

【語句】○ながつき 長月。陰曆九月。夜が長いことからその名がつく。長いはずの一夜が短く感じられるのは美しい月を眺めて時のたつのも忘れるから。

【所載】ナシ

一八五 なが月のしぐれの雨にぬれとをりかすがの山はいろづきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】長月の時雨の雨に打たれ、春日の山はこれまでの色を変えはじめたことだ。

【語句】○ぬれとをり ぬれとほり。濡れ通り、すつかりぬれて。

【所載】万葉集・二一八四(旧二一八〇)九月乃 鍾礼乃雨丹 沽通 春日山者 色付丹来 ナガツキノシグレノアメニヌレトホリカスガノヤマハイロヅキニケリ ながつきのしぐれのあめにぬれとほりかすがのやまはいろづきにけり／家持集Ⅰ・一三三／家持集Ⅱ・一三三／和歌童蒙抄・五九

〔以上五首担当 平野〕

一八六 ながつきのしぐれの雨にやまきりてけふきわかれんたイかれみばかやまん

【異同】ナシ

【現代語訳】九月の時雨の雨で山は霧が立ちこめたようになり、今日来て別れることになるのだろう、誰を見たら心が晴れるのだろうか。

【語句】○きりて 霧が立って。「霧る」は霧が立つ。○けふきわかれん 意をとりにくいだが、「今日来て別れるのだろう」の意とみる。所載欄の万葉集の第三句「烟寸吾胸」を「ケフキワカムネ」とした西本願寺本の訓かそれに近似した訓読をもとに、「けふきわかれん」とした可能性がある。○かれみばかやまん 未詳。傍記の「た」をとり、「たれみばかやまん」、誰を見たら心が晴れるのだろうかの意とみるが、所載欄の万葉集において、長月の時雨の雨で、山が霧が立ったようにけぶり、それが我が胸の鬱屈した思いの比喩とする方が、一首全体の意味

が通る。

【所載】万葉集・二二六七（旧二二六三）九月 四具礼乃雨之 山霧 烟寸吾胸 誰乎見者将息 ナガツキノシ
グレノアメノヤマギリニケブキワガムネタレヲミバヤマム ながつきのしぐれのあめのやまぎりのいぶせきあ
がむねたをみばやまむノ人麿集Ⅲ・二六〇ノ家持集Ⅰ・二九〇ノ家持集Ⅱ・二八九

九日

一八七 なが月のこゝぬかごとにもゝしきのやそうぢびとのわかゆてふきく

【異同】ナシ

【現代語訳】毎年九月九日の重陽の節供ごとに、宮中に仕える多くの官人たちが、若返るといふふう聞く、菊の花です。

【語句】◎九日 陰曆九月九日の節供、重陽節。小高い丘に登って遠望しながら遊宴したり、不老長寿の仙薬である菊の花びらを酒杯に浮かべて飲むという中国の風習が我が国に伝わったもの。天武天皇十四年（六八五）に始まり、嵯峨天皇の頃から年中行事として定着した。特に我が国には、八日の夜、菊花に綿をかぶせ、翌九日の朝、夜露と香のしみ込んだ綿で顔を拭って長寿を祈る被綿（きせわた）の習慣がある。○もゝしきの 枕詞「ももしきの（多くの石や木で造り築かれている）」がかかる「大宮」から意味が転じ、宮中、皇居の意。○やそうぢびと 八十氏人。多くの氏族の人々。大勢の人々。九月九日、百敷、八十氏人と数字が連続して織り込まれている。○わかゆ 若くなる。若返る。○きく「聞く」に「菊」を掛ける。

【所載】和歌童蒙抄・一五一

ほうわう

一八八 ながつきの九日ごとにつむきくのはなもかひなくおいにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】毎年九月九日の節供ごとに摘む菊の花にあやかるともできず、老いてしまったことだなあ。

【語句】○ながつきの九日 一八七番歌参照。○かひなく 効果がなく。効き目がなく。

【所載】拾遺抄・秋・一一三ノ拾遺集・秋・一八五ノ新撰朗詠集・二五〇ノ躬恒集Ⅰ・二六一ノ躬恒集Ⅱ・二二

○／躬恒集Ⅲ・二八五

【参考】作者名「ほうわう」（宇多法皇を指すか）は、所載欄の文献では凡河内躬恒。

一八九 かぎりなくきみがよはひをのばへつゝなだゝるやどのつゆとならん
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】限りなくご主人様の寿命を延ばしながら、名高いお邸の菊の露となつて欲しいものです。

【語句】○のばへのばふ（延ばふ）の連用形。長くする。延ばす。○なだゝる「名立たり（名高い、評判の高い。）」の連体形。連体形として用いられる場合が多い。○つゆ 菊の露。不老長寿の効能があるとされた。一八七番歌及び参考欄参照。○なん あつらえ望む意。終助詞。菊の露に対して人に対するように詠みかけた形とみる。

【所載】後撰集・秋下・三九四／伊勢集Ⅰ・四七〇／伊勢集Ⅱ・四五三／伊勢集Ⅲ・三三三

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。伊勢集、後撰集では初句「数知らず」。伊勢集Ⅰ（西本願寺本）の詞書には「九月八日に隣より、菊に綿おほひにおこせたりける、明日に折りてやるとて」とあり、隣家から伊勢の家の菊で被綿（きせわた）を作つて欲しいとの依頼があり、翌朝、被綿をかぶせたまま菊の花を折つて届けさせた時に添えた歌である。伊勢集Ⅱ、後撰集では返歌「露だにも名だたる宿の菊ならば花のあるじや幾世なるらん」の作者を藤原雅正とする。

一九〇 いのりつゝなをなが月のきくの花いづれのあきかうへて見ざらん
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたの御寿命がなお一層長かれと祈りつつ、どの秋に長月の菊の花を植えて愛でないことなどあるうか。

【語句】○なをなが月のなほ長月の。「長月（ながつき）」の「なが」は、なお長かれの意と長月を掛ける。○いづれのあきかうへて見ざらん いづれの秋か植ゑて見ざらん。どの秋に植えてみないことがあるうか。「か」

は反語で、いつも菊を植えて賞美する意。

【所載】新古今集・賀・七一八／貫之集Ⅰ・三九七

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集では天慶二年閏七月右衛門督殿の屏風歌。

〔以上五首担当 斎藤・中野〕

一九一 もゝとせをひとにとゞむるたまなればあだにやはみるきくのうゑのつゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】百年という長寿を人にとどめておく玉であるから、変わりやすいものとしてかりそめに見過ごすことができようか、菊の上の露を。

【語句】○もゝとせ「ももとせ」は、百年、また多くの年。田島智子『屏風歌の研究』（和泉書院、二〇〇七年）は、「ももとせ」が貫之によつて用いられた表現とする。○とゞむる ひきとめる。おさえて行かせない。「千年をしとどむべければ白玉をぬけるとぞ見る菊の白露」（貫之集・四一八）。○たまなれば 玉である。「玉」は露の見立て。菊の露は玉に見立てられる。「今日までに我を思へば菊の上露は千歳の玉にざりける」（貫之集・三二二）、「緒をよりに貫くよしもがな朝ごとに菊の上なる露の白玉」（貫之集・三九〇）など。所載欄の貫之集では「花なれど」（陽明文庫本「花なれば」となっており、菊の花自体にも長寿の薬効があるとされる。一九二番歌・一九四番歌参照。○あだにやはみる 「あだ」は、「かりそめ」の意に「うつろいやすいこと」の意を掛ける。本来はうつろいやすい露が、菊の上に置くとうつろわぬ長寿をもたらす特別な力を持つとするのである。「やは」は反語。類歌「露とてもあだにやは見る長月の菊は千歳をすぐすと思へば」（新後拾遺集・四三二・貫之）。

【所載】貫之集Ⅰ・五一〇

【参考】作者名はないが、貫之集に入集する。

菊の露を長寿と結びつけるのは「風俗通曰南陽酈県有甘谷、谷水甘美、云其山上大有菊、水從山上流下、得其滋液、谷中有三十余家、不復穿井、悉飲此水、上寿百二、三十、中百余、下七、八十者（風俗通）に曰く、南陽の酈県に甘谷有り、谷水甘美なり。其の山上に大なる菊有り、水山上より流れ下り、其の滋液を得。谷中に三十余家有り。復井を穿たず。悉く此の水を飲めば、上は寿百二、三十、中は百余、下は七、八十なりと云ふ。」（芸文類聚・菊）という中国の故事に基づくとされる。

菊の歌と漢詩文の関わりについては、本間洋一『王朝漢文学表現論考』（和泉書院・二〇〇二年）に詳しい考証がみられる。

一九二 ぬれぎぬと人にいはすなきくのはなよはひのぶとぞわれそぼちつる

【異同】きくのはな―菊の露（大）

【現代語訳】根も葉もない濡れ衣だなどと人にいわせないでくれ、菊の花よ、寿命が延びると信じて私は濡れてしまったのだから。

【語句】○ぬれぎぬ 「無実の罪」や「根も葉もない浮名」の意に用いられる場合が多いが、ここでは菊の花が寿命を延ばす効力があることが根も葉もないものであるとする。○よはひのぶ 「よはひ」は、人間の重ねた年齢。「のぶ」はのびる、長くなる。菊の花（露）が長寿の効力を持つ。一九一番歌参考欄、一九五番歌参照。「咲くかぎり散らではてぬる菊の花むべしも千代のよはひのぶらむ」（貫之集・四二）。○きくのはな 菊の花。傍記異文の「きくのつゆ」の方が「ぬれぎぬ」「そぼちつる」と照応し、本来は「菊の露」であったと思われるが、本文で解した。○そぼちつる 「そぼつ」はしみて内部まで濡れる。「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形。「限りなく思ふ涙にそぼちぬる袖はかわかじ逢はん日までに」（古今集・四〇二）。「そぼつ」は奈良時代までは清音。

【所載】古今六帖「ぬれぎぬ」三三三二

一九三 きくの花つゆとをきゐていざをらんぬれなばそでのかこそにははめ

【異同】いさをらん―いさほらん（大）

【現代語訳】菊の花に露のように置いていて、ずっと起きていて、さあその花を折ろう、濡れたら袖に移り香がするであろうから。

【語句】○きくの花 菊の花。「露」「折る」「濡る」と取り合わせられた例として、「いかでなほ君が千歳をきくの花折りつつ露にぬれんとぞ思ふ」（貫之集・一九六）がある。○つゆとをきゐて 露とおきゐて。「露」とは、露のように。「をきゐ」は「置きゐ（置いている）」に「起きゐ（起きている）」を掛ける。「うちとけて君は寝ぬらん我はしも露とおきゐて思ひあかしつ」（新千載集・一五一〇、平中物語・五四）。

【所載】ナシ

一九四 みな人のおいをわするといふきくはもゝとせをやるはなにぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】誰もが老いを忘れるという菊は、百年という長い年月を過ごさせる花であるよ。

【語句】○おいをわする 老いを忘れる。中古の用例はあまり見られないが、類歌に「菊の花植ゑたる宿のあやしきは老いてふことを知らぬなりけり」（貫之集・一八三）がある。所載欄の貫之集には「老いをとどむ」とあり、木村正中（新潮日本古典集成『貫之集』）は「とどむ」と「やる」という反対概念を同一義に用いた面白さがあるとする。○もゝとせ 一九一番歌参照。○やる 物や動作を先方に移動させる。長い歳月を過ごさせる。

【所載】貫之集Ⅰ・四七八

【参考】作者名はないが、貫之集に入集する。

一九五 をるきくのしづくをおほみわかゆてふぬれぎぬをこそおいの身にきれ
たゞみね

【異同】ナシ

【現代語訳】折る菊の雫が多いので、露に濡れて若返るといふ濡れ衣を老いの身に着ることだ。

【語句】○をるきく 折る菊。「菊」が「折る」「露」「老い」と取り合わされた例として「露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋の久しかるべく」（古今集・二七〇）がある。○しづくをおほみ 雫が多いので。「おほみ」は、形容詞の語幹＋み。○わかゆ 若くなる。若返る。若さを取り戻す。「……老いず死なずの葉もが君が八千代を若えつつ見む」（古今集・一〇〇三）、「菊の露わかゆばかりに袖ふれて花のあるじに千世はゆづらむ」（紫式部集Ⅰ・一一四）。○ぬれぎぬをこそおいの身にきれ 実際は年老いた身だが、菊の露によって若返るといふ濡れ衣を着る。一九二番歌の「ぬれぎぬ」参照。

【所載】古今六帖「露」五九九／貫之集Ⅰ・七八七／忠岑集Ⅰ・一二／忠岑集Ⅱ・六〇／忠岑集Ⅲ・九三／夫木抄・五八九二

【参考】作者名は「たゞみね」とあり、忠岑集の各伝本に見え、夫木抄にも「ただみね」とあるので忠岑の作である可能性が高いが、貫之集では「九月九日たゞみねがもとに」とあって、貫之作であり、次の古今六帖一九六

番歌が忠岑の返歌となっている。

〔以上五首担当 中野〕

一九六 つゆふかききくをしをれる心あらばちよのあだなはたゝむとぞおもふ
つらゆきかへし

【異同】ナシ

【現代語訳】露を深く含んだ菊を手折るような気持があなたにあるのだったら、千代までの長い浮名は、当然立つだろうと思えますよ。

【語句】○つらゆきかへし 前歌（一九五番歌）に対する貫之の返歌、の意。ただし貫之集Ⅰでは、前歌が貫之の歌、こちらが忠岑の返歌、となっている。なお忠岑集Ⅰ・Ⅲには、前歌はあるが、この歌はない。○きくをしをれる心あらば 菊を手折るような気持があなたにあるならば。「し」は強意の助詞。○ちよのあだな 千代までも残るような浮名。「菊を手折る」にことよせて恋の含意を持たせ、たわむれた。

【所載】貫之集Ⅰ・七八八

【参考】作者表示「つらゆきかへし」は、貫之集Ⅰとは一致しない。

秋のはて

おきかせ

一九七 みやまよりをちくるたきのいろみてぞ秋はかぎりとおもひしりぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】深い山から流れ落ちてくる滝の水の色を見て、これでもう秋は終りだなあ、と思い知ったことだ。
【語句】◎秋のはて 秋という季節が終るころ。長月の末をいう。古今六帖歳時部は、春・夏・秋の三つの季に、それぞれ「春のはて」「夏のはて」「秋のはて」の題を立てている。○みやま 深い山。○をちくるたきのいろ おちくるたきのいろ。落ちてくる滝の水の色。古今集に収められた当該歌の詞書には、「寛平御時古き歌奉れとおほせられければ、竜田川もみち葉流るといふ歌を書きてその同じころを詠めりける」とある。すなわち、「竜田川もみち葉流る神南備のみむろの山にしがれ降るらし」（古今集・二八四）の歌に依拠して、「をちくるたきのい

ろ」が紅葉の色に染まっていると見立てたもの。○秋はかぎり 秋という季節はこれで終りだ。「かぎり」は終り、最後の意。

【所載】古今集・秋下・三一〇／新撰朗詠集・二六三／興風集Ⅰ・一〇／興風集Ⅱ・一六
【参考】作者名「おきかぜ」は所載欄の文献に一致する。

一九八 けふありてあすゝぎなゝん神な月しぐれにまがふもみちかざゝん
人丸

【異同】ナシ
【現代語訳】きょうはまだ秋であつても、あすはもうこの秋の季節が過ぎて行つてほしい。あすからは、陰暦十月、冬のしぐれに散りまがう紅葉を、かざすことにしよう。

【語句】○けふありて きょうはまだ秋の季節としてあつて。○あすゝぎなゝん あすはこの秋という季節が過ぎて行つてほしい。「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形。「なん」は他へ詠え望む助詞。所載欄の文献ではみな、第二句が「あすは過ぎなむ」となっており、「あすは紅葉が散ってしまうだろう」の意となる。その方が、歌意はよく通る。○神な月 陰暦十月の称。暦の上ではこの月からが冬。○しぐれにまがふ 降るしぐれの中に散りまがう。○かざゝん かざすことにしよう。「かざす」は、草木の花や小枝を髪や冠り物に挿すこと。

【所載】玉葉集・冬・八九〇／万代集・一三二五／人麿集Ⅱ・一五八／人麿集Ⅲ・一八八／人麿集Ⅳ・七九
【参考】作者名「人丸」は所載欄の文献に一致する。

一九九 なが月のあり明の月はみえながらはかなくあきは過ぬべらなり
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】陰暦九月の有明の月は空に残つて見えていながら、秋ははかなく過ぎ去つてゆくようだ。

【語句】○ながつき 陰暦九月の称。○あり明の月 暁方の空に残る月。十五日以降の月は翌日の空に残るが、特に二十日以後の月を有明月という。能因歌枕に「廿月よりありあけ」とある。この歌の後撰集における詞書は、「ながつきつごもりに」となっている。○はかなく 「過ぬ」にかかる。秋があとなく去つてゆくさまの形容。

○過ぬべらなり 過ぎてゆくようだ。「べらなり」は推量の助動詞。

【所載】後撰集・秋下・四四一

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

二〇〇 草も木もみぢゝりぬとみるまでぞあきのくれぬるけふはきにける

【異同】ナシ

【現代語訳】草も木もすっかりみぢして散ってしまった、と見えるまで、秋の暮れはてるきよりの日は来たことだなあ。

【語句】○もみぢゝりぬ もみぢして散ってしまった。「もみぢゝり」は、「もみづ」と「散る」の二つの動詞が複合した形。その主語は「草も木も」である。○あきのくれぬるけふ 秋の暮れてしまったきよう。陰曆九月晦日のこと。

【所載】貫之集I・四八〇

【参考】作者については二〇一番歌参照。

〔以上五首担当 犬養悦・山下〕

二〇一 しぐれふる神なづきこそちかゝらし山のをしなべいろづきにける

已上三首つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】時雨の降る神無月が近いと見える。山が一樣に紅葉して色づいたことだよ。

【語句】○しぐれ 時雨。晩秋から初冬にかけて降るにわか雨。「神な月時雨もいまだ降らなくにかねてうつろふ神なびのもり」(古今集・二五三)。○神なづき 神無月。陰曆十月の称。冬の初めの月。古今六帖では、二一〇番歌から二一二番歌までの題。○ちかゝらし 近いらしい。あゆひ抄に、「らし」は「らむ」よりは確かに見定めながら心の落ち居ぬ言葉」であると見え、「からし」に「ウアルソウナ」と注する(中田祝夫・竹岡正夫『あゆひ抄新注』風間書房、一九六〇年)。○山のをしなべ 山が一樣に。「の」は主格を表し「いろづきにける」に対応する。所載欄の続後撰集・万代集には「山おしなべて」とある。

【所載】続後撰集・秋下・四三九／万代集・秋下・一二二八／貫之集Ⅰ・三八三

【参考】作者名「已上三首つらゆき」は所載欄の文献に一致する。なお当該歌は、所載欄文献の詞書によると、天慶二年（九三九）四月の、藤原実頼のための屏風歌。

二〇二 みちしらばたづねもゆかんとみぢばをぬさにたむけてあきはいぬとも

【異同】ナシ

【現代語訳】もし（秋の去って行く）道を知っているならば、訪ねても行こう。紅葉の葉を幣として手向けて、秋は去って行ってしまっても。

【語句】○ぬさにたむけて 幣として手向けて。所載欄の文献では「ぬさとたむけて」とある。

【所載】古今集・秋下・三一三／新撰和歌・一一六／躬恒集Ⅰ・二六五／躬恒集Ⅱ・一五三／躬恒集Ⅲ・二八九

【参考】後撰集に「もみぢばをぬさとたむけて散らしつつ秋とともにやゆかんとすらん」（一三三八・大輔）という類想歌がある。なお、作者については二〇三番歌参照。

二〇三 いづかたによはなりぬらんおぼつかなあけぬかぎりはあきにああるらん

已上みつね

【異同】あけぬかぎりは―あけぬは限は（大）

【現代語訳】夜は、秋と冬とのどちらになったのだろう。はつきりしないよ。夜が明けないうちは、まだ秋なのだろうか。

【語句】○いづかたによはなりぬらん 秋の最後の日の夜、すなわち翌日からは冬になる境目の夜なので、いたい秋と冬のどちらになったのだろうかと自問したことは。「いづかたに更けゆくよはのなりぬらん秋の残か冬のはじめか」（夫木抄・「九月尽」・隆季）。

【所載】後撰集・秋下・四四二／躬恒集Ⅰ・二六四／躬恒集Ⅱ・一九〇／躬恒集Ⅲ・二八八

【参考】二〇二番・二〇三番についての作者名「已上みつね」は、所載欄の文献に一致する。

或本みつね

二〇四 もみぢばのながれてよどむみなとをぞくれゆくあきのとまりとはみる

【異同】 なかれてよとむ—なかれてとまる（桂）

【現代語訳】 紅葉の葉が流れてきて淀んでいる河口を、ここが、暮れて行く秋の最後に行き着く港なのだなあと
思って見ることだよ。

【語句】 ○みなと 水門。河口など、水の出入り口。船が停泊する所（港）ともなった。「もみぢばの流れてとまるみなとには紅深き浪や立つらむ」（古今集・二九三・素性）。○とまり 船が停泊する所。港。また、最後に行き着く終着点。「年ごとにもみぢば流す竜田河みなどや秋のとまりなるらん」（古今集・三一・貫之）。

【所載】 ナシ

【参考】 作者名は「或本みつね」とあるが、躬恒集では確認できない。

二〇五 もみぢばを袖にこきれてもていてイなむあきはかぎりと見ん人のため
そせい

【異同】 袖にこきれて—袖にこきいれて（大） もていてイなむ—もていてなむ（御）

【現代語訳】 紅葉の葉をしこき取り袖に入れて持つて帰ろう。秋はもう終わりだと思っているだろう人のために。

【語句】 ○こきれて 所載欄の文献では「こきいれて」とある。「こきる」は「こきいる」を約した語で、枝についでいる花などをしこき取つて袖などに入れる意。「池水に影さへ見えて咲きにほふあしびの花を袖にこきれな」（万葉集・四五三六（旧四五二二））。

【所載】 古今集・秋下・三〇九／新撰和歌・一一二／素性集Ⅰ・四四／素性集Ⅱ・一六／素性集Ⅲ・一〇

【参考】 作者名「そせい」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 長戸〕

二〇六 もみぢばにみちはうもれてあともなしいづれよりかはあきはゆくらむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】紅葉した葉に道は埋もれて跡形もないことだ。いったいどこを通って秋は行くのだろうか。
【語句】○あともなし 跡形もない。落葉に覆いつくされて道が見えない様子をいう。○いづれよりかは 「か」は疑問。○あきはゆくらむ 秋を擬人化して、道もないのにどこを通ってここから立ち去っていくのか、と秋を惜しむ気持ちを表す。秋を擬人化したものとしては「もみぢばのながるる時は立田河みなどよりこそ秋は行くらめ」（貫之集・二三八）などがある。

【所載】続後撰集・秋下・四五六

二〇七 ゆふづくよをぐらの山になくしかのこゑのうちにや秋はくるらむ
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方の月のようにほの暗い小倉山で鳴く鹿の声の聞こえる中で秋は暮れてゆくのだろうか。

【語句】○ゆふづくよ 「秋のはて」には夕方に月がのぼることはない。夕暮れどきの月の薄暮のイメージが「を暗」の名を持つ「をぐらの山」に通じることによる措辞。○をぐらの山 小倉山。京都市右京区嵯峨。大堰川を挟み嵐山と対する。紅葉の名所として知られ、貴族の山荘も多くあったという。ここでは、ほの暗いの意の「を暗し」を掛ける。「もみぢせばあかくなりなんをぐら山秋まつほどのなにこそありけれ」（拾遺集・一三五）。○こゑのうちに 鳴く声の聞こえる中で。貫之には「くれぬとてなかずなりぬる鶯の声の内にや春のへぬらん」（貫之集・三五二）という例もある。○秋はくるらむ 「くる」は下二段活用「暮る」。日が暮れるのと秋が暮れゆく時とを重ね合わせる。

【所載】古今集・秋下・三二二／新撰和歌・一二〇／和漢朗詠集・三三七

【参考】作者名は所載欄の古今集に同じ。古今集の詞書には「なが月のつごもりの日大井にてよめる」とある。

二〇八 こがらしのをとにて秋は過にしをいまもこずゑにたえずふく風
はつふゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】木枯しの音とともに秋は過ぎて行ったのに、今も木末には絶えず風が吹いているよ。

【語句】◎はつふゆ 冬の初め。歌題としては既に「延喜五年四月廿八日右兵衛少尉貞文歌合」や「天慶二年二月廿八日貫之歌合」に見出せる。○こがらし 晩秋から初冬にかけて吹く風。「うちすててわかるるあきのつらきよにいとどふきそふこがらしのかぜ」(中務集・二五二)。○をとにて秋は 所載欄の歌学書ではいずれも「音聞く秋は」と伝える。○いまも 冬となった今でもなお、の意。秋とともに木枯も過ぎ去ったはずなのにどうしてまだ残っているのか、という思い。季節の到来と眼前の景物とのずれを詠んだものとしては「はるがすみたちにしものをいまもなほよしののやまにゆきのみぞふる」(躬恒集・三〇九)がある。

【所載】袋草紙・六四七／八雲御抄・一〇一

二〇九 神無月ふりみふらずみさだめなきしぐれぞふゆのはじめなりける

【異同】ナシ

【現代語訳】十月になって、降ったり降らなかつたりと定まりのない時雨こそが冬の始まりであったことだ。

【語句】○神無月 旧暦十月の称。「時雨」をとにも詠む場合も多い。二〇一番歌参照。○ふりみふらずみ「み」は接尾語。動詞の連用形に付いて動作の反復を示す。……たり……たり。「さねかづらいまするいもがうらわかみゑみみいかりみきつつひもとく」(古今六帖・一四一七)。○ふゆのはじめ 冬の到来。和歌に用いられる事例は少ない。「あでのかはけふはなみのおときこえぬはふゆのはじめとこほりすらしも」(惠慶集・二七一)。

【所載】後撰集・冬・四四五／和漢朗詠集・三五五／隆源口伝・二三／綺語抄・五二／古来風体抄・三二五

かみな月

つらゆき

二一〇 かみな月かぎりとやおもふもみぢばのやむときもなくよるさへにちる

【異同】ナシ

【現代語訳】十月となって、もうこれきりと思つたのだからか。紅葉した葉が、とどまることなく夜になってまで散っているよ。

【語句】◎かみな月 旧暦十月の称。屏風歌の題に多く見られる。景物は紅葉、菊、網代など多岐にわたる。○よるさへにちる 夜になってまで散っている。冬の十月になってしまったので散らなければいけない、という。「も

みちば」を擬人化する。本来は自然であるはずの落葉まで月次意識を優先しているという点に眼目を置く。末句、所載欄の後撰集では「夜さへにふる」とあり、「時雨が降る」と掛けて、紅葉の散る様子を「降る」と喩える。なお後撰集の二荒山本や片仮名本では「ちる」とする。

【所載】後撰集・冬・四五六

【参考】作者名は「つらゆき」とあるが、現存する貫之集には残らない。後撰集も「よみ人知らず」とする。なお、順集に、天曆五年、宣旨により梨壺に五人が召された時に、その別当・藤原伊尹からの「かみなづきのへいはくにいはく、『かみなづきかぎりとおおもふもみちばの』とあり、おのおのうたをたてまつるに」との注文に応じた、

神無月では紅葉もいかなれや時雨とともにふりに降るらん（一一七）がある。

〔以上五首担当 青木〕

二二一 ちはやぶるかみなづきこそかなしけれたれをこふとかつねにしぐるゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】神無月というのは悲しいものだ。一体、誰を慕って、いつもしぐれ、泣き濡れているのだろうか。

【語句】○ちはやぶる 「かみなづき」の「神」にかかる枕詞。

【所載】ナシ

【参考】「つねにしぐるゝ」の主語があいまい。「かみなづき」を擬人化し、その「かみなづき」を主語と考えるか、「かみなづき」という季節は悲しいものとし、そうした折の自らの気持ちを推し量っていると考えるか。類歌に「ちはやぶる神な月こそかなしけれわが身時雨にふりぬと思へば」（後撰集・四六九）がある。それによれば後者であろうか。

二二二 たつ田やまにしきをりかく神無月しぐれの雨をたてぬきにして

【異同】にしきをりかく―もみち織かく（大）

【現代語訳】竜田山は、錦を織って架けたようだ。神無月の時雨の雨を縦糸と横糸にして。

【語句】○たつ田やま 大和国の歌枕。平安期以降はもみじとともに詠まれることが多い。「唐衣たつたの山のもみぢばは物思ふ人のたもとなりけり」(後撰集・三八六)。○にしきをりかく「をり」は「織(お)り」。錦を織って架ける。全山の紅葉を錦に見立てるのは、古来、漢詩的発想による常套手段。「山機霜杼織葉錦」(懷風藻 大津皇子)。○たてぬきにして「たて」は経、「ぬき」は緯、織物の縦糸と横糸をいう。

【所載】古今集・冬・三一四/家持集Ⅰ・二六三/家持集Ⅱ・二六九

【参考】古今集には初句を「竜田川」とする本文と「竜田山」とする本文とがあり、当該歌は後者に属するが、片桐洋一は、「織った錦をみずから『架ける』という表現は『山』にふさわしい」(『古今和歌集全評釈』)とする。

しも月

二二三 さかしらになつは人まねさゝのはにさやぐしもよはわがひとりぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】さかしげに、暑い夏の間は、人と同じように独り寝をしたりするが、笹の葉に音を立てて霜の降る寒い夜は、そうした独り寝するのがつらいことだ。

【語句】◎しも月 陰暦十一月の称。奥儀抄・物異名の項に「しもつき 霜しきりにふるゆゑにしもふり月といふをあやまれり」とある。本来「霜降り月」であったのを誤ったとするが、霜のおく月なので「霜月」であることは確かであろう。○さかしらに 賢げに。利口ぶって。よせばいいのに、自分から、という気持ちがある。○なつは人まね わかりにくい。八代集抄に「夏の夜こそ、暑ければ、人の独ぬるやうに我もひとりぬべけれ、冬の上、霜のさむきに、ひとりぬる事のおぢきなきよし也」とあるのに一応従う。「人真似」に「人間寝」(人のいない間に寝る)を掛けるとする説もある。○さゝのはにさやぐしもよは 笹の葉にさやさやと音を立てて霜の降る、そんな寒い夜は。「さむしろに思ひこそやれささのはのさやぐ霜夜のをしの独り寝」(堀河百首・九一七)。

【所載】古今六帖「ひとりね」二七〇七/古今集・誹諧歌・一〇四七/八雲御抄・一七四

二二四 冬の上をねざめてきけばをしぞなくはらひもあへずしもやをくらん

【異同】ナシ

【現代語訳】冬の夜を眠れないで耳を澄ましていると、おしどりが鳴いている。払うこともできないほど上毛に

霜がおいて、それで冷たくて鳴いているのであるうか。

【語句】○ねざめてきけば 「ねざめ」は、必ずしも眠りから覚めた状態をさすのではなく、「寢床に体を横たへたまま、眠りに入ることができずにゐる状態をいふのが原義」（増田繁夫「歌語『ねざめ』について」『人文研究』一九九〇年一月）という。○をし おしどり。和歌ではもっぱら冬の鳥として詠まれ、雌雄相離れることのない鳥として意識された。「かたみにやうはげの霜をはらふらむともねのをしのもろごゑになく」（千載集・四二九）。○はらひもあへず 払おうとしても払いきれず。

【所載】古今六帖「をし」一四七六／後撰集・冬・四七八／拾遺集・冬・二二八／金玉集・三六／和漢朗詠集・三七三／深窓秘抄・五六

【参考】古今六帖以外の本文はすべて初句を「よをさむみ」とする。

二二五 ふく風はいろもみえねどふゆくればひとりぬるよの身にぞしみける

【異同】ナシ

【現代語訳】吹く風は何色なのか見えないけれど、冬が来ると、ひとり寝をするわが身にはそぞろ身に染みることだ。

【語句】○いろもみえねど 身に染みるのだから色はあるだろうに、という気持ち。

【所載】古今六帖「ふゆのかぜ」四二四／後撰集・冬・四四九／新撰万葉集・四一八／寛平御時后宮歌合・一三〇

【参考】後撰集や歌合に本文異同はないが、古今六帖・四二四番歌のみは第三句を「ゆふくれは」とする。題は「ふゆのかぜ」であり、「夕暮れは」では意に合わない。おそらく「ふゆくれば」を「ゆふくれは」と誤ったのであるう。もつとも当該歌もなぜ「しもつき」の項に収められているのかは不審。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

かぐら

つらゆき

二二六 かはやしろしのにをりかけほすころもいかにほせばかなぬかひぎらん

はへイ

【異同】つらゆき―ナシ(桂)　しのをりかけ―しのにおりはへ(大)

【現代語訳】川社の篠にたくさん折ってかけて干す衣は、どのように干したから七日乾かないのでしょうか。

【語句】◎かぐら　神の心を慰めるように、神を祭るときに奏する舞楽。歌題としての神楽は、十二月吉日に行われた宮中神楽を詠んだものが多い。○かはやしろ　六月祓などの神事に、川のほとりに棚を設け、神や篠を立てて神饌を供え、神楽などを奏して神を祭った社。異説もあり、俊頼髓脳・綺語抄などでも論議された難語である。

○しのに　しきりに。たくさん。「篠」を掛ける。「篠」は群生する細い竹の総称。○をりかけ　大久保本と所載欄の他文献では「をりはへ」「をりはふ」は長くのぼして広げる意。「をりかく」は折って掛ける意。「賤の男が篠をりかけて干す衣いかに干せば乾ざらん乾ざらん七日乾ざらん」(梁塵秘抄・四六九)。○ほすころも　干す衣。白波を干してある衣に見立てたとする説もある。○なぬか　七日。

【所載】新古今集・神祇・一九一五／貫之集I・四〇六／俊頼髓脳・三三〇／綺語抄・二六五／奥儀抄・六三五／和歌童蒙抄・五二六／袖中抄・一九五／六百番陳状・二〇八／古来風体抄・一一一／和歌色葉・一九二／八雲御抄・一六九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集によると夏神楽を詠んだ屏風歌。解釈がさまざまあり、濡れ衣の晴れないことを嘆いている歌とも考えられている。

二二七　ゆく水のうへにいのれるかはやしろかみなりたかくあそぶこゑかな

【異同】かみなりたかく―かみなひたかく(桂)

【現代語訳】流れ行く水のほとりで(神を)祈る川社では、雷鳴が大きいように、大きな音で神楽を奏していることですよ。

【語句】○いのれる　神や仏の名を呼び幸福を求める。神仏に願いをかける。所載欄の他文献では「いはへる」(神を祭っている意)が多い。○かみなりたかくあそぶこゑかな　雷鳴が大きいように、大きな音で神楽を奏していることですよ。貫之集をはじめ、所載欄の文献のほとんどには「かはなみたかくあそぶなるかな」とあり、川波が高く立ち、声高く神楽を奏するようですよ、の意となる。「あそぶ」は神遊び、即ち神楽を演じること。

【所載】夫木抄・三二八〇／貫之集I・四七三／和歌童蒙抄・五二七／俊成髓脳・三三一／綺語抄・二六六／袖中抄・一九六、二〇一／奥儀抄・六三六／六百番陳情・二〇九／古来風体抄・一一二

【参考】貫之集によると夏神楽を詠んだ屏風歌。作者については二二一番歌参照。

二二八 あしひきのやまのさかきるときはなるかげにさかゆる神のきねかも

【異同】ナシ

【現代語訳】山の神の常緑の木陰で、変わらぬ神のご威光により栄える、神にお仕えする巫覡ですよ。(繁茂するご神木ですよ。)

【語句】○さかき 常緑樹の総称。特に神事に用いる木をいう。○ときは 「常緑」に「永久不変」の意を響かす。○かげ 神の木の「陰」と、お蔭で、の意味の「蔭」を掛ける。○神のきね 神に仕える人。男女どちらにも言う。「きね」は巫覡と木根(木の意。ネは接尾語)を掛ける。

【所載】拾遺集・神楽歌・六一八／貫之集Ⅰ・一八七

【参考】拾遺集・貫之集の詞書によると、民部卿清貫の六十賀の屏風歌。また、この歌は「しもやたびおけどかれせぬさかきばのたちさかゆべき神のきねかも」(古今集・神遊びの歌・一〇七五、古今六帖・二二二)をふまえて詠まれている。作者については二二二番歌参照。

二一九 さかき葉のときはにしあればながけくにいのちたもてる神のきねかも

【異同】ナシ

【現代語訳】神葉は常緑でいつまでも変わらないので、(それを持つことにより)長々と寿命を保つ神の巫覡でありますよ。

【語句】○ながけくに 長い状態で。「に」は状態を表す格助詞。

【所載】貫之集Ⅰ・五三二

【参考】貫之集詞書によると、神楽を詠んだ屏風歌。作者については二二二番歌参照。

二二〇 こゑたかくあそぶなるかなあしひきのやまいまぞと越るべらなる

【異同】ナシ

【現代語訳】大きな音で神楽を奏でていることですよ。(神楽に招かれた)山人が、(山へ帰るのに)今まさに通

つているところです。

【語句】○あそぶ 二一七番歌参照。○やま 山中に住む人。獵師・炭焼きのたぐいだ、山の神に仕える神人でもあり、平素は山に住み、祭りなどの時だけ里に出た（西角井正慶『神楽研究』壬生書院、一九三四年）。「あしひきのやまゆきしかばやまびとのわれにえしめしやまつとぞこれ（万葉集・四三一七（旧四三九三））。○越るべらなる こゆるべらなる。「越ゆ」は通過する意。所載欄の文献では「かへるべらなる」。

【所載】夫木抄・七四九三／貫之集Ⅰ・五二一

【参考】貫之集・夫木抄の詞書によると、忠平女貴子の四十賀の屏風歌。作者については二二一番歌参照。

〔以上五首担当 三浦〕

二二二 山びとのすれるころもにゆふだすきかけてころをたれによすらん

已上六首つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】山人は山藍で摺った小忌衣（おみごろも）に木綿襦（ゆうだすき）を掛けて、誰に思いを寄せているのだろうか。

【語句】○山びと 山に住む人。炭焼き人など。また山の神に仕える人。「あふさかをけさこえくれば山人のちとせつけとてきれるつゑなり」（拾遺集・五八〇）。所載欄の歌はすべて初句「みやびとの」。○すれるころも 白地に山藍で春草、小鳥などの模様を青く摺りつけた小忌衣。○ゆふだすきかけて 「ゆふだすき」は木綿（ゆう）で作った襦。神事に奉仕するとき掛ける。「かけて」は「襦をかける」に、心かける意を掛けている。「ちはやぶるかも」の社のゆふだすきひと日も君をかけぬ日はなし」（古今集・四八七）。

【所載】古今六帖「ころも」三二八二／新古今集・神祇歌・一八七〇／貫之集Ⅰ・二二一／貫之集Ⅱ・一九

【参考】左注「已上六首つらゆき」とする二二六番—二二一番の六首は所載欄の文献に一致する。

二三二 しもやたびをけどかれせぬさかきばのたちさかゆべきかみのきねかも
或本つらゆき

二三二 しもやたびをけどかれせぬさかきばのたちさかゆべきかみのきねかも

【異同】かみのきねかも—かみのきねかな（御・桂・大）

【現代語訳】霜が幾たび置いても決して枯れない榊葉のように、栄えてゆくに違いない神人よ。

【語句】○やたび 幾度も。「や」は数や量の多いことを表す語。「やくもたついてもやへがきつまごみにやへがきつくるそのやへがきを」(古事記・一)。○たちさかゆべき 目立って栄えてゆくにちがいない。上三句までは「たちさかゆべき」にかかる序詞。○きね 神に奉仕する人。

【所載】古今集・神あそびのうた・一〇七五／和歌童蒙抄・七一〇

【参考】「或本つらゆき」とあるが、所載欄の文献には作者名なし。

二二三 さかきばにゆふとりし^{しでかけてイ}でたれかゝく神のみまへにいはいはひそめけん

【異同】ナシ

【現代語訳】榊の葉にゆうを取り掛けて、誰がこのように神の御前で穢れを忌みつつしみ、吉事を願いはじめたのだらうか。

【語句】○ゆふ 楮の樹皮をはぎ、裂いて糸にしたもの。幣として祭りの時榊などにかける。また褌として神事につかう。○とりしでゝ 取りかけて。垂らして。○たれかゝく 「誰か掛く」に「かく(このように)」をかける。○いはひそめけん 「いはふ」は、幸福安全を願ひ、穢れを忌み謹んで神を祭ること。

【所載】拾遺集・神楽歌・五七六／袖中抄・八四四

二二四 わぎもこがあなしの山のやまびとゝ人もみるが^{ベクイ}ね山かづらせよ

【異同】ナシ

【現代語訳】私のいとしいあの女は、あなしの山の山人と人も見るほど見事に山かづらをしておくれ。

【語句】○わぎもこ 男が妻・愛人など親しい女を呼ぶ語。所載欄の歌は初句「まきもくの」。袖中抄のみ「わぎもこが」。○あなしの山 まきもくのあなしの山。奈良県桜井市三輪町の東方にある山。○やまびと 二二一番歌参照。○みるがね 見るほどに。○やまかづら 山野の蔓性の植物で作った髪飾り。

【所載】古今六帖「やしる」一〇七二／古今集・神あそびのうた・一〇七六／綺語抄・二六七／奥儀抄・五九二／袖中抄・三四六、三四七／和歌色葉・二九六

二二五 神がきやみむろの山のさかきばゝかみのみまへにしげりあひにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】神域の内のみむろの山の神葉は、神の御前でともども繁茂していることだなあ。

【語句】○神がきや 「神がき」は神社や神域の垣。「や」は感動をあらわす助詞。○みむろの山 神が降臨する山。「みむろ」は本来神が降臨する御室の意であるが、「たつた河もみぢば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし」(古今集・二八四)が有名となり、後に奈良県生駒郡斑鳩町の神無備山のことと考えられるようになった(片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』笠間書院、二〇〇一年)。○しげりあひにけり 茂りあつている状態を祝いの気持をこめてよんだもの。

【所載】古今集・神あそびのうた・一〇七四

〔以上五首担当 橋本・林〕

二二六 みやまにはあられふるらしと山なるまさきのかづらいろづきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】山には霧が降ったらしい。人里近い山では、まさきの葛が綺麗に色づいている。

【語句】○みやま 木の茂った深い山。また「み」を接頭語とし、神霊の領する山とする意もある。なお笹川博士『深山の思想』(和泉書院、一九九八年)は古今集時代の「み山」は「神の住む山」と解釈すべきであり、「深い山」へと変化していくのは院政期頃とする。○と山 外山。人里に近い山。○まさきのかづら 蔓性植物を指す。定家葛とする説もあるが、定家葛は紅葉しない。神事にちなむ葛を「真栄(まさき)」と賛美したか。

【所載】古今集・大歌所御歌・一〇七七／新撰和歌・一二八／金玉集・三七／和漢朗詠集・三九二／和歌体十種・七／深窓秘抄・五八／九品和歌・三／新撰髓脳・一三／俊頼髓脳・三八、一六九／和歌童蒙抄・九八／奥儀抄・七一、八九、一〇八／袖中抄・三四八／簸河上・四／代集・一／悦目抄・四四／井蛙抄・一〇二

二二七 としごとを神をぞいのるさかきばのいろもかはらでをらんと思へば

いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】毎年毎年神を拝みます。榊葉が色も変わらないように、私たちの仲も変わることなくいたい、そう思うので。

【語句】○さかきば 常緑樹である榊の葉。神樂の際、挿頭などにする。○をらんと 「折る」に「居る」を掛ける。

【所載】伊勢集Ⅰ・八一／伊勢集Ⅱ・八三／伊勢集Ⅲ・七八／中務集Ⅰ・六四／中務集Ⅱ・八一

【参考】作者名「伊勢」は所載欄の伊勢集に一致する。中務集にあるのは混入か。

二二八 しはすにはあはゆきふるとしらぬかもむめのはなさくふくめらずして

【異同】ナシ

【現代語訳】師走には淡雪が降ると知らないのであらうか、梅の花が咲いたよ、つぼみのままでいないで。

【語句】◎しはす 陰曆十二月。○あはゆき 降るとすぐに消える雪。万葉集・一六四三(旧一六三九)に「沫雪のほどろほどろにふりしけば」とする用例がある。仮名の違いによって「あはゆき」(淡雪)「あわゆき」(泡雪)の二通りがある。○ふくめらずして 「ふくむ」は、「含 フクム、クム、フム」(名義抄)。万葉集・七九二(旧七九五)「春雨を待つとにしあらしわがやどの若木の梅もいまだ含めり」などからわかるように、いまだ開ききらないことを言う。「ふくめらずして」で「つぼみのままでいないで開いてしまつて」となる。

【所載】万葉集・一六五二(旧一六四八)十二月尔者 沫雪零跡 不知可毛 梅花開 含不有而 シハスニハアワユキフルトシラヌカモウメノハナサクツホメラズシテ しはすにはあわゆきふるとしらぬかもうめのはなさくふふめらずして／綺語抄・六八／和歌董蒙抄・九〇、一五五／袖中抄・七八六

これのり

二二九 みよしのゝやまのしら雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり

【異同】ナシ

【現代語訳】吉野の山に白雪がつもつたらしい。こんなにこの古里(である奈良)が寒くなつてきている。

【語句】○みよしのゝやま 四番歌参照。○ふるさと 旧都。ここでは所載欄の是則集詞書「ならの京にまかりてやどる所に」や吉野との関わりから奈良の都であることが分かる。○なりまさるなり 下の「なり」は断定の意。古今榮雅抄に「ふるさとのさむくなりまさるは、吉野山に雪のふりつもるらしと也」とあるのが分かり易い。

【所載】古今集・冬・三二五／金玉集・三八／和漢朗詠集・三八二／是則集・二三／寛平御時后宮歌合・二五／左兵衛佐定文歌合・一八／前十五番歌合・一七／俊成三十六人歌合・八五／時代不同歌合・一三三／三十人撰・九三／三十六人撰・一一三／深窓秘抄・六〇／秀歌大体・九〇／西行談抄・一一一

【参考】作者名「これのり」は所載欄の文献に一致する。

二三〇 せきこゆるみちならなくにちかながらとしにさはりて春をまつ哉

【異同】ナシ

【現代語訳】関越えの道のような容易ならぬ道ではなく、近いのに、年という隔てによって（こうして）春を待っていることだ。

【語句】○せきこゆるみち 「関」は障害になる物。○なくに 詠嘆的な否定の表現。○ちかながら 近いのに。○としにさはりて 「年」が障害（関）となつての意。春が来ない理由をあらわす。暦の上で春が来ないことに對する思いを述べた歌。

【所載】後撰集・冬・五〇五／伊勢集Ⅰ・九三／伊勢集Ⅱ・九五／伊勢集Ⅲ・九三

〔以上五首担当 杉本〕

二三一 あらたまのとしのをはりになる時はゆきもわが身もふりまさりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】一年の最後になる時は、雪も降りまさり、わが身も古りまさる。

【語句】○あらたまの 「年」にかかる枕詞。○ふりまさりつゝ 「ふり」は古くなるの意。これに「降り」をかける。「つゝ」はAの年もふり、Bの年もふり、Cの年もふり…というのを「ふりまさりつゝ」という（竹岡正夫『古今和歌集全評釈』）。

【所載】古今集・冬・三三九／家持集Ⅰ・二六六／家持集Ⅱ・二七二／万葉集時代難事・五七／桐火桶・一二四

二三二 あらたまのとしゆきかへり春たゝばまづわがやどにうぐひすはなけ
やかもち

【異同】ナシ

【現代語訳】年が行き、また返って春になったら鶯はまず我が家に鳴けよ。

【語句】○としゆきかへり 古い年が去り、またあらたに新しい年がやってくる。「あらたまのとしゆきかへりつきかさね……」(万葉集・四一四〇(旧四一一六))、「あらたまのとしゆきかへりはなのうつろふまでに……」(万葉集・四〇〇二(旧三九七八))など。

【所載】続後拾遺集・冬・四九八／万葉集・四五一四(旧四四九〇)安良多未能 等之由伎我敵理 波流多多婆末豆和我夜度爾 宇具比須波奈家 アラタマノトシユキガヘリハルタタバマヅワガヤドニウグヒスハナケ あらたまのとしのゆきかへりはるたばまづわがやどにうぐひすはなけ／三十人撰・四九／三十六人撰・四一／夫木抄・八八七五

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の文献に一致する。

仏名

二三三 としのうちにつもれるつみはかきくらしふるしら雪とゝもにきえなん
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】この年のうちにつもった罪は、空をかきくらし降る雪が消えるようにともに消えてほしい。

【語句】◎仏名 仏名会(ぶつみょうえ)のこと。御仏名(おぶつみょう)ともいう。諸仏の名号を唱え罪障を懺悔する。内裏や寺院で行われた法会。平安中期には毎年十二月二十日前後の一夜。のちに十九日からの三日間。屏風の画題としてもあった。和歌の題としてはその年の罪障消滅を祈る心や、会式に際しての導師とのやりとりが詠まれる。○かきくらし 空を暗くして。○きえなん 消えてほしい。「なん」は動詞の未然形に接続し、「…してほしい」の意を表す。

【所載】拾遺抄・冬・一六〇／拾遺集・冬・二五八／新撰朗詠集・三六九／貫之集Ⅰ・二二／貫之集Ⅱ・二〇／

宝物集・四六四

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集Iには「延喜六年つきなみの屏風八帖がれうのうた四十五首せじにてこれをたてまつる廿首」のうちにある。

二三四 きみさらば山にかへりて冬ごことにゆきふみわけてをりよとぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたがいつてしまわれたら、山にお帰りになってきつと冬ごことに（また仏名の導師として）雪ふみわけて下りてきて下さるようと願っておりませう。

【語句】○さらば 去らば。「去る」の未然形に仮定の助詞「ば」の接続したかたち。挨拶の語ではない。○冬ごことに 冬になるたびに。○をりよ おりよ。「おりる」の古語「おる」は上二段活用。その命令形。下山して下さる。

【所載】貫之集I・四〇一

【参考】仏名のために招く僧侶を「導師」というが、仏名が終わると別れの宴がある。貫之集によればそこでの歌。次の拾遺集の歌が参考になる。

屏風のゑに仏名のあしたに梅の木のもとに導師とあるじとかはらけとりてわかれをしみたるところ

よしのぶ

雪ふかき山地になにかへるらん春まつ花のかけにとまらで（二五九）

うるふ月

二三五 さくらばなはるくはゝれるとしだにも人のこゝろにあかれやせぬ
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】桜花よ、今年のように春が余分にある年だけでももう十分堪能したと人の心に思われるくらい咲いてくれないか。（いつもあわただしく散ってしまつて……）

【語句】◎うるふ月 閏月。暦月と季節を調節するためもうける。現行の暦では四年に一度二月に一日設けて閏

日とするが、平安時代に用いた宣明暦では、中気のない月を閏月とする。この暦は大の月三十日、小の月二十九日であり、平年を三五四日とするから、約三年に一度は閏月がある。またその時節も異なる。以下、春・夏・秋・冬の順に歌を配置する。○はるくはゝれる 閏三月のある年で春が四ヵ月あるのをいった。道真の漢詩の序に「況んや年の閏月は一歳余分の春……」などである。平安初期の漢詩の発想を巧みに和歌に移したもの。「つねよりものどけくにはほへ桜花春くははれる年のしるしに」(風雅集・二二三・修理大夫顕季)の歌は、詞書に「三月に閏ありける年よめる」とある。

【所載】古今六帖「さくら」四二〇六／古今集・春上・六一／和漢朗詠集・六二／伊勢集Ⅰ・二二五／伊勢集Ⅱ・二二一／伊勢集Ⅲ・二二七／古来風体抄・二三四／和歌色葉・二三二

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 平野〕

二三六 うるひさへありてゆくべきとしだにも春にかならずあふよしもがな
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】閏月さえあるはずの今年は、せめて人生の春にかならず会いたいです。

【語句】○うるひ 「うるふ」の連用形の名詞化。閏月。○としだにも この年はせめて。○春 所載欄後撰集の詞書に「やよひにうるふ月ある年、つかさめしころ申文にそへて、左大臣の家につかはしける」とあり、三月が二度ある「春」に我が身の「春叙位」、任官をはたすことを願っている。

【所載】後撰集・春下・一三五／貫之集Ⅰ・八七九／古来風体抄・三〇九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

二三七 ほととぎすのちのさ月もありとてやながくう月をすぐしはてつる

【異同】ながくう月を―なかくて卯月を(大)

【現代語訳】ほととぎすよ、今年は閏五月もあるからと言って、ゆっくりと四月の初音を楽しんで過ごしているのかな。

【語句】○ほととぎす ほととぎすは四月のうちは山で忍び音に鳴き、五月になると里に降りて来て本格的に鳴くとされた。○のちのさ月 閏五月。

【所載】亭子院歌合・五八（二十卷本類聚歌合のみ）

二三八 さみだれにつゞける^{のイ}としのながめにはものおもひたえぬ人ぞかなしき^{いせ}

【異同】ナシ

【現代語訳】さみだれの降る五月が二度もある年の長雨には、雨につきものもの思いをする私は、ずっとうれいが絶えずかなしいことだ。

【語句】○さみだれにつゞけるとし 「さみだれ」は陰暦五月ごろ降り続く長雨。梅雨。「つゞけるとし」とは古今六帖の題が「うるふ月」なので、さみだれの降る五月が二度続く年の意。所載欄伊勢集Ⅰの詞書に「五月ふたつある年」とある。岩井宏子は古今集撰者時代の「さみだれ」は時候表現であるとし、この歌について「雨が降り続くという意ではなく、五月が連続するということである。」としている（「さみだれ」の生成と基層―季節と歌語『古今的表現の成立と展開』和泉書院、二〇〇八年）。○ながめ 「長雨」に物思いの「ながめ」をかける。○ものおもひ 岩井宏子は「さみだれ」が「心の乱れを表現する言葉として機能することにより重層的に恋愛心情を表現するものと理解された。」としている（同上著書）。

【所載】後撰集・夏・一九〇／伊勢集Ⅰ・二二九／伊勢集Ⅱ・二三〇／伊勢集Ⅲ・二二二〇

【参考】作者名「いせ」は、伊勢集Ⅰ、Ⅱ、Ⅲには当該歌が載るが、後撰集は「よみ人知らず」である。

二三九 たなばたはあまのかはらをなゝかへりのちのなぬかをみそぎにはせよ

【異同】ナシ

【現代語訳】織女は天の川原で七度被えをし、六月に閏月が加わる今年は、後の六月七日（例年なら彦星と逢えるその日）を禊の日としなさい。

【語句】○なゝかへり 七度の被え。『後撰集新抄』（風間書房、一九八八年）は本居宣長の説として「七かへりとは七度の被への事なり」と記している。○のちのなぬか 閏六月七日。例年なら七月七日。所載欄の後撰集詞

書に「みな月ふたつありけるとし」とある。後撰集と八雲御抄は、第四句「のちのみそかを」である。六月晦日は夏越の祓えの日。

【所載】後撰集・夏・二二六／八雲御抄・一七七

二四〇 神無月ふたつあるとしのしぐれにはひとともとぎくぞいるこかりける

【異同】ナシ

【現代語訳】神無月が二つもある年のしぐれの頃は、一本の菊がことさらに色濃く美しいことだ。

【語句】○神無月 陰曆十月。○しぐれ 晩秋から初冬にかけて、降ったり止んだりする雨。「しぐれ」はひと雨ごとに、木の葉や花の色を濃く染めるとされた。しぐれが二か月も降るのだから菊の色も濃く染まるといった。「白露も時雨もいたくもる山はしたばのこらず色つきにけり」（古今集・二六〇）。○ひとともとぎく 一本の菊。「ふたつあるとし」と「ひととも」との対比。

【所載】兼輔集Ⅰ・五六／兼輔集Ⅱ・一一〇／兼輔集Ⅲ・四三／兼輔集Ⅳ・五三／兼輔集Ⅴ・六二

〔以上五首担当 斎藤・林〕

二四一 この月のふゆのあまりにあらざらばうぐひすはゝやなきぞしなまし

【異同】ナシ

【現代語訳】この月が冬の余りとしてあるのでなかつたら、鶯はもうとつくに鳴いていることだろうに。

【語句】○ふゆのあまり 閏十二月。後撰集には「年のあまりに」とあるが、鶯の鳴く春を待つという下の句からみて「冬」の方が妥当。○うぐひす 鶯。万葉集以来、春の最初に鳴く鳥。春を告げる鳥として歌われた。「梅が枝に来ある鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ」（古今集・五）、「春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝に鶯の鳴く」（古今集・六）。○なまし 完了の助動詞「ぬ」の未然形＋反実仮想「まし」。「ば」と呼応して実際にありえないことを仮想する。鶯が鳴く春の到来が遅れるのは閏十二月のせいだとした趣向。

【所載】後撰集・冬・五〇四／夫木抄・七六三三

二四二 ゆくとしのおしくもあるかなますかゞみみるかげさへにくれぬとおもへば
としのくれ

【異同】ナシ

【現代語訳】去りゆく年が惜しまれることだなあ、鏡に映る姿にさえ、老いのかげりがみえてきたと思うと。

【語句】◎としのくれ 一年の終わり。年末。歳暮。○おしくもあるかな をしくもあるかな。「も」は感動の意を添える係助詞。「かな」は詠嘆の終助詞。○ますかゞみ 澄んでよく映る「真澄鏡(ますみのかがみ)」の転とも、よく整った完全な「真十鏡(まさかのみ)」の転ともいわれるが、ここでは単に「鏡」のこと。○みるかげさへに 「みるかげ」は鏡の中にみる自分の姿。「さへに」は副助詞「さへ」+格助詞「に」。すでにある事柄の上にさらに別の事柄を添加する。○くれぬ 「くれ」は、動詞「暮る」の連用形で、「季節や年月が終わりに近づく」意と「人生の終わりに近づく、老年になる」意を掛ける。「暮る」を老年の意で用いた例として「歯老ここに至りて暮れぬ」(大唐西域記・卷十一・平安中期点)があり、白居易の詩にも詠まれている。参考欄参照。「むばたまのわが黒髪に年くれて鏡の影に降れる白雪」(貫之集I・八一四/拾遺集・一一五八)などの例がある。○とおもへば と思うと。上の句の詠嘆にもどる形。「山里は冬ぞさびしさまさりける人も草もかれぬと思へば」(古今集・三二五)。

【所載】古今集・冬・三四二/新撰和歌・一六〇/和漢朗詠集・三六一/貫之集III・三〇/色葉和雜集・六二三
【参考】古今集・冬部の巻末歌で、歳末に老いを嘆く歌。鏡をみての嘆老は、「晨興照青鏡 形影両寂寞(晨に興きて青鏡に照らせば 形影両つながら寂寞)」(歎老三首・白氏文集・〇四五三)、「前去五十有幾年 把鏡照面心茫然(前五十を去ること幾年か有る 鏡を把つて面を照らして心茫然たり)」(浩歌行・白氏文集・五七九)、歳暮と嘆老は、「白頭歳暮苦相思(白頭歳暮苦に相思念)」(歳暮寄微之三首・白氏文集・二四五三)といった漢詩文の影響が考えられる。岩井宏子『古今の表現の成立と展開』第三章第二節(和泉書院、二〇〇八年)には、老いを嘆く歌に白居易の詩が与えた影響についての詳しい考察がある。

二四三 あづさ弓はるたちしよりとし月のいるがごとくもおもほゆるかな
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】立春になってからは、年月の過ぎ去るのが矢を射るように迅（はや）く思われることであるなあ。
【語句】○あづさ弓 あづさ弓を「張る」ことから「春」にかかる枕詞。○はる 「張る」と「春」の掛詞。○いる 月が「入る」と弓を「射る」の掛詞。「はる」「いる」は「弓」の縁語。「あづさ弓春の山辺にいたるときはかざしにのみぞ花は散りける」（貫之集Ⅰ・五）、「青柳をかざしにさしてあづさ弓はるの山辺にいるひとや誰」（躬恒集Ⅰ・一七六）など。

【所載】古今集・春下・一二七／躬恒集Ⅱ・一一／躬恒集Ⅲ・一〇／躬恒集Ⅴ・四一／大和物語・一三二二段
【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

なお、古今六帖では「としのくれ」に配置されるが、古今集では「ゆく春」の歌群のなかに置かれている。

二四四 ゆきふりてとしのくれぬるときにこそついにみぢぬまつもみえけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】雪が降り、年が暮れてゆくときにはじめて、最後まで色を変えない松のことが目に映るのである。

【語句】○ついにみぢぬまつ つひにもみぢぬ松。最後まで色を変えぬ松。「つひに」は一つの行為や状態が最後まで持続するさまを示す。いつまでも。最後まで。「もみぢぬ」は、紅葉する意の動詞「もみづ」＋打消の助動詞「ず」の連体形。「もみぢぬまつ」とは、常緑で葉の色を変えぬ松。論語・子罕篇の節操が堅固であることを喩えた「歳寒、然後知松柏之後彫也（歳寒くして、然る後に松柏の彫へしほ）むに後（おく）るるを知る也）」による。○まつ 「松（まつ）」と「雪」の取り合わせは多く、「我が宿の松の木ずるに住む鶴は千代の雪かと思ふべらなり」（貫之集Ⅰ・五二）、「年経れど色もかはらぬ松が枝にかかれる雪を花かとぞみる」（古今六帖・雪・七四〇）など。○みえけれ 「みえ」は「見ゆ」の連用形で、自然に目に映る。「けれ」は気づきの「けり」の已然形で「こそ」の結び。

【所載】古今集・冬・三四〇／新撰万葉集・九四／宗于集・一〇／寛平御時后宮歌合・一二三／和歌童蒙抄・七〇三／奥儀抄・四七九／古来風体抄・二六一／桐火桶・一二五、三一八

二四五 くれてまたあくとのみこそおもひしかことはけふぞかぎりなりける

【異同】ナシ

【現代語訳】一日が暮れるとまた明けるとばかり思っていたが、今年はその限りであったのだなあ。

【語句】○くれてまたあくとのみこそ 一日が暮れてまた明けること。「くれ」に「年の暮」をひびかせる。一日の明け暮れと年の明け暮れを詠んだものとしては「年くれて春あけがたになりぬれば花のためしにまがふ白雪」（後撰集・五〇〇）の如き例がみられるが、ここでは、年が「明ける」ことよりも、繰り返される日々の明け暮れのなかでふと気付いた断絶の感覚が詠まれる。

【所載】躬恒集Ⅰ・三七〇／躬恒集Ⅲ・三九四／躬恒集Ⅳ・二六三

【参考】作者名はないが躬恒集に入集する。

〔以上五首担当 中野〕

二四六 いちしろき^{るイ}しるしなりけりあらたまのとしのくるゝは雪にぞありける^{つらゆき}

【異同】ナシ

【現代語訳】実にはっきりした白い目じるしだったのだなあ。年が暮れるというのは、雪が降るのであったよ。

【語句】○いちしろき 「いちしろし」は、顕著な、明白な、の意。傍記異文や所載欄の貫之集の「いちしろし」も同じ意。「いちしろく」と詠まれる歌に、「こもりぬの下ゆ恋ひあまり白波のいちしろく出でぬ人の知るべく」（万葉集・三九五七、〈旧三九三五〉）、「道のべのいちしろの原の白妙のいちしろくしもあれ恋ひめやも」（歌経標式・五）など。古今六帖では、「いちしろし」の表記型が三例、「いちしろし」の方が十例で数多い。○あらたまの「とし」にかかる枕詞。○雪にぞありける 所載欄の貫之集には「雪のふる家」の詞書があつて、理解しやすい。田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』に、「降る」と「古る」が実現する。雪は年が古るくなる年の暮れを表すことになる」と語釈する。なお、二三一番歌参照。

【所載】貫之集Ⅰ・四四七

【参考】作者名「つらゆき」は、貫之集により確認される。

二四七 昨日といひけふとくらしてあすか川ながれてはやき月日なりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】昨日といい今日といって日を暮らしてもう明日になる。まったく飛鳥川の流れのように、過ぎゆくのがはやい月日であり、年の暮れとなつてしまつたなあ。

【語句】○あすか川 「飛鳥川」は奈良県飛鳥地方を流れる川の名で、「明日（あす）」を掛ける。当該歌のように、「きのふ・けふ・あす」と詠み込む例は、万葉集から見える。○ながれてはやき 飛鳥川の流れがはやいことに、月日の経つのがはやいことを掛け、年末に時の経過に驚き嘆く。所載欄の古今集の詞書に「年の果てに詠める」とある。なお、飛鳥川の流れのはやさについては、万葉集から詠まれ、「あすか川行く瀬をはやみはやけむと待つらむ妹をこの日暮らしつ」（巻十一・二七二二（旧二七一三））などがある。

【所載】古今集・冬・三四一／新撰和歌・一五八

【参考】古今六帖には作者名の記載がないが、所載欄の古今集に「はるみちのつらき」、定家八代抄に「春道列樹」（五七二）とある。

二四八 ものおもふとすぐる月日もしらぬまにことしはけふにはてぬとかきく

【異同】ナシ

【現代語訳】もの思いをしていて過ぎゆく月日も気づかずにいるうちに、今年は今日で終わってしまうとか聞くことです。

【語句】○ものおもふ もの思いにふける。恋のものの思いをいう場合が多い。○はてぬとか 所載欄の敦忠集に「なりぬとか」とある。

【所載】後撰集・冬・五〇六／敦忠集Ⅰ・一三八／俊成三十六人歌合・四三／時代不同歌合・一五七／六百番陳状・五二／大和物語・九二段・一三七

【参考】作者名の記載がないが、所載欄の後撰集・敦忠集・俊成三十六人歌合・時代不同歌合から、藤原敦忠の詠と確認できる。後撰集や敦忠集には、年を経て言い寄っていた「御匣殿別当」という女性に「師走の晦日」に贈った、と詠歌事情が付されている。

二四九 としくれてはるあけがたになり行ばはなのためしにふれるしら雪

【異同】ナシ

【現代語訳】一年も暮れて明ければすぐ春になる時なので、花の手本として降り積もった白雪であるよ。
【語句】○はるあけがた 明ければすぐ春という頃。「暮れ」に「明け」で対比させる。「はるあけがた」の例として後世のものだが、六条修理大夫集に百首歌「除夜」の題で、「門松をいとなみ立つるそのほどに春あけがたになりやしぬらん」(二五〇)や、「おなじ所にて人々、梅告春近題并恋」の詞書で「雪のうちにつぼみにけりな梅の花春あけがたになりやしぬらん」(六六)などがある。○なり行ば 桂宮本・大久保本に「なりゆけば」と表記するように、「なりゆけば」と読んだ。二四五番歌に比して、時を連続性の中に捉えている。○はなのためし まだ咲かない花の手本、の意。○ふれる 降れる。所載欄の後撰集には「まがふ」とある。

【所載】後撰集・冬・五〇〇

二五〇 やまのはにゆふひさしつゝくれぬればはるにいりぬるとしにぞありける
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】山の端に夕日がさしながら落ち最後の日が暮れると、もう春に入りはじめていた年なのであった。
【語句】○やまのはにゆふひさしつゝ 冬の澄んだ空に美しい落日が山の黒く濃い影を作る。○くれぬれば 暮れてしまったので。この年最後の日が暮れると、年も暮れるのである。所載欄の貫之集には、「くれゆくは」とある。○はるにいりぬる 年が暮れてもう春に入っていた、の意。『貫之集全釈』は「年内立春ですでに春になつてしまっている年だったのだ」と解するが、「年内立春」に触れる記述が見出せなかったので採らなかつた。
【所載】貫之集I・四一五
【参考】「としのくれ」題の最後の歌である。この年末歌には、「やがて来るものの方へ向かつてはたらく感得力」「まさに未来へ入りつつあるその時間の感知」が指摘される(山下道代『伊勢集の風景』臨川書店、二〇〇三年)。なお、作者名貫之は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

あまのはら

二五一 あまの川くものなみたち月のふねほしのはやしにこぎかへるみゆ
拾八雑上 人丸 くら集
その海に集